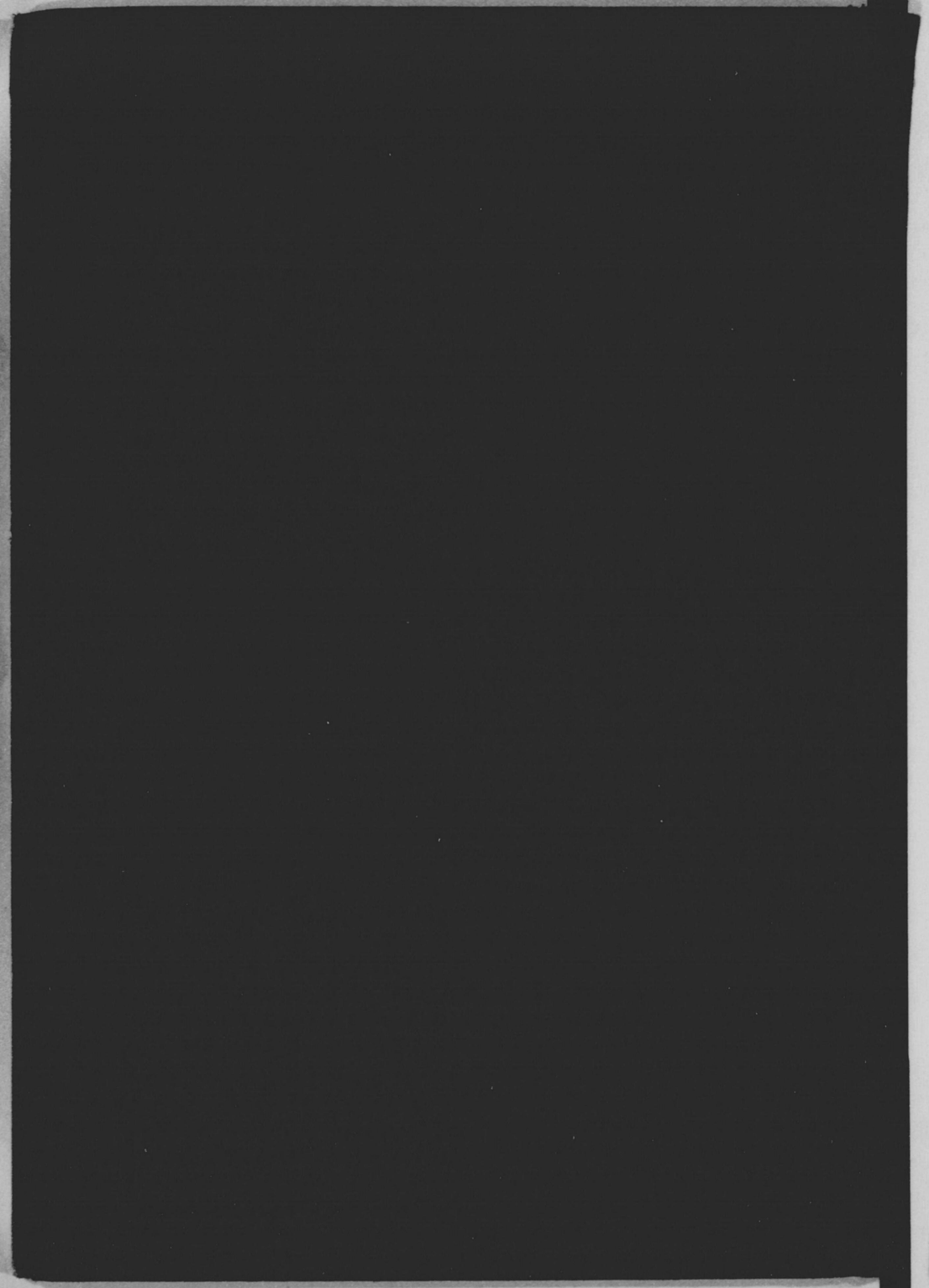


0025247000

③

0025247-000

３３４．７３５９－Ｔｏ５４５ｏ

和蘭の南洋植民史

鳥養太一郎・著

丸善

第１部

１９４１　２版

ADE

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

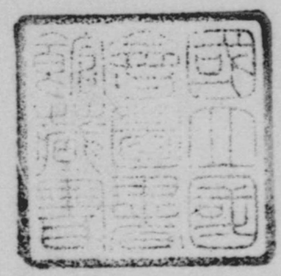
南洋經濟研究所　鳥養太一郎著

和蘭の南洋植民史

第一部

南洋經濟研究所藏版
丸善株式會社發行

334.7359
To545a



33636

序

近時日支事變、第二次歐洲大戰勃發して以來、大東亞共榮圈の完成を期し南方政策確立の必要大いに認識されるに至れり。されど我國の地理的、政治的且つ經濟的環境を深く省察するならば、敢て今日の高聲を俟たずと雖も、南方開拓は我國にとり天與の使命たるを知り得るなり。而して南洋の天地たるや數世紀來白人の經營蠶食に委ねられ、概ねその植民地として今日に至る。和蘭領東印度はその尤なるものにして、政治的にも經濟的にも南洋に於て中樞の地位を占めるのみならず、和蘭の同地域に施行せる政策は完璧の搾取體制を確立し、少數民族を以てする多數民族支配の立場より見て實に世界の植民政策の模範と稱せらるゝ所なり。されば彼等の東印度支配の歷史を回顧し、その政策を檢討するは、我等が今日南方政策を考ふるに當り、等閑視し得ざる

所と云はざるべからず。然るに從來我國に於てかゝる調査の見るべきものなきは眞に遺憾とする所にして、本研究所は夙にその調査編纂に志せしが、その一部の完成を見たるを以て此處に上梓せし所以なり。本書が南洋に關心を有せらるゝ諸賢に何等かの參考を供するを得ば、以てその使命は達せられたるものとす。猶、本調査は本研究所囑託鳥養太一郎之を擔當せり。

昭和十五年十二月

南洋經濟研究所　理事長
海軍少將　糟谷宗一識

はしがき

昭和十三年八月以來本研究所發行の「研究資料」に連載して來た「和蘭の南洋植民史」が、或る程度の進捗を見たので此處にその一部をまとめて上梓する事とした。今後も調査の進み次第引きつゞいて刊行して行く豫定である。本書は標題の示す如く南洋に於ける和蘭人の活動の歴史の一般的叙述をその目的とする。從來我が國に於ける南洋に關する研究分野の中で、かゝる歴史的方面は最も閑却されて居た一であるが、本書はこの缺陷を補ひ南洋に關心を寄せらるゝ一般諸賢に對し概括的參考を供せんとする啓蒙的使命を有するものである。されば之に於いては學術的研究としての立場からその價値を問はるべきものではなく、個々の事實に關する精密な究明・考證は出來るだけ回避せざるを得なかつた。史料の點でも努めて根本史料に拘泥せず、概ね歐人の諸著書に依據してまとめた。我が國に於てかゝる種類の調査に關する根本的史料を渉獵する事は可成り困難な事情にあるのみならず、本書の使命から考へてそれは決定的問題ではないと考へたからである。

和蘭人の南洋植民史を考へる前にそれ以前の歐人の活動を見て置く必要のある事は云ふまでも

ない。その故に序說に於て蘭舶來航以前の歐人の經營の歷史を概觀した。又爪哇島は蘭領印度のみならず南洋全般に於て最も樞要の位地を占め、その經營の歷史は和蘭南洋植民史特に東印度會社時代のそれに於ては、極めて重要な意義を有するものである故、特別に一章を設けて比較的詳細な叙述を試みた。

地名及び人名は同一のものであつても、英、佛、蘭それ〳〵の資料により異るものがあるが、努めて和蘭側の呼稱に從つて統一せんと試みた。しかし、完璧は保し難く誤れる所はよろしく御叱正を乞ふ次第である。

本書に於ては Valentyn 氏の「新舊東印度誌」(Oud en Nieuw Oost-Indie") を使用したが、同書は現在一七二四年 Dordrecht 及び Amsterdam 出版のものと、一八六三年 Amsterdam 出版の縮刷たる Keijzer 版の二種あるが、專ら前者による便宜を得た。Fruin Mees 女史の「爪哇史」(Geschiedenis van Java) の使用に際しては、松岡靜雄氏の好譯を參考にし多大の便宜を得た。此處に同氏の靈に厚き感謝と尊敬の念を捧げる次第である。又本書挿入の圖版は東洋文庫所藏の前記「新舊東印度誌」より撮影せるものである。

本書の編纂に當りては多數の方々の御指導と御鞭撻を忝うした。殊に貴重なる圖書の借覽又は貸與の便を賜つた東洋文庫主事岩井大慧先生を始め庫員各位、滿鐵東亞經濟調査局雪竹榮氏、中村孝志氏並びに局員各位の御芳情を忘れる事は出來ない。此處に謹んで感謝の意を述ぶる次第である。又早大教授清水泰次・出石誠彥・川又昇各先生からも御教示と御鞭撻を賜つた。厚く御高恩を謝するものである。

猶本研究所理事長海軍少將精谷宗一閣下の調査事業に對する深い御理解と所員各位の溫い御協力に惠まれて、本書は上梓の運びに至つたものである。

昭和十五年十二月十九日

南洋經濟研究所圖書室にて

筆者識

目次

序説　蘭舶來航以前南洋に於ける歐人及び日本人……一

第一章　初期に於ける和蘭の南洋經營……七一

第一節　和蘭人の來航……七一

第二節　和蘭の進出と英、蘭、葡（西）の爭覇……一一六

第二章　和蘭の爪哇島征略……一六五

第一節　和蘭東印度會社とスルタン・アグン治下の
マタラム國との關係……一六五

第二節　トルナ・ジアヤの叛亂……二〇七

第三節　バンタム及びチエリボンの和蘭東印度會社服屬……二四

第四節　スラバテイの叛亂と爪哇王位繼承戰役……二六三

第五節　支那人の叛亂、マタラム國の解體バンタムの叛亂……三一八

第三章　和蘭東印度會社の外領經營……三六四

第一節　和蘭東印度會社の外領に於ける發展……三六四

第二節　和蘭東印度會社の外領に於ける制覇確立……四三〇

100°
110°
120°
130°
20°
10°
CHINA
TONKIN
HAINAN
LAOS
ANNAM
SIAM
Ayudhia
CAMBODJA
COCHINCHINA
Singora
Patani
MALAKKA
Atjeh
Pedir Pase
ZUID CHINEESCHE ZEE
Brunei
BORNEO
LUZON
Manila
MINDANAO
GROOTE OC
106°
108°
Onrust
Bantam
Anir
Batavia
Indramaya
Pamanoekan
Cheribon
Royaume de Bantam
Royaume de Jakatra
Royaume de Cheribon
R. Tangerang
R. de Bâtavia
R. Bacassie
R. Karrawang
R. Indramaya
N
7°
8°
INDISCHE OCEAAN
106°
108°

120° 130° 140° 150°

CHINA

LUZON

Manila

MINDANAO

Brunei

BORNEO

E

GROOTE OCEAAN

Palao

Guam

106° 108° 110° 112° 114°

JAVA - ZEE

INDISCHE OCEAAN

N

7°

8°

Onrust

Bantam

Anir

Royaume de Bantam

Ontong Java

R. Tangerang

Tangerang

Batavia

R. de Batavia

R. Bacassie

R. Karrauang

Samoera

Pamanoekan

Indramaya

R. Indramaya

Cheribon

Royaume de Cheribon

Royaume de Jakatra

Tegal

Kartanagara

Samarang

Torrabaja

Japara

Jewana

R. Jawana

Rembang

Demak

R. Demak

Kartasoera

Matagam

R. Lassem

I. Madoera

Toebang

Cidajoe

Arosbaja

Ambalega Samanap

Pamakassam

Sampan

Grissik

Soerabaja

Pasoeroeang

Panaroekang

Balamboang

Jagaraga

Madion

Mt. Loewoe

Panaraga

Kediri

Dj-pang

10°

ZUID CHINEESCHE ZEE

GROOTE OCEAA

Patani

Atjeh

Pedir Pase

MALAKA

S. MALAKA

Malaka

Bintan

Brunei

BORNEO

Menado

Ternate
Tidor
Makian

Gilolo

0°

SUMATRA

Pontianak

S. MAKASSAR

Batjan

Djambi

CELEBES

Palembang

Bandjermasin

Ceram

Amboina

Hitoe

Banda

S. SOENDA

JAVA - ZEE

Makassar

Boeton

BANDA - ZEE

Bantam

Batavia

Cheribon

Semarang

Madoera

FLORES - ZEE

JAVA

Soerabaja

Jogjakarta

Lombok

Flores

Bali

INDISCHE OCEAAN

ALFOEREN - ZE

Sumbawa

Sumba

Timor

10°

AUSTRALIË

100°

110°

120°

130°

GROOTE OCEAAN

BORNEO

Brunei

Menado

Ternate
Tidor
Makian

Gilolo

Batjan

S. MAKASSAR

CELEBES

Bandjermasin

Ceram

Amboina

Hitoe

Banda

ZEE

Makassar

Boeton

BANDA - ZEE

NIEUW - GUINEE

Madoera

Semarang

Soerabaja

Djakarta

Lombok

Bali

Flores

Sumbawa

Sumba

Timor

FLORES - ZEE

ALFOEREN - ZEE

AUSTRALIË

0°

10°

120°

130°

140°

150°

初期の和蘭東印度經營の功勞者

ヤン・ピーテルスゾーン・クーン

和蘭の南洋植民史

序　説

——和蘭人渡來前の外南洋に於ける歐人及び日本人

歐洲人渡來以前歐洲と南洋との關係

歐洲と南洋との間の最初の關係として我々の確實に知り得る所のものは有名なマルコ・ポーロの旅行である。彼は中央亞細亞を經て支那を訪れ、その歸途を海上にとり一二九二年スマトラ島に立ち寄つたのである。之れ以後數世紀の間歐洲人にして南洋の地を訪れたといふ事實は、少くとも文獻の上では知る事は出來ない。然るに十五・六世紀の所謂文藝復興期を迎へるや、歐洲に於ける各般に亘る諸技術の進歩と開拓精神の昂揚はこゝに一大植民活動を展開する事となつたのである。而してそれは一四九二年のコロンブスのアメリカ大陸發見、一四九六年のヴアスコダ・ガマの喜望峰迂回と印度發見等の具體的事實として史上に現れたのだ。勿論これ以前と雖も歐洲と印度や南洋との間に全く交渉がなかつたのではなく、肉豆蔻、丁香、胡椒等の產地として印度

の名は歐洲人に廣く知られて居たのであつて、たゞ著しい人的交流や彼等の具體的な植民的活動を見る事が出來なかつたゞけである。卽ちこの强烈な匂を有する南洋特産品は、モルッケン群島よりマラッカの市場を經て印度のグゼラットにもたらされ、それより一は波斯灣から小亞細亞を通つて黑海の東北を廻り、一は波斯灣から紅海に入つて埃及より地中海を經てベニス又はゼノアに至り、一は波斯灣からユーフラテス河谷に入つてパレスチナを經て地中海に達する三の經路を辿つてアラビヤ及びグゼラットの商人の手によつて歐洲に輸入され、常に兩地域の間には密接な通商關係が成立して居たのである。當時歐洲市場に於ける上述の香料類や東方特産品に對する需要は極めて强く、ベニス、ゼノア等の都市はその仲繼市場として繁榮を唱はれたのである。然るにトルコ帝國が勃興し一四五三年のコンスタンチノープルの陷落を以てビサンチユーム帝國が沒落した爲、上述の歐洲と東方とを結ぶ通商路が遮斷され、東洋特産品の歐洲輸入は頗る困難な事情に置かれるに至つた。此處に於て歐洲と東方との通商路をトルコ人の勢力の及ばざる安全な地域に求める必要に迫られたのであるが、かゝる歷史的任務を擔當したのは葡萄牙人であつて、ヴァスコ・ダ・ガマの喜望峰迂回航路の發見と印度到達を以てこの問題は解決せられたのである。

ヴアスコ・ダ・ガマにより印度が發見されるや、葡萄牙人は陸續とこの未知の新世界に渡航し

(4)Goa

(1)Kotsijn
(2)Alphonso Albuquerque
(3)Ormuz

(5)Hindoe
(6)Madyapahit
(7)Padyaoyaran

コチン(1)を根據地としてアラビヤ人と戰つてその商權の開拓に努力したのであつた。卽ちアルフオンソ・アルブケルケは(2)幾多の困難を犯して波斯灣頭のオルムズ(3)を占領して、波斯灣や紅海方面と印度洋との航路を支配し、一五一〇年には新にゴア市(4)を開き、此處に印度洋沿岸に於ける葡萄牙勢力の基礎を確立し、印度貿易の獨占に成功したのである。しかし、葡萄牙の東洋貿易の主要な目的が香料の獲得にあつた以上、その勢力は印度洋の沿岸から香料の仲繼市場たるマラッカを經てその原產地の東印度諸島に向つて延びて行く必然性があつた。既にゴアの建設に先だち葡萄牙のマラッカ經營はその端緒を開く事となつたのであるが、かゝる時に當つて南洋各地は如何なる狀態にあつたであらうか。

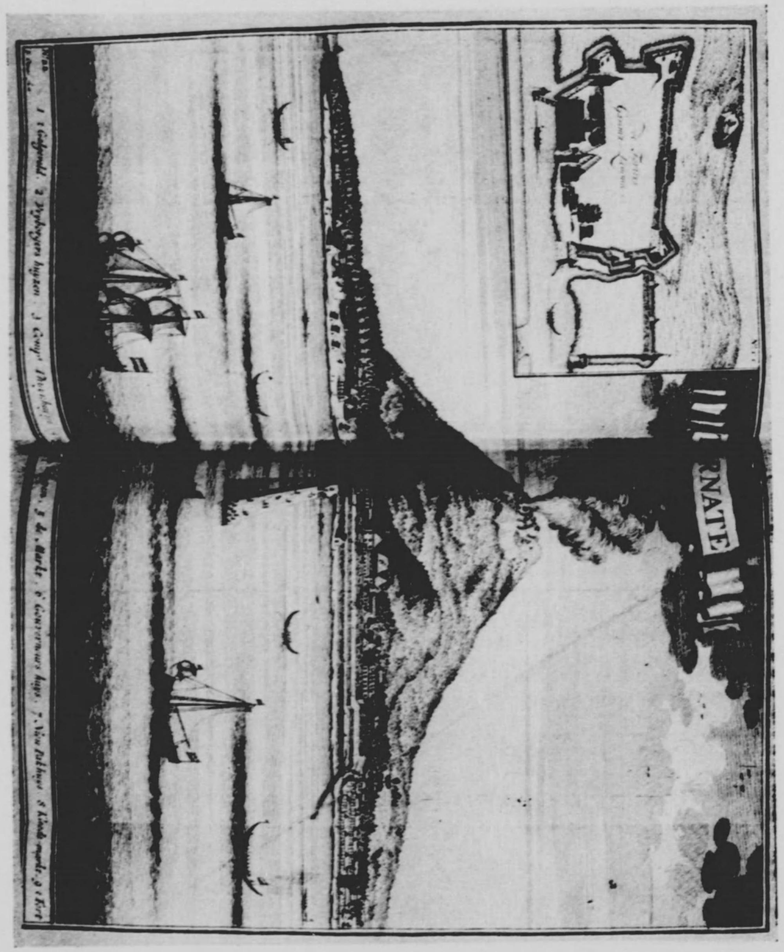
歐洲人が印度に來航せる頃、南洋に於てはヒンヅ(5)敎國たるマジヤパイト(6)國やパジヤジヤラン(7)國は衰亡し、各地に新たに回敎王國が勃興しつゝあつた。十五世紀に行はれた回敎の移入と傳播は實に南洋各地に一大變革をもたらし、爪哇から東印度諸島の大部分に跨つて居たマジヤパイトのヒンヅ王國の沒落を促進した。貿易中心地としての マラッカの興隆も常然この回敎の傳播と密接な關係があつた。十五世紀の初頭にあつては、馬來半島沿岸の諸小國はすべてシヤムに服屬し、或ひはそれと朝貢關係に立つて居た。マラッカも同樣その例に洩れなかつたが、十五世紀後

半に在つては、西南亞細亞と極東及び南洋の水域を結ぶ海峽に臨むその地理的好條件に加へて、マラツカのスルタンは回教をとり入れる事によつて、之等各地域間の海上貿易の支配者たるアラビヤ人と結び、自國を西南亞細亞と東亞細亞間の貿易の中心地に發展せしめる事に成功したのである。アラビヤ、波斯、印度より彙集する回教徒はこの海港に於てスルタンの保護をうけつゝ、ヒンヅ人、シヤム人、支那人と共に貿易を營んだのであるが、この他に爪哇人も又多數來航した。此處に於てマラツカは仲繼貿易の利益によつて大いに繁榮し、巨大な水軍を常備してシヤムの桎梏より脫し近隣の馬來諸小國を服屬せしめるに至つたのである。

葡萄牙の第一回マラツカの遠征

葡萄牙人が印度に根據地を初めて建設した時既にマラツカは當然その影響を受くべき運命にあつた。印度を經て歐洲に輸入せられる南洋特產の高價な香料類はすべてマラツカの仲繼市場により供給されて居た。而してそれは葡萄牙人の競走者たるアラビヤ商人の支配する所であつたのであるが、彼等は葡萄牙人の貿易を妨害する事と商品の價格を高く維持する爲、出來る限り葡萄牙人を排除し、その勢力の及んで居ない安全な港にこの香料を運搬したのである。かくして香料を目的とする限り葡萄牙の東方政策は、直ちにマラツカと直接的關係を樹立し、その市場を支配する必要に迫られたのである。既にアルブケルケが印度に向つて出發する際、葡萄牙王マニエル(1)

(1)Manuel



圖取見城マムラ・マムガと觀景の港テナルテ紀世八七十

は之に關する命令を與へて居るのであるが、一五〇八年四月には專らマラッカ經營を目的として四隻の船を率ゐてディエゴ・ロペズ・デ・セクイラ(2)をリスボンから出發せしめた。セクイラは印度のコチンで數隻の在印度葡萄牙船を麾下に加へ、一五〇九年九月マラッカに向つて同地を出帆し、セイロン島を經てスマトラ島北岸のペディル(3)とパセ(3)の二港を訪れた。これらの港は胡椒の重要な輸出港であつて、セクイラは土王と通商關係を結んだ後(註1)、更にアチエ(4)國に赴き各地に標杭を立てた。(註2)來航の記念といふのが表面上の名目であつたが、實際には發見の證據卽ち領土的權利の標示であつた事は疑ひない。アチエからセクイラの船隊はマラッカに向つたのである。

〔註1〕 P.A. Tiele ; De Europeeiern in den Maleisch Archipel, Bijdragen tot de Taal, Land en Volken-kunde van Nederlandsch Oost Indie. Deel, 25. P. 332—333

〔註2〕 John Crawfurd ; History of the Indian Archipelago. vol. 2. P. 396.

マラッカの支配者スルタン・ムハメド(1)は變轉常ならざる陰險な專制的人物であつて、葡萄牙人が入港するや最初に彼等を訪れた支那人は、織物や日用品の取引を行つた後、馬來人の信用すべからざる所以を警告したのである。しかしスルタン・ムハメドはセクイラ一行を鄭重に待遇し通商協定の締結を承諾し、商館設置と商品貯藏の便宜を計つて家屋の提供を申し出でたので、葡

(1)Sultan Muhamed　(1)Diego Lopez de Sequeira
(2)Pedir
(3)Pase
(4)Atjeh

マラッカに於けるセクイラ船隊

葡萄牙人も安んじて上陸し何等憚る所がなかつた。然るに之を見て不滿を抱いたのはアラビヤ商人である。葡萄牙人のため彼等が印度に於て苦汁をなめた經驗に鑑み、マラッカに於ける自己の商權の沒落を懼れ、不安と敵意に滿ちた眼を以てセクイラの來航を迎へた事は想像に難くない所である。されば彼等は葡萄牙人が大船に乘じ武器を携へて居る事實を擧げ、マラッカを征服し服屬せしめんとする野心を抱いて居る證據であるとスルタンに警告し、その反葡萄牙政策を煽動したのである。此處に於てスルタンは俄に心を變して兵を整へ、陸上に在る葡萄牙人を捕へると共に在泊中のその船隊を襲撃した。セクイラは所有兵力を以てしては到底マラッカの占領は困難であり、且つ季節風の時期も終らんとして居る際でもあつたので、麾下の船長等の言を容れてそのまゝマラッカを脫して印度に歸還したのである。(註3)

葡萄牙の第二回マラッカ遠征

(1)Francisco d' Almeida
(2)Vic -Koning
(3)Diogo Mendes de Vasegoncelos

〔註3〕 P. A. Tiele ; De Europeenieren in den Maleich Archipel. B. t. d. T. L. e. V. Deel, 25 P. 334.

この頃印度に在つてはフランシスコ・ダルメイダ(1)に代つてアルブケルケが副王(2)の任に就いて居たが、彼は專らゴアの經營に沒頭し、一五一〇年三月ディオゴ・メンデス・デ・ヴアスコゴンセロス(3)が國王からマラッカ征服の命を受けて來着しても、その船隊をゴアの攻撃に參加せしめてマラッカに出帆する事を許さなかつた。勿論彼はマラッカの貿易上の重要性を認識し、東方貿易を支配し葡萄牙の獨占權を確立するためにはこの地に根據地を建設しなければならぬ必要は痛感して居たのであるが、セクイラ船隊の船長の報告に基き、同地の占領には强力な兵力を要する事情が判明したので、充分な準備が整へられ適當な機會が到來するのを待つて居たのである。さればゴアの占領が完了するや彼はマラッカ征服を決意し、十九隻の船舶と葡萄牙人八百、マラバール土民兵六百より成る船隊を組織し、季節風を待つて一五一一年五月二日コチンを出帆しマラッカに向つたのである。(註4)

マルッカ征服戰

(1) Pahang

〔註4〕 P.A. Tiele ; Ibid. B. de T. L. en V. Deel. 25 P. 335—336.

アルブケルケがマラッカに到着した時、恰もマラッカ王は暹羅と交戰中であつたが、直に引き返し、隣國のパハン王(1)の援助を得て防備を整へた。アルブケルケの攻撃に對して彼は三萬の兵を以つて對抗したのである。アルブケルケは捕虜の返還、要塞を築造する爲の土地提供及び賠償金を要求したが、マラッカ王は之を拒絕して愈よ戰備を整へた。かくして二十四日餘りの時日を費したが遂に談判は成立しなかつたのである。此處に於いて、アルブケルケは七月二十四日、上陸を强行する事に意を決した。彼の攻撃計畫は、市街を二分して掠奪し、河沿ひに進軍して橋の處で兩軍が合するといふのである。この橋は兩市街の合する處で、マラッカ王は此處に防塞を築

いて防いだ爲め葡萄牙軍は橋の處迄は容易に達する事が出來たが、此處に於いて激烈な戰鬪が行はれた。渴と疲勞の結果、葡萄牙人は一度占領した橋を放棄し一旦後退するの已むなきに至り、元氣恢復したるのち、再び攻擊を續行して遂に占領する事が出來たのである。マラッカ王は遂に支へ切れずして逃れ、マラッカより數哩のムアラ(1)に踏み止つて最後の抵抗を試みたが、それも空しくマラッカは完全に葡萄牙の手中に歸したのである。(註4) 勿論武器の優秀性がこの勝利の決定的な要因であるとは云へ、僅か千四百——しかもその中六百はマラバール土民兵——の寡兵をもつて、能く三萬の大軍を粉碎したこの勝利は、歐人の東漸史を飾る偉大な事業と云はなければならない。

(1)Muara マラッカに於けるアルブケルクの敵

〔註5〕 John Crawfurd; Ibid. Vol. 2, P. 398—400.

マラッカ占領以後、アルブケルケは戰を避けて各地に逃れて居た商人等を、寬大な政策と貿易の自由を認めるといふ約束の下に呼び寄せる事になつた。かくして再びマラッカには各地の回教徒、マライ人、ヒンヅ人が集り來り、昔日の殷盛が回復されたのであるが、アルブケルケは特にヒンヅ人と回教徒の上に各一人の統領を選任して、當該居留民の統治に當らしめる事とした。前者の統領としてはかねて葡萄牙人と秘密裡に諒解の成立して居たマラッカの著名な商人ニナチエツ(1)が任ぜられ、後者の統領には同じくマラッカの有力者であり且つ野心家たるチミユタ・ラジヤ(2)が選ばれた。しかし、チミユタ・ラジヤは葡萄牙人がヒンヅ人に特別に庇護を與へるのを見て、將來回教徒に迫害が加へられん事を恐れ、スルタン・ムハメドとその一味と氣脈を通じ、マラッカ在住の不平分子と共に葡萄牙人の專制と搾取を非難して陰謀を企てたのである。アルブケルケはかゝる事實を知るや直ちにチミユタ・ラジヤとその一族を捕へて刑に處したのであるが、かくの如き苛烈な恐怖政策はマラッカ在住の回教徒たる爪哇人の感情を刺戟し、強い敵意を彼等に抱かしめる事となつた。卽ちパチ・カチル(3)を首領とするその一黨はヒンヅ人に對して種々報復的行爲に出で、陰に葡萄牙人に對して敵意を示したのである。アルブケルケはこの對策に頗る困惑し、彼に曾つてのチミユタ・ラジヤの地位を與へる事によつて懷柔し、辛うじてその態度を緩和せしめる事を得たのである。(註6)

(1)Ninachetu
(2)Timuta Radja
(3)Pati Katir
(4)Ruy de Brito Potalin
(5 Fernão Perez d'Andrade マラッカ近郊のジヤバラの攻擊

〔註6〕 P. A. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel, 27 p. 340—341.

一五一二年一月アルブケルケはマラッカを去つてコチンに向つたが、彼の後にはルイ・デ・プリト・ポタリン(4)の下に三百人の守備兵と、フエルナオ・ペレズ・ダンドラーデ(5)指揮下の十隻の船舶が殘留し、新根據地の警備に任じた。舊い土着勢力はアルブケルケによつて一應破壞され

(1) Japara
(2) Pati Unus

たが、未だ全的に覆滅を見た譯ではなかつた。パチ・カチルは葡萄牙の支配を受くるを屑とせず既にマラッカを去つて居たが、爪哇人の居住する郊外にあつて引き續き不穩な態度を示して居たし、スルタン・ムハメドの水軍はマラッカ海峽に出沒して、東印度諸島からマラッカへの物資の補給路を脅して居た。さればフエルナオ・ペレズ・ダンドラーデは印度から援軍が來着するのをまつて、これ等敵對勢力の掃蕩を行ひ、パチ・カチルを近郊より驅逐し更にスルタン・ムハメドの水軍を擊破してマラッカの安全を確保したのであるが、この後建設間もないこの葡萄牙植民地は別の方面より新なる脅威を受ける事となつた。卽ちそれは爪哇島のジャパラ(1)からの攻撃であつて、同國の王パチ・ウヌス(2)はかねてから多數のマラッカ在住の爪哇人の協力を得て同地を占領せんとする計畫を抱いて居たが、たま〳〵歐洲人が既にその征服に成功した事を知り快からず思つて居た。然るに葡萄牙のマラッカの駐在兵力が極めて少數であるといふ報告を得るや、容易にその勢力を驅逐するを得と考へるに至つた。かくの如き際に當りパチ・カチルがマラッカより逃れ來り大いにパチ・ウヌスの野心を煽動したので、彼は直ちに決意し大小百隻の船舶と一萬乃至一萬五千の兵を率ゐてジャパラを出發しマラッカの征討に向つた。爪哇軍はスマトラ東岸に沿うて北上し、同島の北部より海峽を橫斷し北方からマラッカ根據地を急襲しようとしたのであるが

葡萄牙とスルタン・マホメドの爭鬪

(1) Bintang
(2) Kampar
(3) Raja Abdallah
(4) Lingga

一五一三年の初頭、フエルナオ・ペレズ・ダンドラーデは麾下の船隊を率ゐて之を海峽に迎擊して非常な損害を與へた。此處に於てパチ・ウヌスは葡萄牙の武力が意外にも强大であつて、マラッカの攻略は容易でない事を知り、その企圖を放棄して爪哇に歸還したのである。(註7)

〔註7〕 P. A. Tiele; Ibid B. t. d. T. L. e. V. d. Ned, 25 p. 243

スルタン・ムハメドはアルブケルケにマラッカを追はれてから、一度パハンへと退いたが更に其處からシンガポール海峽のビンタン(1)島に根據地を求めた。この島はマラッカから極東方面に通ずる水路に臨み、この要衝を抑へて東印度諸島の航路を支配しその商船を吸收してこの島を繁榮せしめ、且つマラッカを葡萄牙人より回復しようといふのが彼の計畫であつた。スマトラのカムパル(2)の王ラヂヤ・アブダラ(3)はスルタン・ムハメドの養子であつたが、早くから葡萄牙に歸順して臣屬して居た。スルタン・ムハメドは之を憎みリンガ(4)の王と協力してカムパルを攻擊したのでアブダラは急をマラッカに告げて援助を要請した。葡萄牙船隊は直ちにカムパルの救援に赴いたが戰利あらずして同地はスルタン・ムハメドの手に落ち、アブダラは葡萄牙船に便乘してマラッカに亡命する事になつた。然るにスルタン・ムハメドはアブダラが彼と協力してマラッカより葡萄牙人を驅逐せんと陰謀をめぐらして居るといふ風說を故意に撒布したので、之を信じた葡萄牙人は

(1)Menangkabau

直ちにアブダラを捕へて死刑に處したのである。このような無思慮にして過激な處置は當然土着人の葡萄牙人に對する信賴の念を根本的に動搖せしめ、その結果多數のマライ商人は大擧してマラッカを退去したので、同地への食糧その他必需物資の輸入は極めて困難な狀態となつた。されば葡萄牙人は新たに物資の補給手段を確立しなければならなくなり、スマトラ沿岸の各地に使節を派遣して通商協定の締結を試みしめたのであつたが、漸くメナンカバウ(1)と通商關係を結ぶ事に成功し同地より物資の供給を期待し得る事となつた。(註8)

〔註8〕 P. A. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Ned, 25 p. 346-348.

マラッカはこれ以後葡萄牙領有時代の百三十餘年間、その苛酷な政策の故にマライ、スマトラ爪哇の隣國から屢々攻撃を受け、又饑餓や流行病等の爲に、非常な困窮の狀態に陷つたが、遠隔の地なるが故に印度總督から兎角閑却され勝ち乍らも、重要な商業上の中心地としての命脈を保つて來たのは一に地理的條件に惠まれたる事によるものである。之に加へて、自由港として開放された結果、爪哇、セレベス、支那等の商人が數多集つて、此處にオルムズ及びゴアに次ぐ印度洋の中心地として存續したのである。年々、關稅のみでも七萬ドルに達したといふのであるからその繁榮を推知し得よう。

葡萄牙の東洋遠征はモルッケン征服を目指す

(1)Antonio de Abreu

葡萄牙の第一回モルッケン遠征

前に述べた如く、葡萄牙の東洋遠征の重要目的の一つは、當時最も重要な商品である香料の獲得にあつた。從つてマラッカの占領が確定するや否や、アルブケルケは直に香料の主産地たるモルッケン群島の遠征に着手せんとした。葡萄牙の印度經營はマラッカの占領を當然の日程とすべき運命にあり、而してマラッカの占領は葡萄牙の東洋政策をモルッケン群島にまで擴大せしむべき必然性を含んで居たのである。大きな立場より見れば、モルッケン群島遠征はポルトガルのマラッカ經略の終局、眞の意味の完成であるとも云へる。マラッカ經略は云はゞ一つの手段であつてモルッケン群島遠征こそ本當の目的であつたのである。成る程、マラッカは印度洋と支那海及び南洋を結ぶ連絡地點であつて、其處を確保する者は、印度洋、支那海及び南洋一帶の貿易權を握り得る重要地點であるから、單に商業上の覇權を目的として其處の經略を志したとも思はれるが香料のない印度、南洋貿易は當時としては考へられない。アルブケルケのマラッカ經略の時の胸中には、既にモルッケン群島遠征の計畫がめぐらされて居たものであらう。

一五一一年マラッカの占領が完了するや、アルブケルケはアントニオ・ド・アブリユウ(1)を指揮官とし、三隻の船と一隻のジャンクより成る船隊を組織してモルッケン群島に派遣した。これは歐洲人によつて行はれた最初の同群島の遠征船隊であつたが、出發に際して、アルブケルケは

モルツケンに於けるセラノ

(1)Kambaja
2)Francisco Serao

ド・アブリユウに對し、部下をして何人と雖も自由に上陸せしめざる事、土王には贈物を進呈する事、マラッカその他の港の船舶とは絶對に爭はぬ事等の訓令を與へその輕擧を誡めて居る。(註9)部下を上陸せしめるなとはこれによつて土民との間に紛爭が惹起される危險のある事を恐れた爲であらう。アルブケルケはこの葡萄牙の第一回モルツケン遠征船隊に對して、平和的な通商關係の樹立をその主要な使命として與へ、土着勢力に武力的壓力を加へてその通商目的を達成せんとするが如き意圖は有して居らず、極めて愼重な平和的立場に立つて彼のモルツケン政策を考へて居たものと思はれるのである。

〔註9〕 Danvers, The Portuguese in India, vol. 1. p. 234.

ド・アブリユウの葡萄牙船隊はマラッカを出帆してから、先づ最初に爪哇のグリシクを訪れた。グリシクは歐洲の組織的な遠征船隊がマラッカ以東の東印度諸島に姿を現はすや否や最初に訪れた海港となつた。グリシクから彼等はモルツケン群島を目指しバンダ島に到着した。そして島民がモルツケン群島から載來する香料を、カムバヤ(1)の綿織物と交換して獲得しその通商目的を達成した上、船が破損してこれ以上モルツケン群島への航海を許さなくなつたので好適なる季節風に乘じてマラッカに歸還する事に決した。然るにその途上フランシスコ・セラノ(2)の乘船のみは航路

(1)Nusa-Penju
(2)Hitoe
(3)Assalulu
(4)Ternate
(5)Tidore
(6)Batian
(7)Gilolo
(8)Goa Maccasar

を誤り僚船を失してアンボイナの南のヌサ・ペンジユ(1)なる珊瑚島に於て坐礁した。セラノをはじめ乘組員は海賊の舟を奪取しヒツ(2)島のアッサルル(3)に渡つたが、彼等は此處に於て土民を助けセラム島の住民と戰つて勝利を得たのである。而してこの勝利は近隣に喧傳されてモルツケン群島にまで擴まつて行つたが、當時同群島はテルナテ(4)とチドール(5)とバチヤン(6)及びギロロ(7)の四土王の勢力の對立割據の形勢にあり、その中でも特にテルナテ王のそれが最も强大であつた。彼はセラノ等の評判を耳にするやこの勇武なる歐洲人の武力を自己の陣營に獲得しようとし、兵をヒツ島に派遣した折彼等を招聘してその來島を求めた。これと時を同じくしてチドール王も又セラノ等に招聘使節を送つて來たのであつたが、時間的にテルナテの方が先でもあり且つ强大でもあつたので、彼等は進んでテルナテに赴き王と友好關係を結び、此處に葡萄牙人がモルツケン群島に勢力を伸長して行く基礎が造られたのである。(註10)モルツケン群島の他に、マラッカ占據以後葡萄牙は一五一一年には爪哇島に使節を派遣し、一五一二年にはセレベスのゴア・マカッサール(8)と商議を行つてその領内に商館建設に關する許可を與へられたが(註11)、彼等にとつては爪哇島やセレベス島の經營はモルツケン群島の場合程積極的な意義を有するものではなかつた。彼等の東印度經營は全く香料の獲得に主要目的が置かれてあつたし、且つ印度沿岸に於ける土着勢力や回教徒

との闘争は東印度經營の範圍をモルッケン群島に局限するを必然たらしめ、それ以上他の諸島嶼にまで擴大する餘裕を與へなかつた。さればモルッケン群島以外のスマトラ島を除く他の地域は和蘭人の來航するまで比較的歐洲人の支配に干渉される事なく獨自の生活を營む事が出來たのであるが、マラッカの對岸たるスマトラ島に於てすら葡萄牙の勢力は殆んどその伸展を許されなかつたのである。

〔註10〕 P. A. Tiele, Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel, 25 p. 356–358.

〔註11〕 ohn Horace. The Indian Archipelago, vol. 1. p. 88

スマトラに於ける葡萄牙人

マラッカ占據以後スマトラ島に於ても葡萄牙はその經營に着手した。マラッカ根據地の存立やマラッカ海峽の航路の安全を計り印度との連絡を確保して行く爲にも、同島の沿岸に勢力を扶植する事は葡萄牙にとつて重要な意義を有するものであつたが、計らずも彼等は之に於て幾多の困難に逢着すべき運命にあり、この問題は十七世紀に至つても遂に解決を見ず、スマトラ沿岸の土着勢力は海峽を越へて常にマラッカの存立に脅威を與へる事となつたのである。既にセクイラ船隊のパセ、ペヂル及びアチエ寄港により、マラッカ占據以前に葡萄牙とスマトラ島との關係が開かれた事は述べた所であるが、その後葡萄牙はアチエと商議を開いて同地に商館を設置する事を

得た。然るに馬來半島に於ける葡萄牙の苛酷な土民政策はアチエ人の對葡感情を刺戟して惡化せしめ、その結果彼等は領内在住の葡萄牙人を捕縛しその商館を壓迫したのであるが、葡萄牙人は遂にかゝる反葡運動を阻止し得なかつたのである。(註12)

〔註12〕 John Horace, Ibid. vol. 1. p. 92–95

葡萄牙のパセ占領

然るに當時同島のパセではその執政ヂエイナル(1)は隣國のアル(2)より攻撃を受け、マラッカ、爪哇等に救援を求めて居た。アルブケルケも彼に援助を約したのであるが、種々の障害のため實現し得ぬ間にヂエイナルはマラッカの舊領主スルタン・ムハメドの力によつてアル軍を驅逐し權力を回復した。此處に於て幼主を擁してパセの統治に當つて居た教長マンラナ(3)は難を印度に避けて葡萄牙の副王に援助を乞うたが、ヂエイナルと葡萄牙との通商關係は圓滑に行はれ、胡椒の購入にも何等の障害が感ぜられなかつたので、その要請は容れられなかつた。然るに程なく前記の關係が決裂したので副王はマンラナを助けてパセの內政に干渉する事に決し、アフォンソ・アルブケルケに代つたマラッカ知事ジョルジエ・ダルブケルケにその任務が與へられた。葡萄牙はアルの軍と協力してパセを攻撃し、ヂエイナルを殺して同地を占領した。そしてマンラナの執政の下に幼主を擁立し、城堡を築いて之に百人の守備隊を駐屯せしめ、且つ通商條約を締結して設定

(1)Djeinal
(2)Aru
(1)Manlana

(1)Daja
(2)Radja Ibrahim

價格を以てする胡椒の獨占的購入權を獲得したのである。(註13)

〔註13〕 P. A. Tiele, Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel, 25 P. 366–367.

しかし、スマトラ島に於けるこの最初の葡萄牙の根據地は全く永續的發展を約束されなかつたが、それは彼等の通商及び土民政策の誤謬と客觀的情勢の然らしむる所である。卽ちバセに在つて葡萄牙人はその地に來航する外國船に對して苛烈な排他的態度を以て臨み、極めて獨占的性格の强い通商政策を强行した爲、スマトラ島に來航する外國商人は皆バセを捨てゝ葡萄牙人の支配圈外の安全な他の海港を求めたのである。かゝる時に際してアチエはその勢力を四隣に伸長して來たのであるが、その繁榮の基礎として葡萄牙の通商政策に對立する外國商人の同國に對する支持が想到されるのであるが、特にアラビヤ商人がアチエの發展の經濟的基礎に貢獻を爲した事を忘れてはならない。アチエは葡萄牙人の來航の當初にあつては隣國ダヤ(1)と共にペヂルの一藩屬國であつたが、一五二〇年頃に於てはラヂヤ・イブラヒム(2)の治政の下に大いに國力を充實せしめ、先づダヤを併呑した後曾つての宗主國たるペヂルを攻撃して遂に之を征服した。ペヂル王はバセに逃れて葡萄牙人の援助を求めたので、バセ駐屯の葡萄牙軍は彼を城内に庇護し、侵入して來たアチエ軍の攻撃を退けた。アチエ軍は城を包圍して持久戰に出でたので一五二二年五月葡萄

(1)Andri Henriquez
(2)Antonio de Mir.n-la d'Azevedo
(3)Dom Tristão de Menezes
(4)Sultan Bajang
(5)Antonit Brito

牙の印度副王はアンドレ・ヘンリツケズ(1)等の援隊を派遣して防備に任ぜしめた。然るに長期の籠城の結果糧食は缺乏し、城兵は疲勞して戰意を喪失したので、ヘンリツケズは後退を決意し一五二四年五月バセの城を放棄してマラツカに退いたのである。このようにスマトラ島に於ける葡萄牙の根據地は短期間で崩壞し、マラツカの對岸は全くアチエの支配下に歸し葡萄牙勢力の侵入を拒否する事となつたのである。(註14)

〔註14〕 P. A. Tiele, Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel, 25 p. 385–387

一五一一年のアントニオ・デ・アブリユヴの遠征によつて、モルツケン群島の實情がもたらされ香料の豐な產出が明かにされて以來、一五一三年にはアントニオ・デ・ミランダ・ダゼベド(2)の船隊を、一五二〇年にはドム・トリスタノ・デ・メネゼス(3)の船隊を派遣して香料貿易を行はしめ、テルナテやチドールと友好關係を持續して葡萄牙はモルツケン群島の經營に努めたが、テルナテ、チドールも又共に葡萄牙船隊に物產を提供し、その歡心を買ふべく汲々たる有樣であつた。特にテルナテのスルタン・バヤン(4)はセラノを通して屢々葡萄牙人の領內居住の希望を開陳した。然し葡萄牙側の事情は容易に之に應ずるを許さぬ狀態にあつたが、一六二一年アントニオ・デ・ブリトオ(5)の率ゐる五隻の船隊が印度よりマラツカに入港したので、マラツカ知事は之をモルツ

(1)Tceban
(2)Fernão de Magalhães
(3)Vaico nunnes Varboa
(4)Charles V.

ケン群島に派遣し土王の希望に應じて積極的經營の任に當らしめる事とした。ブリトオはピンタン島の攻撃に參加した後、一五二一年十月マラッカを出帆して東印度諸島に向ひ、爪哇のツバン(1)、グリシクに寄港したが、グリシクに於てブリトオはモルッケン群島より歸還した爪哇船より、葡萄牙船に非らざる歐洲船の同群島來航といふ意外な事實を耳にしたが、彼は之がフエルナオ・デ・マガルハネス(2)——卽ちマゼランの率ゐる西班牙船である事を知つた。(註15)この西班牙船の出現は歐洲と印度との航路を獨占し、印度及び南洋に於ける貿易を支配して他國の介入を拒否して居た葡萄牙人にとつて正に晴天の霹靂とでも云ふべき意外な事實であつたに違ひない。葡萄牙人がモルッケン群島に到着してから間もなく、一五一三年ヴアスコ・ヌンネス・ヴアルボア(3)がこの群島を見聞して、其處に於ける葡萄牙人の覇權が確められたのであつた。しかし地球そのものゝ廣さに對する無知識や大きさの輕視等から、モルッケン群島が單に印度の東に在るといふ事を聞いたゞけで、マゼランは西廻り航路によつて容易に之に達しようとしたのである。しかし乍らこの計畫は葡萄牙王の用ふる所とならなかつたので、彼は西班牙に去つた。そしてチャールス五世(4)にモルッケン群島は印度の遙か東方に在るから、西班牙領半球に屬するであらうと述べて、大にモルッケン遠征を强調した。(註16)こゝに於いてチャールス五世は五隻の船と二百三十五人の乘

マゼランの遠征

(1)C. Verde
(2)Guinea
(3)Ladrone I.
(4)Brunei

組員を以て一船隊を組織してマゼランの指揮下に委ね、一五一九年八月十六日出帆せしめたのである。一行はヴエルデ岬(1)を廻り、ギネア(2)海岸から赤道を越えて大西洋を横斷し、ブラジル海岸に到着した。そして一五二〇年十一月に太平洋に入り、やがてラドロン島(3)を發見し、聖ラザルス祭日にヒリツピン群島の北端に到着した。それから更にミンダナオ、セブー島等を發見したのであるが、マクタンといふ小島でマゼランは土民の爲に殺されて終つたのである。殘つた者は更にボルネオ西北岸のブルネイ(4)に行き、其處から遂にモルッケン群島に入りチドールに到着したのである。それは一五二一年の七月の末の事であつた。彼等はチドール王の歡迎を受け、この地に十二人の者を留めて、高價な産物を多量に積載したうへ歸航の途に就いた。(註17)こゝに最初の世界周航が完成されたのである。

〔註15〕 P. A. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel, 25 p. 359.
〔註16〕 Blair & Robertson; Philippine Islands, Vol. I, P. 26.
〔註17〕 John Horace; Ibid. Vol. I. P. 102-109.

ブリトオの船隊はグリシクからバンダ島を經てバチャン島に赴き、同島の住民が一五二〇年にトリスタノ・デ・メネゼスの船隊に加へた迫害の報復として村落を燒き拂つてチドール島に向つ

(1)Ka'tjili Taruwés
(2)S. Joao Bautista
(3)Almansor

た。チドール王は彼等を自領内に定住せしめるべく勸誘に努めたが、ブリトオは之を拒絶したのみならず同島在住の西班牙人を捕へその商品を沒收してテルナテ島に赴いたので、チドール王は此處に葡萄牙人に對して深刻な敵意を抱くようになつたのである。テルナテでは當時既にスルタン・バヤンはその親葡政策が禍して馬來商人等に謀殺され、一時反葡政策が支配してセラノ等は除かれて居たが、バヤンの甥のカイチエリ・タルウエス(1)(註18)が執政となるに及び、再び親葡政策が復活し西班牙人の來航に際してはそれをマラッカに通報して友誼的態度をとつて居た。さればブリトオは來島するや直ちにこの新しき主權者と交涉し、領內に城砦構築のための敷地を提供せしめる事に成功し、一五二二年六月二十四日を以てその工事に着手した。この城は聖ジョアオ・バウチスタ(2)城と命名され、爾後モルッケン群島に於ける葡萄牙根據地として重要な役割を果す事となつた。かゝる葡萄牙とテルナテとの密接な協力關係の成長に對し、チドール王アルマンソル(3)は嫉妬と不安と敵意の眼を注いで居たが、たま〳〵カイチエリ・タルウエスがスルタン・バヤンの未亡人たるアルマンソルの娘とテルナテ王位の正統の繼承者たるその子に對して迫害の手を延して來た。此處に於てアルマンソルはその娘やテルナテ反葡分子と通謀し、葡萄牙人をモルッケン群島より驅逐して同群島に於ける貿易の自由なる狀態を回復せんと企圖し、漸次その反葡政策

(1)Martin Affonso de Mello Jusarte
(2)Marico
(3)Victoria

を明かにして來たのである。かゝる形勢を看取して勿論ブリトオはチドールの攻撃を考慮したのであるが、兵力の不足と部下が氣候と食物に馴れて居らざる故を以て猶豫し、專ら前王妃の一派に彈壓を加へて之をチドールに驅逐する事に努めた。そして一五二四年マルチン・アッフォンソ・デ・メルロ・ジユサルテ(1)の船隊が來着し、兵力が增强されるのを待つてチドールの攻略を行ふ事になつたのである。(註19) チドール王は葡萄牙とテルナテの聯合軍を迎へて、果敢な抗戰を行つたのであるがマリコ(2)城を占領されるに及んで敗走し、都城を捨て山地に遁入して專ら遊擊戰を以て抵抗を續ける事となつたのである。(註20)

〔註18〕葡萄牙側文獻では Cachil Daroés, 西班牙側文獻では Quichil de Roes 又 de Rebas

〔註19〕P. A. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel. 25 p. 359-361. 389-390.

〔註20〕Danvers; Ibid. vol.1. p. 358.

かゝる間にマゼラン船隊のビクトリア(3)號は本國に歸還し、此處に世界周航の歷史的偉業が完成されたのであるが、彼等のモルッケン群島に於ける行動は西班牙と葡萄牙の間に同群島の所屬權と香料貿易の獨占權をめぐる、重大な外交問題を提起する事となつた。大體葡萄牙人は歐洲各國民に先んじてアメリカ沿岸や大西洋上に於て新航路の發見と植民地の開拓に努力し、之等の地域

(1)Victoria

に對する領有權を羅馬法皇により承認されて居た。西班牙王フエルジナンド(1)及びイサベラ(2)も又コロンブスの遠征後、彼の發見にかゝはる米大陸に關し同樣領有權の承認を羅馬法王に要求したのであるが、葡萄牙王ヤン二世(3)はコロンブスの遠征は葡萄牙の權利を部分的に侵害するものであると主張し、兩國の間に系爭の因を爲した。其處で法皇アレキサンダー六世(4)は一四九三年五月四日敎書を發布し、アゾレス(5)島とヴエルデ岬(6)の西百哩の地點を走る子午線を境とし、その西方に於て發見されたる島嶼及び大陸はすべて西班牙に所屬し、東側で發見されたるものは葡萄牙の領有と定め、此處に新世界に於ける兩國の勢力範圍は一應劃定された。その後一四九四年六月七日のトルデシラス(7)條約に依つてこの境界線はヴエルデ岬の西方三百七十哩の位置に移されたが、地球それ自體に關する正確な智識に基かざるかくの如き取り極めは、兩國の植民事業の擴大に伴ひ現實にその矛盾を暴露し、より深刻な紛爭を惹起する事となつた。(註20)即ちマゼラン船隊のモルツケン群島に於ける行動が傳へられるや、葡萄牙は條約違反なる旨を西班牙に向つて抗議し同群島の領有權を主張した。西班牙側の航海者及び地理學者も各々その根據に基いて之に反駁を加へ、兩國の關係は紛糾を加へたので一五二四年四月國境のバナヨズ(8)及びテルバス(9)の兩地に商議を開き討議を行つた。しかし、當時の地理的智識の程度から見てこの問題を正確な地理

(1)Ferdinand
(2)Isabella
(3)Jan II
(4)Alexander VI
(5)Azores
(6)Kaap Verde
(7)Tordesillas
(8)Banajoz
(9)Elvas

的基礎の上に立つて檢討する事は不可能であり、第一モルツケン群島の位置についても兩國の地圖は經度の上で四十六度以上の差異を示して居る狀態であつたから、この會議が何等滿足な結論に到達せずして決裂したのは當然といふべきである。而してこの交涉が不調に終つた後西班牙は公然と葡萄牙の東印度政策に對して戰を開始し、一五二五年七月ガルシア・ジョフレ・デ・ロアイサ(1)指揮の下に七隻より成る東印度遠征船隊を派遣したのである。(註21)

(1)Garcia Jofre de Loaysa
(2 Dom Garcia Henriques

チドールの反抗

〔註21〕 C. Wessels S. J.; Portugeezen en Spanjaarden in den Indischen Archipel tot aan de Komst van de O. I. Compagnie. Geschiedenis van Nederlandsch Indië, Deel 2. p. 177-178.

〔註22〕 P. A. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 25. p. 404-405

モルツケン群島に於ては一五二五年一月デ・ブリトオはマラツカに歸り、ドム・ガルシア・ヘンリツケス(2)が任を繼いだが、彼はテルナテに到着するや直ちにチドール王と平和條約を結んだ。そして之を機としてチドールとテルナテの間にも和睦が成立し、タルウエスとアルマンソルは從來後外國人の武力に賴る事なく、互に協力して自主的にモルツケン群島の再建と統治に努力すべき旨を誓つた。かゝる形勢を見てヘンリツケスは兩者の協力が葡萄牙人の地位に危險を及す事を恐れ、計を以てアルマンソルを毒殺しその都城を急襲して町を燒き拂つて終つたのである。葡萄牙

人のかゝる暴擧がチドール人の憤激を買つた事は云ふまでもなく、全島民は直ちに起つて抗爭を開始したが、全モルッケン群島の土民も擧げて葡萄牙人に敵意を抱くに至つた。かゝる情勢の中に一五二七年一月デ・ロアイサの西班牙船二隻がマゼラン海峽を經てチドールに來着した。チドール人は歡呼を以てこの船隊を迎へ、陣地を構築して葡萄牙人の攻撃に備へた。一五二七年二月ヘンリッケスは兵を整へてチドールを攻撃したが、聯合軍は頑強に抵抗して陣地を固守し續ける事に成功したのである。(註23)

〔註23〕 P. A. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel. 25, p. 405-407

かゝる間に一五二七年五月三十一日ドム・ジョルジエ・デ・メネセス(1)がテルナテの指揮官に任命されて來たが、此處に端なくも葡萄牙人間に內訌が勃發した。一六二二年アントニオ・ブリトオがテルナテ王タルウェスと協定を結んだ際、香料貿易に關する原則も確定せられ、一定の購入價格が規定されて、葡萄牙人の香料貿易はすべてこの原則に準據して行はれる事になつた。しかし、葡萄牙王室の獨占權とその人民の個人貿易權との關係については明確な規定がなく、モルッケン群島に於て葡萄牙人は各自その資本を以て個人的に香料貿易を營み得る自由を默認されて居た。所がテルナテ在住の葡萄牙人はこの貿易の自由を漸次濫用し、協定價格を無視しそれ以上の

(1)Dom Jorge de Meneses

代價を拂つて香料の買付けを行ふようになつた爲、葡萄牙政府の商館に對するその供給狀態は極めて圓滑を缺き、王室の貿易權を侵害する所大なるものがあつたのである。ヘンリッケスは赴任當初これ等の葡萄牙人に王室の貿易に協力し、彼等の所有香料を協定價格を以て商館に提供するよう命令を發し、王室貿易權の擁護に努めたのであつたが、在留葡萄牙人は彼等の個人貿易に依つて利益を得て居たテルナテ人と共に反對したので、その企圖を放棄し彼自身率先して個人貿易を營み私益を追求するに至つたのである。されば葡萄牙の船隊はテルナテに於てはマラッカで外國商人から購入するものより三倍の高價を以て香料を買ひ付けなければならぬ事情に在つた。印度貿易支配人(1)アッフォンソ・メキシア(2)はかゝる弊害を憂へ、メネセスの出發に際しテルナテにある全香料を王室の獨占の下に確保し、餘剩量のみに對して個人の貿易權を承認すべく命令を與へた。メネセスはテルナテに來着するやこの命令を實行に移さんとしたが、各方面の强硬な反抗に遭ひ一時斷念しなければならなくなつた。而して彼の私貿易壓迫政策に最も激烈に反對したのはヘンリッケスであつて、暫時兩者は深刻な鬪爭を繰り返したが、一五二八年三月ヘンリッケスは城內の兵器を破壞し有能な兵士多數を伴つてマラッカに歸還したので、テルナテの葡萄牙根據地の防備は重大な危險に直面する事となつた。しかし、マラッカ知事はメネセスの政策を支持し、ゴ

(1)De Directeur van den Indischen Handel
(2)Affonso Mexia

ンサロ・ゴメス・ダセベド(1)の船隊を派遣して來たので葡萄牙の兵力は補強されたが、西班牙側に於ても時を同じくしてアルヴアロ・デ・サーベドラ(2)の船隊がメキシコより來着し、此處に兩勢力はテルナテとチドールに據つて暫時對立の形勢を續ける事になつた。(註24)

葡萄牙のチドール征服と西班牙人の驅逐

(1)Gonçalo Gomez d'Azevedo
(2)Alvaro de Saavedra
(3)Hernando de la Torre
(4)Halmaheira
(5)Moro
(6)Samafo

〔註24〕 P. A. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel, 25. p. 403-411

一五二九年五月デ・サーベドラの船隊はチドールを去つてメキシコに向ひ、西班牙の兵力は指揮官ヘルナンド・デ・ラ・トルレ(3)以下六十人の薄弱なものとなつた。たま〳〵テルナテとチドールはハルマヘラ(4)の東北のモロ(5)島の歸屬問題をめぐつて爭ふ事になり、西班牙人も又チドールを助けてテルナテと戰ふに至つたが、メネセスはこの機會に乘じて西班牙人を驅逐せんと計り、テルナテ軍と聯合してチドールに來攻した。デ・ラ・トルレは到底城を維持し難きを悟り、メネセスの要求を容れて開城し、部下を率ゐてハルマヘラのサマフオ(6)に赴いて本國からの便船を待機する事となつた。チドールも又葡萄牙に屈服し香料の供給と西班牙人を入國せしめざる事を誓つたのである。(註25)一方歐洲に於ては葡萄牙は之に對し强硬な報復措置をとつた場合その武力に抗し難きを知り、西班牙が財政の窮乏に苦しんで居るのに乘じ、之に賠償金を提供する事によりモルツケン群島に於ける葡萄牙の權利を承認せしめてこの問

題の平和的解決を計つたのである。この提議は西班牙側の容れる所となり、兩國の委員は一五二九年四月二十二日サラゴッサ(1)に會して商議を行つたが、その結果西班牙は三十五萬ダカットの償金を受けてモルツケン群島に於ける自己の權利を放棄する事に決し、これと共に同群島の東方二百九十七リーグの地點を走る子午線が新に境界線として設定された。而して西班牙は同額の金を葡萄牙に返却する事によつて、この條約を破棄し同群島に於ける行動の自由を獲得し得る權利を留保する附帶條件が附加されたのである。(註26)

(1)Saraggosa

モルツケン土民の反葡運動

〔註25〕 P. A. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 27. p. 4-6

〔註26〕 Danvers; Ibid. vol. 1. p. 411.

西班牙人を驅逐しチドールを屈服せしめても、モルツケン群島に於ける葡萄牙人の地位は必ずしも安固たるものとは云ひ得なかつた。それはマラッカから兵力の增遣や必需品の供給を繼續的に期待し得なかつた事に依るものであつて、バンダ島に於いてチドール人が仲繼貿易を營み、葡萄牙の獨占權を侵害して居る事をもそれは默過しなければならぬ狀態であつた。必需品の缺乏は彼等をして土民からその調達を計らざるを得ざらしめ、武力による掠奪的行爲は土民との間に敵對關係を生ぜしめる危險性を含んで居た。曾つては葡萄牙の支持者であつたテルナテの執政カイ

チエリ・タルウエスは、かゝる葡萄牙の掠奪と王室の香料貿易獨占の強化を目指す收奪組織の確立に反對し、潜かに葡萄牙權力の顚覆を企てたが、不幸にして發覺し數名の貴族と共に殺害された。彼の擁立して居た幼主は葡萄牙城内に監禁されて終つた。しかし、この彈壓政策は土民の不滿を爆發せしめ、彼等は城内への食糧の輸送路を遮斷して抗爭を開始し、モルツケン群島に再び反葡運動が起されたのである。(註27)

ゴンサロ・ペレイラの暗殺

(1)Gonçalo Pereira
(2)Kaitsijli Hatsu

〔註27〕 C. Wessels S. J.; Ibid. G. van N. I. Decl. 2. P. 179.

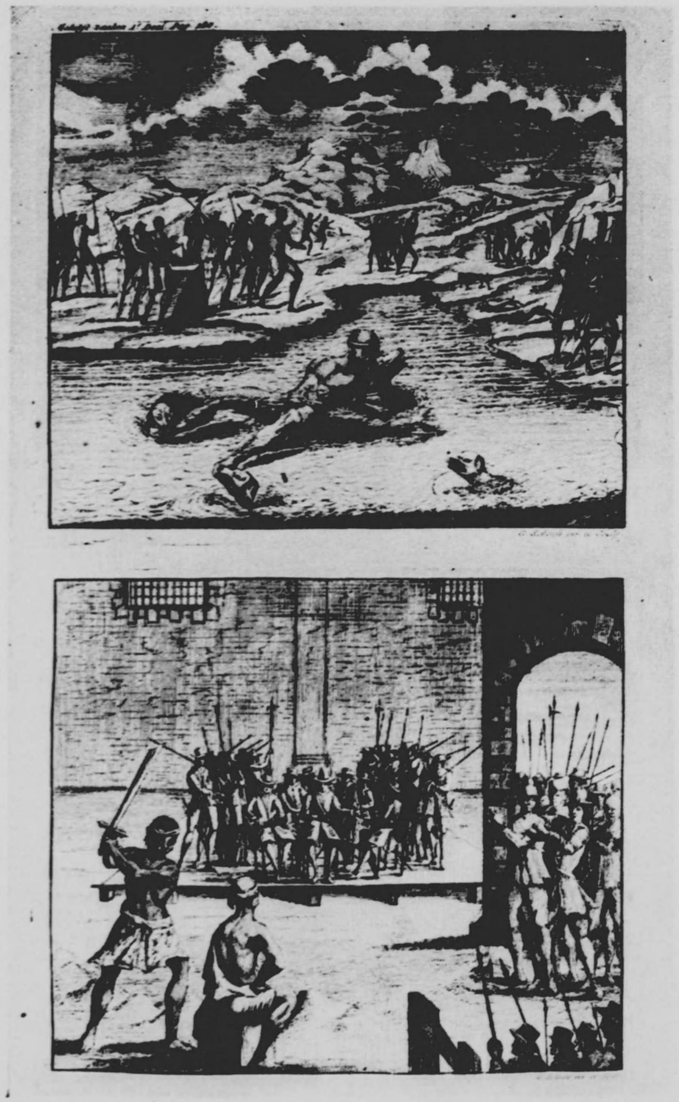
一五三〇年十月ゴンサロ・ペレイラ(1)がメネセスの後任としてテルナテに來着したのは、かゝる混亂狀態の最中であつた。彼は直ちにメネセスの暴壓政策を放棄し、監禁中の幼主を釋放しチドールに對する苛酷な賦課を免除する等温和な土民政策を採用したので、テルナテ人もその反抗を停止し新にカイチエリ・ハツ(2)が執政となつて土民との關係は大いに改善されたのである。然るに彼は香料に對する王室の獨占權を强化せんとする政策は毫も緩和しようとせず、テルナテ在住の葡萄牙人に對して私貿易を營む事を禁止し、且つ所有香料はすべて規定の價格で政府の商館に提供するよう嚴命し、馬來商人が爪哇に積み出さんとする香料に對しても嚴格な統制の手を加へて取り締つた。かゝる政策に對して反對の立場に立つ在留葡萄牙人は土民と聯繫して陰謀を企

て、プレイラを殺害し首謀者たるヴイセンテ・ダ・フォンセカ(1)を擁立したが、一五三三年トリスタオ・デ・タバリデヤ(3)を謀叛の故を以てゴアに送り、その弟ハイルン(4)を擁立し、ギロヽに於ては執政カイチエル・ブミ(5)を後援してスルタンを廢せしめイデは着任するやテルナテのスルタン・タバリデヤ(3)を謀叛の故を以てゴアに送り、その弟ハイルン(4)を擁立し、ギロヽに於ては執政カイチエル・ブミ(5)を後援してスルタンを廢せしめる等辛辣な内政干渉を行ひ、チドールでは香料の他國人への賣却を禁止して島民の貿易に壓迫を加へたので、彼に對してモルツケン群島の土民の反感は深刻を極めるようになつた。(註28)一方アタイデは土民の間に基督教の注入を計畫して居たが、之が對抗策として基督教徒となつて葡萄牙の援助を得んと志して居る事を知つたので、迫に惱み、彼をテルナテに呼び寄せてその從者と共に洗禮せしめた。そして宣教師をモロ島に派遣し布教に從事させたが、大いに業績が擧つて多數の土民が改宗した。しかし、このアタイデの宗教政策も彼の土民政策の他の部分に於ける誤謬により中斷されなければならなかつた。バチヤン島のスルタンはテルナテの貴族アイアロ(6)と通謀し全モルツケン群島の土民を指導して葡萄牙の統治に反抗を開始し、モロ島を襲つて宣教師や基督教土民を殺戮した。アタイデは誓約に基き兵を同島に

アタイデの政策とモルツケンの混亂

(1)Vicente da Fonseca
(2)Tristão de Ataide
(3)Sultan Tabaridja
(4)Haircen
(5)Kartsijel Bumi
(6)Ayalo

〔註28〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel. 27. p. 13-14.



葡萄牙人モルツケン土民虐殺の圖

送つたが如何ともし難く、且つその手薄に乘じてテルナテ全土に叛亂が起り葡萄牙人は諸所に殺害され城は包圍されたのである。かゝる危局の中に一五三六年十月、モルツケン群島は葡萄牙時代を通じて最大の名統治者たるアントニオ・ガルバオ(1)を迎へたのである。(註30)

ガルバオのモルツケン統治

ガルバオは着任するや直ちにチドールに進撃してモルツケン聯合軍を擊破し、チドールの土王と媾和條約を結んで葡萄牙商館へ香料を充分供給する事や、兵器の引き渡しを約せしめ、不穩な態度を見せて居たテルナテの土民を鎭撫して之を歸服させ、更にギロヽ島の叛亂もチドール王の仲介で平和的に解決する事に成功した。然るにその香料貿易に於ける王室の獨占權を强化せんとする政策は、部下の不滿を買ひ彼等は大擧してテルナテを脫走してマラッカに走つた。その爲彼の指揮下には僅か百五十人の部下が殘留するに止り、この兵力は著しく微弱なものとなつて終つた。かゝる時に當り彼の獨占政策に反對し香料貿易の自由を回復を目指して、爪哇、バンダ、マカッサールの土民は聯合軍を組織して來襲したのであるが、ガルバオはこの寡兵を以てそれをアンボイナに迎擊して勝利を收めたのであつた。(註31) 彼は强硬な意志と聰明な理性を以て變轉常な

[註29] A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 27. p. 39-40.
[註30] C. Wessels S. J.; Ibid. G. v. N. I. Deel. 2. p. 181-182.

(1) Antonio Galvão
(2) Maccasar

き土民に臨み彼等を威服せしめたのであるが、かくの如き峻嚴な武力政策の反面に於て正義と人道に基く平和政策を採用し、兩々相俟つてその土民政策は赫々たる業績を收め、陰慘な葡萄牙統治時代を通じて短くはあつたが光輝ある一頁を建設し得たのであつた。しかし、ガルバオは香料貿易の獨占といふ葡萄牙の東印度政策の基本的要求に關しては如何なる妥協も讓歩をも土民に與へたのではない。彼はモルッケン群島所産の香料に强力な獨占政策を施行し、之を王室の利益に基いて峻嚴に統制せんと努力し且つ成功をかち得た。王室の獨占權を侵害する在留葡萄牙人の個人貿易が彼等に對する待遇の不當に一因を有するを知るや、彼は日用品の輸出入に適當な關稅を課しその收入を以て待遇改善の費に當てゝ彼等の不滿を解消せんと計る一方、法令を確立して、その據るべき所を知らしめ部下の獨斷と專恣を戒しめたのである。また土民の側に於ける反對者に對しては彼は强硬な態度を以て之に臨み壓服した。かくて歷代葡萄牙のモルッケン群島統治者が、着手して遂に成功を見なかつた香料貿易の獨占權を完成し、王室の利益を確保したのである。かくの如き問題は土民にとつても重大な利害關係を有するものであつたが、それにも拘らず彼の土民政策が從來の如何なる統治者と雖も追蹤を許さぬ業績を收め得た所に、彼の卓越せる政治的才幹と全體としてその政策の妥當性を認めなければならぬのである。ガルバオの父も兄弟も

共に國事に盡した誠忠の家であつたが、彼の統治によつて葡萄牙王室の權威はモルッケン群島に於て大いに發揚し、土民も又その妥當な政策の下に平和を享受したのであつた。

〔註31〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V, Deel 27, p. 45-51.

ガルバオの宗教政策

かくの如くガルバオの公正無私な努力と溫和妥當な土民政策はモルッケン群島の土民の協力を確保し、彼等から「父」と呼ばれて崇敬の念を捧げられた。而して彼はテルナテ島に於ける諸施設の整備改善にも着手した。城砦や商館は修繕を加へられた結果面目を一新し、食糧香料蓄藏のための倉庫や石造家屋は增築せられ果樹園、菜園、水道等の諸設備も整へられた。港灣の改修も大いに行はれ暗礁を取り除いて、當時の如何なる大船と雖も安全に停泊し得るようにした。(註32)かく着々とモルッケン群島に於ける各般の事態を整理する一方、ガルバオは更に宗教政策につい ても大いに努力する所があつた。彼はカトリック教の宣教師を町や村落に派遣して布教に努め、且つ學校を設立して土民に基督教々育を施した。當時モルッケン群島では回教徒の勢力は根强く殊に上層部に强い反對があつて、基督教の布教には可成り種々の困難が横つて居たのであつたが彼の不撓の努力の結果續々と改宗者が出で來り、テルナテ島ではスルタンの重臣や有力なアラビヤ人の中からも信徒を獲得するに至つた。モロ島に於てもその宣教事業は復活され、フエルナオ

(1)Fernão Vinagre
(2)Jorge de Castro

●ヴイナグレ(1)の努力は着々業績を擧げ、ガルバオの後任者ジョルジエ・デ・カストロ(2)の記錄によれば當時同島及び近隣の島々では回教徒の村落を殆んど見る事が出來なくなつたといふ。(註33)ガルバオのみならず葡萄牙の宗教政策は、プロテスタントの擡頭によつて歐洲に於て著しく狹められた布教活動のはけ口を新世界に求めんとする、ジエスイットの宗教精神に基いて爲されたものであるといふ一面、基督教の傳道によつて思想的に、葡萄牙人の印度及び南洋に於ける競走者たるアラビヤ、波斯人の回教徒の影響から土民を隔離せんとする政治的効果を目指して行はれた事は云ふまでもない。而してそれはガルバオの努力によつてモルッケン群島に於ては著しい成功を收め、爾後の葡萄牙の支配に對する土民の協力の精神的根底を構成したのである。西班牙、葡萄牙の植民政策がカトリック教の宗教精神に基き、政治と宗教の結合を指導原理の一として行はれたのに對し、プロテスタントたる和蘭人のそれが明かに兩者の分離の上に進められた事は眞に興味の深い對照と云はざるを得ない。

〔註32〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel. 27, p. 52.

〔註33〕 C. Wessels S. J.; Ibid. G. v. N. I. Deel. 2. p. 182.

モルッケン群島に短期間ではあつたが平和狀態が維持されて居た間に、マライ半島及びスマト

一五三七八年のマラッカの情勢

ラに於いては戰爭が絶えず續けられて居たのであつた。アチエの新王は幾度かの失敗にも落膽せず、屢々海峽を渡つてマラッカを包圍したのであつたが遂に一度も成功を收むる能はずして退却の止むなきに至つた。そしてマラッカの防備はます〳〵強化されたのである。(註34)

〔註34〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 158.

葡人と西人の間に紛爭再發

一五四二年の終りに、ドン・ジョルジュ・ド・カストロ(1)は四隻の船を率ゐて、モルッケン知事として葡萄牙からテルナテに到着した。そしてルイ・ロペス・ド・ヴイルハロボス(2)指揮下の西班牙人と紛爭を起したのである。この時スペイン人はテイドールのザガラ(3)といふ町に居りギロ王と交渉を保つてゐた。ドン・ジョルジュは直に協定條件を破つた事を西班牙人に抗議したのであつたが、ヴイルハロボスは惡天候の爲止むを得ず滯在して居る事、そして今居る所は明かに西班牙の領內である事等を理由として應じようとはしなかつた。ドン・ジョルジュは兵力を派遣したのであつたが劣勢の爲擊退されて終つた。そして、ヴイルハロボスはギロロ島に行き堡壘を築いてテイドールに歸つて來た。(註35)

(1)Dom Gorge de Castro
(2)Ruy Lopes de Vilhalobos
(3)Zagala
(4)Jordãs de Freitas

西班牙人の退却

〔註35〕 Danvers; Ibid. Vol. I, p. 462.

かゝる中にジョルダス・ド・フレイタス(4)がドン・ジョルジュに代つて新しくゴアから派遣され

て來た。そして途中アンボイナを占領してテルナテに到着した。彼は着任するや直に西班牙側と交渉を開始した。その結果一五四五年一月八日附を以つて、西班牙人は今後一切許可なくしてテルナテその他の葡萄牙領地及びテルナテ王の屬領に入らざる事、同樣に葡萄牙人もテイドールに許可なくして入港せざる事、といふ條件の下に協定が成立すれば、勿論それはモルッケン群島に於ける葡萄牙勢力の一步後退を意味するものであるが、フエルナオ・ド・スーサ・ド・タヴオラ(1)が西班牙人征討の爲新たに派遣されて來るや形勢は一變したのである。一五四五年十一月四日の條約に於いて、ヴイルハロボスは無條件でテイドールを明け渡さなければならなくなつたのである。そして武裝を解除されて印度へ送られ、其處から歐洲へ送還される事になつた。程なくしてテルナテ滯在中、ヴイルハロボスは病死したのであつた。(註36)(註37)

(1)Fernao de Sousa de Tavora

モルッケンに於ける葡萄牙の壓制

〔註36〕 Danvers; Ibid, Vol. I, p. 463.

〔註37〕 Danvers; Ibid. Vol. I, p. 417.

ガルバオの統治下の平和な時期はモルッケン群島に於ては長くは續かなかつた。一五四二年それはジョルジエ・ド・カストロの統治下に入つて以來、再び不正と壓制と殘忍の時代が訪れたので

ある。恐るべき掠奪組織の下に土民の不滿と憤怒は燃え上り、反抗は絶えず斷續的に起され最早平和は望むべくもなかつた。

葡人の貿易獨占に土民反抗

一度確立された葡萄牙人による香料貿易の獨占は、必然的に香料價格の統制といふよりはむしろ最低價格に於ける强制的な收奪と云ひ得る買收手段を生ぜしめた。從來自由貿易の下に、商人達の競爭により價格をつり上げて利益を得て居たモルッケン群島の土民にとつてはこれは大打撃であつた事は云ふ迄もない。一五四六年頃に於いては彼等は全く貧困のドン底に落されたのである。かゝるが故に彼等は葡萄牙人の手より貿易權を回收して再び自由貿易時代を恢復せんと試みたのであつた。しかし、それは到底葡萄牙人の拱手傍觀する所ではなかつた。彼等は香料貿易に於ける自己の特權を維持せんが爲め二十四隻から成る船隊をモルッケン群島に派遣し、個人的な賣買は一切叛亂や密貿易として取締る旨を宣言したのである。此處に於いて必然的に葡萄牙船隊と土着商人との間に衝突が惹起された。そしてこれは葡萄牙側の決定的な勝利に歸し、土着商人の經濟的な地位は根抵から覆されて終つたのである。葡萄牙人の出現までアンボイナは香料貿易の中心地であつたので、かゝる貿易の自由を恢復せんとする運動も其處を中心として起されたのであるが、葡萄牙の獨占組織が確立されるに及びその地位を失墜し、オランダ人出現の時迄はマラッカとモルッケン群島間を航行する船舶の單なる一の避難港にすぎざる悲慘な境遇に陷つたのである。(註38)

十六世紀中葉のマラッカの情勢

〔註38〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 162.

一方マラッカ及びスマトラ島に於いても土民との間に戰鬪が絕えなかつた。アチエの王は屢々マラッカを包圍してその度に失敗を重ねて居たが、未だ以つて攻撃を斷念せぬのみか、その戰略は度々の苦しい經驗に教へられてます〳〵巧妙になつて行つたのである。そして一五四七年頃マラッカは非常に危險な情勢に直面しなければならなくなつた。十月十八日アチエの王は印度各地より援軍を得て、七十隻の大船隊を率ひてマラッカ攻圍を敢行したのである。しかし乍らこの攻撃も空しく失敗して多大の損害を蒙つた。そして彼は再擧を計る爲に退却したのである。一五五〇年には新な同盟軍がマラッカ攻撃の爲に組織された。ジョホールの王は近隣の諸王と語らひ、更に爪哇のジヤバラから慓悍な援兵を得て攻撃を開始したがこれも遂に何等の成功を收め得なかつた。かく葡萄牙人は再三の攻圍戰に勝利を得、一方アチエに於いては國王が死去してその後繼者である新王が、一五五六年位についたのであるが、彼は再三の失敗に鑑みて、マラッカ攻圖を躊躇したので、マラッカでは、此處に於いて數年の間平和な時期が續く事になつたのであ

る。(註39)

(1)Bernaldim de Sousa
(2)Hairoen

葡萄牙のモルッケン屬領化工作

〔註39〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 160-170.

モルッケン群島に於て土着商人と闘つて彼等の香料貿易權を沒落せしめ、經濟的支配權を把握するや葡萄牙人は、更に進んで政治的にこの群島を支配し、一貫した專制組織を確立しようとした。卽ち土着諸王から政治的獨立性を剝奪し、彼等の主權を崩壞せしめんと計つた。從來葡萄牙人は土王に對し內政干涉は行つたが、それは經濟的利權の追求と確保を目的とし、それ等が滿足され且つ侵害を受けざる限り、土王の內政上の主權にまで脅威を與へる事はなかつた。土民統治は未だ不完全乍ら土王の手中に殘されて居たが、葡萄牙人はその勢力が强化されて來るにつれ、之等土王に壓迫を加へ、その領土と人民を葡萄牙國王に獻上し、主權を放棄させるべく志すに至つたのである。云はゞそれはモルッケン群島の屬領化政策であり、その植民政策の經濟的段階より政治的段階への發展を意味する。かくの如き目的のため一五五一年にはベルナルデイム・デ・スーサ(1)はジロ、王を壓迫してその王號を剝奪し、(註40)一五五五年にはテルナテ王ハイルン(2)を捕へて投獄したが、土民は之に反抗して起ち騷亂は全モルッケン群島に波及するに至つた。葡萄牙のテルナテ城はテルナテ、チドールの聯合軍に包圍され頗る苦境に陷つたので、一五五九年王を釋放

(1)Manoel de Vasconcellos
(2)Antonio Paez

葡萄牙のアンボイナ經營

したが之によつて漸く叛亂を靜める事が出來たのである。(註41)更に一五六一年にはマヌエル・デ・ヴアスコンセルロス(1)はテルナテ王を說得しその領土と人民に對する權利を葡萄牙王に讓渡せしめんとしたが、テルナテ王は之に對して强硬に反對した。ヴアスセンセルロスは武力に訴へんとしたが事成らざる前に遂に病歿したのである。(註42)

〔註40〕 John Horace; Ibid. vol. 1, p. 164

〔註41〕 Danvers; Ibid. vol. 1. p. 494.

〔註42〕 Danvers; Ibid. vol. 1. p. 523.

モルッケン群島に於ける再三の動亂の結果テルナテの城が屢々土民軍に包圍され危險に瀕したので、葡萄牙人はその補强策を考慮しアンボイナを確保して其處をマラッカよりモルッケン群島への前進基地となし、軍需品や兵員のテルナテへの輸送の便に具へテルナテ城の孤立化を防がんと計るに至つた。既に一五四五年ジョルダオ・デ・フレイタスはヒツ島の南岸に小城堡を建築し若干の兵員を止めて居たが、之のみには脆弱で全く無力であつた。當時アンボイナ近傍の諸島嶼にはテルナテ王ハイルンの勢力が根强く扶植され、葡萄牙の經營は彼の妨害によつて頗る困難な狀態に置かれて居た。一五六二年アンボイナの指揮官となつたアントニオ・パーズ(2)が城砦を構

(1)Baab Oe'lah
(2)Gonsalo Pereira Marramaque
(3)Hoamohel
(4)Veranula
(5)Ceram
(6)Hessidi
(7)Kambello
(8)Leytimor

繰せんとした時、ハイルンはその子息バープ・ウルラ(1)を派遣し爪哇人と協力して反對せしめたのでバーズの計畫は實現されなかつた。(註42)しかし、之のみにては葡萄牙はアンボイナ築城計畫を放棄せず、一五六五年三月十四日附の書簡を以て、葡萄牙國王は印度副王に對しかゝる計畫を速かに實行に移すべき旨の訓令を與へて居る。此處に於て副王はゴンサロ・ペレイラ・マラマケ(2)を指揮官として一千人の遠征隊をモルッケン群島に派遣した。彼はテルナテ來着後アンボイナ經營につきハイルンの協力を求めたが、ハイルンはホアモヘル(3)のヴエラヌラ(4)、セラム(5)のレッシデイ(6)とカムベルロ(7)等の領有權の承認を交換條件として提出した。しかし、セラム島はヒツ島の反葡土民を監視し、彼等のアンボイナとの密貿易を取締り上から確保して置く必要があつたので、葡萄牙側はこの要求を拒否した。さればペレイラ・マラマケは獨力でアンボイナに向ひ、爪哇人の援助を受けて抵抗するヒツ島の土民を壓服し、更にセラム島に赴きレイチモル(8)の叛徒を平定した。そして一五六九年の三月から七月にかけてヒツ島に城砦を構築したのである。(註43)

〔註43〕C. Wessels S. J.; Ibid. G. v. N. J. Deel 2. p. 191.

〔註44〕A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 28. p. 436-440

この頃、マラッカに於いては、アチエ王國の攻撃が未だ繰り返されて居た。一五六七年、マラ

アチン王のマラッカ攻撃

(1)Perak
(2)Mansur Shah

イ半島のペラ國(1)からマンスル・シャ(2)が來りてアチエの王位につくや、彼は印度西部諸國の援けを得て聯合軍を組織し、マラッカ占領を企圖したのである。そして多大の損害を蒙つて退いたのであつた。しかし、この失敗に屈せずして彼は更に大軍を以つて襲來したが、又しても擊退されたのである。而してこれは翌年の一五六八年の事であつた。それから一年も經たぬ內、三度攻擊を行つたが、何れも失敗に終つた。(註45)實に葡萄牙とスマトラ及びマライ諸國との對立は深刻を極め、その爭闘は激烈そのものであつた。アチエ國等は全土を擧げてその占領を企圖したのである。一方葡萄牙人は度重なる來襲を擊退するのに全氣力を費ひ果して、進んでアチエを陷れる敵の根據地を奪ふと云ふ樣な拔本塞源的な積極的對策を講ずる餘裕がなかつたのである。勿論其の他に新領地を獲得する事は到底出來ず、たゞ現狀維持が精一杯であつた。一五七二年には西部印度とアチエの聯合軍を、翌七三年にはジャパラとの聯合軍を擊退したが、これ等は葡萄牙側に於いては最後の力を出し切つて得た勝利であつた。そして一五七五年、更にアチエの軍がマラッカ海峽を壓して來襲して來た時には、マラッカは非常なる危機に陷つたのである。幸にしてこの時、アチエ軍の陣中に流行病が突然傳播された爲、辛うじて荒掠を免れる事を得たが、(註46)それでなかつたなら、恐らくマラッカはこの時アチエ軍の爲に占領されて、葡萄牙の南洋及び支那海へ

の根據地は覆されて居たに違ひない。

〔註45〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 173-4.

〔註46〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 184-5.

アチエ國の狀態

當時アチエに於いては強固な封建組織が築き上げられて居た。最上層には王が居り、絶對的な權力を有して居たのである。アチエがマラッカに對して常に一敵國を爲し得たのも、この王の權力の下に統制され得たからであらう。しかし、この王の絶對的權力もその下に在る封建土侯の協力に依つて完全に機能を發揮し得たのである。封建土侯は各々城下町を有し、武備を整へて人民を畏服せしめて居た。彼等は王の葡萄牙攻撃を全的に支持し激勵したのである。しかし乍ら、度重なるマラッカ攻撃はアチエ王國の財政を極度に困難ならしめた。その爲に王が土侯に課稅するや、彼等は反對して王との間に紛爭が屢々起された。そして多くの場合、革命的手段に依つて王位が覆されたのである。丁度一五七五年の失敗後、新な攻撃の準備中かゝる革命的事變が突發した。それに依つてマラッカは再度の危機を脫したのである。

アチエ國マラッカ攻撃の原因

アチエ國は何故かくも執念深い攻撃をマラッカに對して續けたのであらうか。それには色々な理由が考へられる。葡萄牙人の暴虐に對する彼等の傳統的な根深い憎惡も一つの重大原因であらう。又、マラッカの發展は海峽を挾んで一衣帶水の彼方に在る彼の國の存立に重大脅威を與へるものである。しかも、葡萄牙人の侵略行爲はマラッカに於いて、印度各地に於いて、又モルッケン群島に於いても實例を明に示した。今度は自分達が同じ運命に陷らぬとどうして斷言出來よう。葡萄牙人に對するかゝる彼等の危懼の念も一つの原因として考へられる。しかし、これ等にも增して强く考へられるのは、彼等と葡萄牙人との間に於ける貿易上の經濟的利害關係の對立である。當時アチエは東印度群島に於ける最强國の一つであつた。その繁榮の基礎は一種の自由貿易政策に在つた。西はメッカから東は日本に至る迄東洋各國の商船が雲集し、各地の產物の交換に依つて貿易が活潑に行はれて居たのである。殊にアラビヤ商人の活動が盛であつた。所が葡萄牙人が出現して印度洋及び南洋貿易が彼等の獨占的支配の下に置かれるや、競爭者のアラビヤ商人は驅逐されて終つた。その結果として、アラビヤ商人を重要な華客として居たアチエの貿易も、當然衰微の運命に陷つて行つたのである。故に昔日の繁榮を取り戻す爲には、葡萄牙の獨占貿易を打破して自由貿易時代の恢復を計らなければならなかつたのである。アチエの執拗なマラッカ攻撃の最大原因は、恐らくかゝる經濟的な點にあるものと考へて差し支へなからう。

葡萄牙のテルナテ王晴殺と土民の蜂起

テルナテ王ハイルンはペレイラ・マラマケのヒッ島經營に關する要求を拒否したが、葡萄牙國

(1)Henrigue de Sa
(2)Alvaro de Mendoça
(3)Lopez de Mesquita

王に對しては一五六四年二月臣下の禮をとりその權威を尊重した。しかし葡萄牙官憲の橫暴な行爲は土民の敵意を煽り兩者の關係は頗る圓滑を缺く狀態にあつた。そしてヘンリケ・デ・サ(1)からアルヴアロ・デ・メンドサ(2)の時代を經てロペズ・デ・メスクイタ(3)の統治となるに及び、葡萄牙とテルナテの敵對關係は全く表面化するに至つた。(註44)卽ちメスクイタがテルナテの重要財源たるマキャン島の香料を、土民の反對を壓迫して獨占せんとするに及び、ハイルンは領內に回敎徒を誘導して基督敎徒に迫害を加へその若干名を殺害し葡萄牙人に反抗を示したのであるが、一五七〇年一月二十八日メスクイタのため城內で謀殺されたのであつた。其處で彼の子息バーブは位を繼ぐや直ちに全領土を擧げて反抗を開始したが、この叛亂は遂に葡萄牙人に對して致命的打擊を與へる事となつた。ヒツ島はペレイラ・マラマケの經營以來葡萄牙の支配に屈服して居たが、バーブはテルナテの葡萄牙城を包圍する一方、麾下の水軍をセラム島やヒツ島に送つてこれ等を占領すると共にヒツ島の葡萄牙城を攻擊せしめた。ペレイラ・マラマケはテルナテ水軍を邀擊して之を破り辛うじてヒツ城の急を救ふ事が出來たがテルナテ城の方はバーブの舅父たるチドール王が包圍軍に加はり、一層封鎖を嚴重にした爲糧食は缺乏し頗る危殆に瀕した。(註45)ペレイラ・マラマケはテルナテの急を聞くやこれの救援に赴くべく北上し、パチヤン島の土王を說得して同島から

(1)João da Silva
(2)Nocsanivi

テルナテに食糧を供給せしめんとしたが、土王は既にバーブの側に傾いて居た爲失敗し、空しく一五七一年一月アンボイナに歸還した。そして程なく憂悶の裡に病歿したのである。(註47)

〔註47〕 C. Wessels S. J.; Ibid. G. v. N. J. Deel 2. p. 192.
〔註48〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 28. p. 440-446.
〔註49〕 C. Wessels S. J.; Ibid. G. v. N. I. Deel 2. p. 193-194.

ペレイラ・マラマケの死後ジョアノ・ダ・シルヴア(1)がヒツ城の指揮官となつたが、彼は怯弱な人物であつて後事をサンチヨ・デ・ヴアスコンセルロスに委ねてマラッカに引き揚げた。ヴアスコンセルロスはヒツ島の回敎土民やテルナテ軍の攻擊に對しヒツ城を維持して行く事が困難なのを見極め、それを放棄して土民の大多數が基督敎徒たるレイチモルのヌサニヴイ(2)に退き、新に砦を築いて此處に據つたのである。モルッケン群島に於ける葡萄牙勢力の危機が傳へられるや、ゴア及びマラッカから、再三援軍が派遣されたのであるが、坐礁その他の故障で多くは中途で挫折し、たま〳〵到着しても、既に沒落に瀕した頽勢を挽回するには到底役立ち得るものではなかつた。さればテルナテ城では糧食、彈藥は極度に缺乏し城兵は長期の籠城のため疲勞困憊の極に達して居た。それ故一五七四年十一月末バーブの要求を容れて開城し、全軍はテルナテを去つてヌ

サニヴイに後退する事となつた。此處にテルナテを根據とするモルッケン群島に於ける葡萄牙の支配權は崩壞するに至つたのである。尙モルッケン土民の宿願たる葡萄牙人の驅逐に成功したバーブの地位は目覺しい躍進をとげ、テルナテの勢力はチドールを凌いで隆盛に赴いた。然るにかかる形勢を喜ばざるチドール王は自領内に葡萄牙人を誘導しその武力に依つてテルナテの擡頭を抑へ、モルッケン群島に於ける勢力の均衡を維持せんと計り、城砦構築のための敷地の提供を條件にヌサニヴイの葡萄牙人に對しチドールに定住するよう要請して來た。ヴアスコンセルロスはこの要求を容れて一五七八年に百人の兵を率ゐてチドールに赴き、王より土地を割讓されて城砦と教會の建設に着手した。勿論バーブはあらゆる手段を盡して之を妨害したのであるが、それにも拘らず、工事は順調に進捗し、葡萄牙人は再びモルッケン群島に於て根據地を獲得したのである。(註50)しかし、それはテルナテに據つて土民勢力を支配し獨占組織を確立して香料貿易を壟斷して居たかつての威力とは比すべくもなく、今は單にチドール王の政策に基きその庇護によつて存在を保ち昔の形骸を止るにすぎなかつたのである。

〔註50〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 28. p. 449 456.

モルッケン群島に於いて葡萄牙人の勢力が次第に衰運に向つた頃、西班牙の勢力が再び勃興して來たのである。そしてその南洋經營は主としてヒリッピン群島を中心として行はれ、それ以外の南洋各地への影響は極めて稀薄であつた。從つて歐人の南洋經略史に於いては、むしろ何れかと云へば傍系を爲すものであつて、主流は葡萄牙時代より各國爭覇の中間期を經て、直に和蘭時代に接續して居るのである。

西班牙人が比律賓群島の經略に積極的に着手したのは、一五六六年であつて、彼等が最初にそれを發見してから四十五年の後である。卽ちミゲル・ロペス・ド・レガスピ(1)がセブ島(2)を經略した事を以つて開始されたのである。このセブ島は物產豐ならず、又土民の農耕技術も極めて幼稚であつた爲に生產能力が低く、西班牙人は大に物資の缺乏に苦しんだのであつた。一五六九年にはバナイ島(3)に根據地を移し、一五七一年にマニラに於けるレガスピの治政は非常に巧妙であり又愼重であつたので、土民の人心を收攬し事業は着々と成功して行つたのである。又一方に於いては宗教上の影響も非常に重要な役割を果した。この遠征には勿論若干の宣教師が伴はれ、征服地に於いて布教に從事したのである。かくの如くして植ゑつけられた宗教的影響は、土民を文化的に向上せしめ、又彼等を懷柔する上に非常に大なる力を有して居たのである。

(1)Miguel Lopez de Legaspi
(2)Cebu
(3)Panay

〔註51〕 John Crawfurd; Ibid. Vol. 2, p. 452-453.

西班牙人の比律賓經略に於いても、勿論土民の反抗は起されたのであつた。しかしそれ等は決して有力なものではなかつた。當時比律賓の社會は非常に多數の小さな村落に分裂して居り、それ等を結合して一丸となつて征服者に對抗する等といふ事は到底望み得なかつたからである。(註53) 比律賓人は未だ、馬來半島やジャバやモルッケン群島等の住民に比して、遙かに低い文化段階に在つたのである。

〔註52〕 John Crawfurd; Ibid. Vol. 2, p. 455.

比島に於ける西班牙主權の確立

かくしてマニラに根據地を定むるや、西班牙人は着々と比律賓群島を征服し、一六〇〇年迄には、ミンダナオ、スルー(1)等を除き群島の大部分がその勢力下に歸した。葡萄牙人は、比律賓群島に於ける西班牙勢力のかゝる發展に大いに不安を感じ、法王敎書に依つて定められた境界線の東に比律賓が位置するを理由として、其處に於ける主權の讓渡を迫つたが、當時モルッケン群島に於いて衰退しつゝあつた彼等の實力を以つてしては如何ともする能はず、又事實、地球の球形なる事を考慮に入れずして設定された境界線のみでは到底解決すべくもなかつた。その結果征服者としての西班牙の主權が確認されて、十九世紀末までの西班牙領比律賓が此處に出現する事になつたのである。

(1) Sulu

英國の出現

西班牙が、かくの如く比律賓に於いて着々と成功を收めて居る中に、葡萄牙人にとつて、更により以上の强敵が南洋々上に姿を現した。それは英吉利の出現である。はじめ、葡萄牙及び西班牙に依り東洋貿易の狀態が歐洲に傳へられるや、それに刺戟されて、英吉利と佛蘭西は盛んに船隊を派して東方への航路をさがし求めたのであつた。或は北西の方へ、或は希望峯を廻る大海へ、或は西方のアメリカへ、又は南の方南極へと航海につぐ航海が試みられたが、皆何れも失敗に終つたのである。しかし乍らかゝる不屈なる努力は遂に無駄に終らず、英吉利人サー・フランシス・ドレイク(2)に依つて成功を見たのである。

フランシス・ドレイクの遠征

(1) Sir Francis Drake
(2) Plymouth

一五七七年十二月、フランシス・ドレイクに率ひられる遠征船隊はプリマス(3)を出帆した。ドレイクはマゼランのとつた航路を進み、マゼラン海峽を通過し、西班牙ののブラジル沿岸を荒掠しつゝ進んだ。そして歸途に就かんとしたのだが、途中西班牙の船隊に出會ふ事を恐れて、一思ひに太平洋を横切つてモルッケン群島に到達して香料を積載の上母國に歸還せんと志したのである。かくして南洋諸島に入るや彼は最初にテルナテ島へと向つた。其處に於いては丁度葡萄牙人と土民との間に未だ凄慘な爭闘が續けられて居た。そして土民は葡萄牙人との對抗上、新來の英

吉利人を大に歓迎し、彼等が香料貿易に従事する事を許可したのである。此處に於いて英吉利人は大に喜び、香料を數多積載したる後、南洋諸島の各地を歴訪して、その地の豊穣なる事に驚嘆の眼をみはつたのである。そして又住民の單純なる態度も彼等にとつては喜ばしい限りであつた。彼等は爪哇をも訪れ、その物産及び土民の狀態について若干の智識を得た。かゝる後、英吉利人は葡萄牙人より颶風や暗礁等の前途に横はる多くの危險を以つて脅かされたのにも拘らず、何處へも寄港せずして大海を横切つて希望峯に到着した。そして出帆以來二年と十ケ月の後に漸く本國に歸還する事を得たのである。(註53)

西班牙による葡國合併

〔註53〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 201-202.

このフランシス・ドレイクの成功は英吉利にとつては實に劃紀的な功績であつた。これに依つて今迄幾多の尊い犧牲を拂つて捜し求めて居た東方への航路を知り得たのみでなく、印度及び南洋諸島に於ける諸事情も明にされた。彼の地の豊富な物産、その貿易の有利なる事は、いやが上にも彼等の航海熱を高めたのである。

この英吉利人の出現に依つて、葡萄牙人は西班牙人にも增して重大な競爭者を有する事となつたのであるが、この英吉利人に對する彼等の猜疑心は眞に言ひ現し難いものがあつた。しかし、

西班牙、葡人の特權を認む

それにも拘らず、彼等のモルッケン群島に於ける勢力は、その拙劣なる政策の故に土民の絶えざる反抗を激發し、將に崩壞に瀕して如何とも恢復すべからざる狀態に立ち至つて居たのである。そしてかゝる不面目を自己の手に依つて恢復せぬ中に、葡萄牙王國はその存立を失つて終つた。即ち一五八〇年、葡萄牙は西班牙に合併せられたのである。

西班牙のモルッケン征略

西班牙、葡萄牙兩國の合併が成立するや當然の結果として印度及び南洋各地の葡萄牙植民地も西班牙王國の下に歸屬する事となつた。しかし、西班牙政府は葡萄牙人の東洋貿易に於ける優先權をも否定したのではなかつた。東方に於ける葡萄牙の諸植民地は名目上西班牙の下に所屬はしても、其處に於ける軍事上及び商業上の實權は依然として葡萄牙人の手中に在り、彼等は依然として東洋貿易に於けるその優先的特權を認められて居たのである。しかのみならず、西班牙政府は比律賓群島に於ける出先官憲に訓令を發して、葡萄牙人の東洋貿易に於ける優先權を尊重して彼等を出來得る限り刺戟せざらしめたのである。これは本國政府の權力が到底東方迄は及び難い當時に於いては、當然の又賢明なる政策であつたであらう。

葡萄牙の東洋植民地が西班牙に屬する樣になつても、實權が讓渡された譯ではなく、政策に實質的な變化が行はれたのではない。從つて土民の白人に對する爭鬪は依然として續けられて居

た。一五八二年にはアチエのマラッカに對する攻撃が行はれて居る。そして同じ年に、モルツケン群島の恢復の爲に、ペナロサ(1)の指揮下に西班牙船隊は比律賓を出發したのである。この時は、西班牙本國の計略に基き、テイドール王女と結婚せるパブロ・ド・リマ(2)なる者を伴ひ、この故に西班牙はテルナテ王治下の若干の都市に對する所有權ありと觸れ込み、土民の心を收攬せんとしたのであるが、反つて部下の土民の間より反抗が起されたので止むを得ず比律賓に退却したのである。翌年ペナロサは歿した。(註54)

(1)Penalosa
(2)Pablo de Lima
(3 Don Santiago de Vera
(4)Azambuja

テルナテ勢力の伸長

〔註54〕 Campbell; Java, past & present. Vol. I, p. 160.

一五八四年、ドン・サンチヤゴ・ド・ベラ(3)が比律賓總督として着任するや、彼は再度モルツケン群島の恢復を志し、四百人の西班牙兵を派遣して、當時テイドールに在つた葡萄牙人アザンブヤ(4)と協力してテルナテを攻撃せしめたのであつた。しかしこの計畫も遂に失敗に終つたのである。(註55)

〔註55〕 Danvers; Ibid. Vol. 2, p. 57.

西班牙との合併が成立しその協力を得る事が可能な狀態になつても、モルツケン群島に於ける葡萄牙人の地位には何等挽回の曙光は見られなかつた。彼等はヌサニヴイとチドールに城堡を維持しては居たが、その基本的な目的たる香料貿易の獨占權は完全に喪失されて終つた。バーブの全面的な基督教徒の迫害工作に對しても何等施す術を知らず、葡萄牙人の長年の努力によつて扶植されその支配の有力な支柱であつた基督教勢力の崩壞と、回教勢力の再興を拱手傍觀しなければならぬ運命に在つたのである。バーブの支配下に於けるテルナテの勃興は目覺しく、北はミンダナオから南はビマ、東はニューギネアに至る大小七十二の島嶼がその號令に從つて居たといふ。しかし、チドールのみはその統制を受けようとせず、西班牙、葡萄牙の聯合勢力の侵入に對し、バーブが土着勢力の團結を以て拮抗せんとして、同盟を提議して來た時之を拒否したのである。而してかくの如く葡萄牙の支配權は沒落したが、之に代るべき新なる和蘭人の登場を見ずして、一五八三年バーブは死しサヒド・アルヂン・ベルカト・シャ(1)が王位に卽いたのである。

(1) Sahid al-din Berkat Sjah

西班牙の東洋貿易の牙城

かく西班牙のモルツケン群島經營は失敗したのであるが、當時一方に於いて西班牙の東洋貿易も甚だ香しからぬ影響を本國に與へつゝあつた。元來十六・七世紀に於いて、比律賓群島の土民は多く未開狀態にあつて產業技術も極めて幼稚であつた。從つて比律賓に於ける西班牙人の需要は到底其處の產物によつては滿しきれず、必然的に支那及び日本等の近隣の文化國に物資を仰がなければならなかつた。しかるに支那貿易に從事する爲には銀が絕對に必要であつた。支那人の

間に於ける銀の需要は明代に於いて急激に增大し、銀と香料なくしては到底支那貿易を行ふ事は出來なかつたのである。しかるに比律賓群島に於いては香料は產出しない。從つて其處に於ける西班牙人は銀を以つて支那から物資を買ひ入れなければならなかつたのである。そして彼等はこの銀を西班牙領のメキシコからもち來つたのであつた。一方西班牙領メキシコに於いては當時絹織物に對する需要があつた。しかるに支那はこの時 世界一の絹織物の產地であつた。印度、南洋、東洋各地の商人は何れもこの絹織物を得んが爲に支那へ集つて來たのである。此處に於いて比律賓群島の西班牙人は、絹織物を支那からアメリカの新西班牙へ運搬し、銀を新西班牙より支那へ送る仲介によつて利益を得る事となつたのである。此處に於いて新西班牙のメキシコ銀は、大西洋を渡つて西班牙本國に流入せずして、太平洋を橫斷し、比律賓を經由して支那に流入して行つたのである。そしてこのメキシコ銀の支那流入は比律賓の對支貿易の發展につれて幾何級數的な增加を見せたのである。この樣な事實は、新西班牙を唯一の販路としてゐた西班牙本國の絹織物業は輸出の減少を來し、又重商主義政策に立脚せる西班牙王國の財政は致命的な打擊をうけるといふ結果が導かれたのである。

かくの如き比律賓の東洋貿易と西班牙本國との利害の矛盾は、極く初期から見られたのであつ

(1)Sangley

て、西班牙政府は東洋貿易制限令を屢々發布したのであるが、いさゝかの效果もなかつた。しかし、比律賓の對支貿易が、西班牙人とサングレイ(1)と稱する支那商人との間に行はれて居る間は、比律賓にとつては未だ意味のあるものであつたが、一五八〇年の合併以後葡萄牙人がこの貿易に入つて來、そして支那商人を壓迫してから、對支貿易は西班牙のみならず比律賓にとつても全く有害無益なものになつて終つた。卽ち、從來支那商人より安價に買ひ得た支那物產は、葡萄牙人が入つて來るや、彼等によつて著しく價格を吊り上げられたのである。その爲十七世紀初期に於ける比律賓の西班牙人は、重大な經濟的危局に直面する事になつたのである。西班牙の比律賓經營は、對支貿易の退據地獲得としてより外に當時に於いては何等の經濟的意義を有して居なかつた。しかもその對支貿易自身が西班牙本國に對してかくの如き重大な矛盾を包含して居たのである。こゝに於いて西班牙政府當局が比律賓經營に對して積極的な熱意を喪失して終つたのはむしろ當然の事であらう。

以上述べた如く葡萄牙の勢力は衰退に向ひ、西班牙は又、その新大陸貿易との矛盾から東洋諸植民地の經營に熱意を失ひつゝあつた頃、新興勢力の二英吉利は更に第二回の遠征艦隊を派遣して、積極的に乘り出して來たのである。

(1)Thomas Cavendish
(2)Mariana

一五八六年七月二十一日、トーマス・キアヴェンデイッシュ(1)はプリマスを出帆、フランシス・ドレイクの足跡を追うた。そしてマゼラン海峡を通過して西班牙領南アメリカ沿岸を掠奪しつゝ太平洋に進み、マリアナ島(2)と比律賓群島に到着したのである。西班牙人と抗爭して居た比律賓の土民は大にこのイギリス人を歡迎したのであつた。そして西班牙人との爭闘に於ける援助を乞ふたのであつたが、キヤヴェンデイッシュはこれを拒絶した。彼は比律賓の地形を詳細に調査したる後モルッケン海を横切り、スマトラからテイモール迄の南洋海上を巡航して爪哇を訪れた。そして其處の土民と種々の契約を取りむすび、將來の南洋遠征を容易ならしむる基礎工作を行つたのであつた。それから彼は希望峯を迂回して歸途につき、一五八八年の九月にプリマスに歸着したのである。(註56)

〔註56〕 Campbell; Ibid. Vol. I, p. 165.

このキヤヴェンデイッシュの遠征の時には、南洋群島の何處の地へも英國は自己の勢力を積極的に樹立した譯ではなく、單に調査を目的として各地を巡航したにすぎなかつたが、これによつてイギリスが、組織的な東印度政策の樹立に乘り出すべき刺戟を與へられた事は否定出來ない所である。彼によるこの遠征は、正に將來の積極的建設への準備としての役割を果したものである。

(1)Raymond
(2)James Lancaster

第三回目のイギリスの東印度遠征は一五九一年に行はれた。今度は前二回と異り、希望峯廻りの航路を採つたのであつたが、この遠征は全く不運そのものであつた。先づ希望峯に於いて一隻は病人を滿載して引き返すの止むなきに至り、希望峯を離るゝや否や暴風雨の爲に旗艦が難破して指揮官ライモンド(1)が死んで終つた。其處で殘りの一隻をジエームス・ランカスター(2)が指揮して漸くアチエに辿り着くを得た。此處から彼は胡椒を積んで歸航の途についたのであつたが、又しても途中嵐に會ひ慘澹たる姿でブリマスに到着したのである。(註57)

〔註57〕 Campbell; Ibid. I, p. 169.

この遠征は明に結果から見れば失敗に終つたのであつたが、これより葡萄牙、西班牙の英吉利船の東印度進出に對する反感は漸く高まつて來たのである。

かくして十六世紀末、南洋諸島に於いては葡萄牙及び西班牙の舊勢力が後退期に入り、新に英吉利の進出が積極的に開始されようとして居る時に、玆に更に强力な重大役割を果すべき新しい競爭者が登場して來た。それは和蘭人である。そして新しき世紀を迎へると共に、葡萄牙支配下の古き時代は去つて、南洋諸島は和蘭人の、更により强力な積極的支配の下に入つて行つたのである。

かくの如く、南洋諸島に於ける歐人の勢力の間に、重大な交代が行はれんとして居る時に、其の地に於ける我々日本人の活動狀況は如何なるものであつたらうか。それを一應顧みて、然る後に葡萄牙の南洋政策全般を簡單に述べる事とする。

倭寇の南洋進出

明の嘉靖年間（西暦一五二二年――一五六六年）、丁度我が國では後柏原天皇から後奈良天皇を經て正親町天皇の御代に至る、室町時代の末期に於いて、我が國人が倭寇として支那海上を縱橫に活躍した事は、史上周知の事實である。これ等倭寇は謂はゞ半商半賊とでも稱すべきものであつて、その商業的活動は目覺しいものであつた。そして彼等は支那海のみならず、遠く南洋方面へも進出したのである。

ゴール人

葡萄牙人がマラッカを占領した當時、其處へ年々貿易に來る者ではゴール人とレキオ人とがあつた。このゴール人が何國人かは學界で永年問題になつて居る所であるが、何れにしても日本人か琉球人かを指す事は、彼等のもたらす產物や性情からして容易に推察する事が出來る。たゞ日本人か琉球人かゞ問題になるのである。物產や住民の性情から考へればゴール人は日本人であると云ふ事が肯定されるのであるが、一方ゴール人をレキオ人と同じであるとして居る葡萄牙側の所傳にして正しいものとし、又當時の琉球人の海外活動狀況等を考へれば、それは琉球人であるとも思はれるのである。それは恐らく、岡本良知氏が云はれる如く、その時葡萄牙人は東洋諸國に對して全く無知識であつた爲、日本人と琉球人との區別がつかず兩方ともゴール人又はレキオ人と呼んだもの〔註58〕と見るのが至當かも知れない。

〔註58〕岡本良知氏十六世紀日歐交通史

さてこのゴール人が或る場合は日本人であるとすると、葡萄牙人の記錄に依れば、彼等はマラッカに來ても貿易を終へると直に母國に歸還したといふ事である。十六世紀前半に於いて日本人の南洋方面に交通する者は可成り在つた樣であるが、それ等の者は何れも彼の地に定住するには至らずして、交易を終へるや否や迅速に立ち去つた事が推察されるのである。彼等ゴール人の載來した品物は金銀塊、絹類、陶磁器、銅等であつた。この中、金塊は大いに葡萄牙人に依つて注目されたらしい。この世紀の初め日本人は金を輸出して居つたのである。この外にゴール人は明に日本刀と思はれる刀劍類をも船載したのである。

かくして十六世紀初頭に於ける日本人の南洋交通の痕跡は漠然乍ら見出し得るのであるが、岡本良知氏も云はれる如く、ゴール人及びレキオ人を琉球人のみならず日本人をも加へて考へねばならぬが、葡萄牙人の支那に至る迄は、彼等の報告にも史書にも日本に相當する語を發見せず、

琉球の名に基くレケオが數々見出されるのに對比すれば、日本人は當時琉球人ほど多く南洋に交通しなかつたであらうといふ事が推察される。(註59)

邦人の南洋渡航

〔註59〕 岡本良知氏前揭書

葡萄牙人が頻繁に日本へ來航する樣になつた十六世紀の後半になると、漸く日本人の南洋各地に渡來し、その地に在留する者が增加して來た。而してそれはヒリッピン群島を除いては概ね葡萄牙人に使傭人として購はれて連れて行かれたものである。當時葡萄牙人の東洋諸國に於ける奴隷使役及び賣買は常習的な行爲であつて、その爲支那に於いては重大な紛爭を起し、支那官憲の葡萄牙人壓迫の一因をなして居るのである。さういふ彼等であるから、日本へ來ても相變らず人身賣買を行つて居たのである。しかも當時日本は戰國時代で領主の庶民に對する極端な苛斂誅求と戰亂による荒廢は、彼等を困窮のドン底に陷れた。その結果子女を賣る者が增加し、奴隷生成の要因が作られたのである。(註60)

〔註60〕 岡本良知氏前揭書

かくして、葡萄牙船に依つて送られた日本人は、當時、葡萄牙の勢力下に在つた印度、南洋の各地に於いて使役されたものであらう。その數は幾許であつたかは到底明かにし得ない所である

が、恐らく想像以上多數に上つて居たものに違ひない。一五六七、八年の頃、葡萄牙人がアンボイナを攻撃した時、土民兵の中に六百人の日本人が居つたといふ。(註61)その當時既に南洋各地に於いて日本人の居留せるものが相當居つたといふ事が朧氣乍ら推察出來るのである。この時、日本人が通商の爲に渡つて來たものか、葡萄牙人の使傭人として送られてのち土着したものか判明せぬが、恐らく後者ではないかと思はれるのである。

〔註61〕 Danvers; Ibid. Vol. I, p. 537.

かくの如き日本人は、男子にあつてはその好戰、勇敢なる氣象を買はれて、主として軍事に使はれたものである。印度のゴアや、馬來半島のマラッカ等に於いて、土民と戰ふ葡萄牙の有力な兵力をなして居た事は、葡萄牙側の種々の所傳に見えて居る。女子に於いては主に妾婢とされたのであつて、かゝる女との目に餘る放縱な生活は、種々の紛議をかもし出して居るのである。(註62)

〔註62〕 岡本良知氏前揭書

既に、十六世紀の初頭から中葉にかけて活躍した倭寇も後半に於いては終熄し、我國人の海外發展も一時中止された。然し實際には南洋方面へ渡航する者は逐年增加して行つたのであるが、それは通商交易を目的とする自主的發展としてゞはなく、葡萄牙人の使傭人として渡航して行つ

たものである。從つてそれは隱れたる下積みの存在であつて、歷史の表面には殆んと現れて居らぬが、時たま見出される斷片的な史料からその實數は可成り多數に上つたものである事が、容易に考へられるのである。南洋諸島に於ける我國人のかくの如き悲しむべき狀態は、葡萄牙人が其處に支配權を握つて居た十六世紀一杯は持續したものと思はれる。そして和蘭人が覇權を握つた十七世紀に至るや、我國人の南洋渡航の性質も次第に變つて來たのである。卽ち一方に於いては、御朱印船貿易の展開など我國人の自主的海外發展の再開は、必然的に我國人の通商を目的とする南洋渡航熱を刺戟し、又一方では、基督教徒の壓迫が始るや、教徒にして放逐された者、難を海外に避けんとした者等の多數は南洋へ渡航したのである。そして鎖國政策が嚴重になつて海外在留者の本國歸還が不可能になるに從ひ、此處に永久的に南洋に定住するようになつたのである。ジヤカトラ(1)の日本人等はその著名な一例であるが、かゝる十七世紀に入つてからの南洋に於ける日本人の狀態については次章に於いて述べる事とする。

以上述べた如く、十六世紀に我國人が南洋に渡航したのは、概ね葡萄牙人の使傭人として行つたのに反し、比律賓群島の場合はいさゝか趣を異にして居る。

西班牙側の種々の報告及び史傳等によれば、西班牙人が比律賓群島に到着し占據する以前から、日本人が其處に交通して居た事を臨氣乍ら推察する事が出來る。概ねルソン島の北部に於いて土民と通商して居たらしい。彼等のこの通商は西班牙人の比律賓群島發見後も繼續して占據の後まで及んで居る。この比律賓に交通した日本人は、倭寇の餘波であつて云はゞ半商半賊的性質のものであつた。自分の意のまゝに取引が行ひ得れば溫順な商人となり、然らざれば忽ち變じて海賊になると云ふ次第である。それ故に比律賓群島に於いて西班牙の支配權が確立して、斯る日本商人がこの新しい權力と接觸するようになると、其處に種々の紛爭が起つて來たのである。一五八二年以後、西班牙人が屢々日本海賊船を比律賓沿岸に討伐した事實が、種々の所傳に現れて居る。そして一方日本の比律賓通商船隊も次第に規模が大きくなつて來たようである。一五八二年に、西班牙人がカバヤン(1)に於いて討伐した日本人は、十一艘の船と一個の要塞を有して居たといふ事である。(註13)此處に至ると最早それは單に通商のみを目的としたものとは考へられない。しかもこの時の船隊は日本人のみでなく、多數の支那人を交へて居たのである。その武裝の點から、又組織の上から見て彼の倭寇と何等異る所がないのである。西班牙人がそのマニラ建設の當初、非常な脅威を受けた支那海賊リマホン(2)の軍中にも日本人が多數參加して居たといふ事である。これ等半商半賊的日本船隊のため、西班牙人は比律賓經略の當初、非常に苦い經驗をなめた

(1)Iakatra

(1)Cagayan
(2)Limahong

ものであらう。

〔註63〕 Blair & Robertson; Ibid. Vol. 3, p. 205.

その後、西班牙人が、保證狀携帶を條件として通商を許した政策と、改宗者に對する敎會の溫和な政策と相俟つて、日本人は平穩裡に比律賓に通商する樣になつたのである。その結果渡來して居留する者が俄に增加したようである。(註64)

〔註64〕 岡本良知氏一五九〇年以前、比律賓群島と日本國の交通と貿易 史學 一四ノ四

我國人の比島貿易

しかし乍ら日本商人と西班牙人との平和關係も短期間にして破れ、西班牙人の猜疑心が增大した。勿論この猜疑心の原因は豐臣秀吉の比律賓遠征計畫日本商人に對する壓迫が漸く强烈となつた。此處に於いて日本商人は再び海賊的性質を表はし、掠奪に從事し西班牙の情報に在るのである。人と衝突を繰り返す樣になつた。そしてかゝる情勢のまゝ十七世紀を迎へたのである。

さて次に日本人の比律賓貿易品について簡單に述べよう。

日本人の比律賓への輸出入品は年代により色々に變化して居る。西班牙人の占據以前或は初頭には、日本人は盛に銀を船載し來り、而して金、蘇木、綿、米等と易へて居たのである。けだし、日本は當時有數の銀產地であつたのである。所が一五八〇年以後になると、銀の輸出は著しく減少し、その代りに、小麥、穀物粉等の食糧品が第一位となり、牛馬、刀劍、銅、水產物等が日本船の船載品として擧げられる。銀の減少は、西班牙領比律賓の基礎が强固になると共に、新大陸からメキシコ銀が豐富に流入する樣になつたからである。比律賓から日本への輸出品としては第一に金が擧げられるが、これは初めから一貫して變らなかつたものである。當時比律賓群島に於いては金が可成り多量に產出して居たのである。後一五九〇年頃より生絲及び絹織物が多量に輸出されたがこれは支那よりの轉賣によるのである。この日本への轉賣と、西班牙領米利加への輸出の爲、支那から比律賓への絹織物の輸出量は一五八〇年頃より俄に增大して居るのである。(註65)

〔註57〕 岡本良知氏一五九〇年比律賓群島と日本間の交通と貿易

以上甚だ簡單乍ら、十六世紀後半の比律賓群島に於ける日本人について述べたが、當時他の南洋諸島への我國人の渡航が葡萄牙人の使傭人として行はれ、悲慘な境遇に在つたのに反し、比律賓群島に於いては自主的な通商を目的として交通居留し、時には白人の權力に對抗して居つたといふ事は確に注目すべき現象である。そしてこの比律賓通商は十七世紀に入るやます〳〵發展の一路を辿つたのである。

以上此處に、和蘭人出現迄の南洋に於ける歐人の經營を述べた。そして、西班牙人や英吉利人の進出はあつたにしても、大局から見れば十六世紀の南洋は完全に葡萄牙の獨占的支配の下に在つたといふ事が出來る。故にこれから葡萄牙の南洋政策一般を簡單に述べて序說を終らうと思ふ。

葡萄牙の東洋政策

十六世紀の歐洲は商業資本主義の段階に入つて居た。そしてこの時代を支配した指導原理は重商主義政策であつたのである。

商業資本主義時代に於ける交換經濟の發達は、必然的に王權の伸張を促し其處に統一的な近世國家を成立せしめたのである。かくして新に出現した國家は、統一された廣い領土に於ける司法及び行政權を地方分權者から回收したので、自ら專門的な官僚を有しなければならなくなつた。又內的秩序を維持し外敵に對抗する爲には直屬の强力な軍隊を養成する必要がある。かゝる官僚や軍隊の維持には貨幣が絕對に必要である。かゝる理由を以つて當時政府の貨幣的支出は非常に增大した。この財源は主に租稅及び公債であつたがこれ等による收入の增大を計る爲には、國內に流通する貨幣の量を增加し、國民の富を增殖しなければならなくなつたのである。此處に於いて近世國家は等しく重商主義政策を採つたのである。從つて重商主義政策は根本に於いて貨幣價値の追求を目的としたものである。

貨幣價値獲得の方法は種々とある。國內產業を發達せしめてそれから利潤を得るのも一方法であるし、更に直接的には金銀鑛山を採掘するのも有力な方法である。西班牙の新大陸に於ける鑛山開發の事業も、かかる重商主義政策に基くものである。

所が葡萄牙の場合には起すべき產業もなく、開くべき鑛山も有してゐなかつた。此處に於いて彼等は東方に於ける香料貿易に眼をつけたのである。當時歐洲に於いては、香料は藥劑及び料理の主要成分として珍重されて居た。關稅、租稅は香料の一種である胡椒に依つて上納され、恰も貨幣の如き機能を有して居たのである。葡萄牙人の南洋貿易——廣く云つて東洋貿易は、この香料を中核として行はれたのである。かくの如き重商主義政策に立脚した、貨幣價値獲得を目的とした香料貿易であるから、それが掠奪的性格を帶びたのは當然である。彼等は武力を以つて土人を脅迫し、法外な設定價格を以つてする物產の先買權を獲得したのである。そして相手に賣る意志のない場合はこれを强奪するのが常道であつた。貨幣價値の獲得を目的とした彼等の東洋貿易であるから、現實の財寶は手當り次第沒收したのも當然の事であらう。アフリカ、アラビヤ、印度等の征服地から、被征服者が幾世紀に亘つて蓄積した財貨は、かくして多量に掠奪されて本國

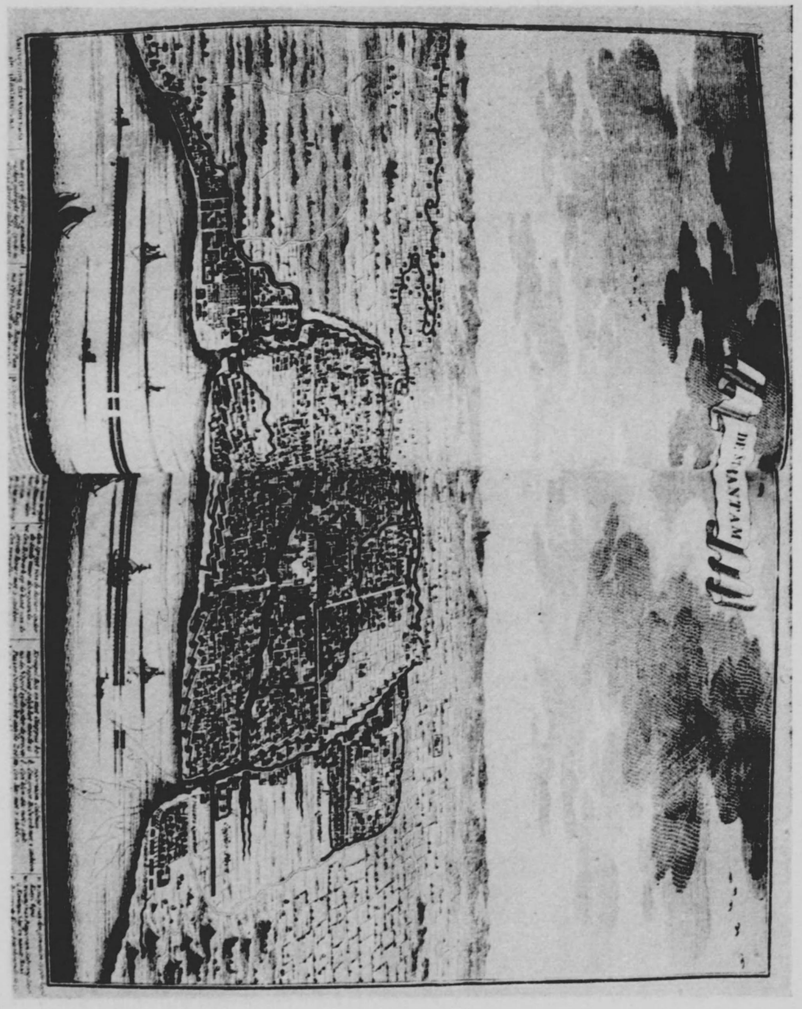


圖 瞰 鳥 市 ム タ ン バ 紀 世 八 七 十

に送られたのである。

葡萄牙人は當時本國に重要な產業を有しなかつた。從つて彼等は東洋植民地に於いて、本國製品の販路として機能を見出す必要はなかつた。彼等はたゞ其處に於いて香料さへ强奪し得ればよかつたのである。從つて葡萄牙人は東洋に於いて何等積極的な植民政策を行はなかつたのである。此處に葡萄牙の東洋政策の根本的な脆弱性が存して居たのである。そしてかゝる弱點は、具體的には十六世紀末、土民の激烈な反抗と和蘭勢力の勝利となつて現れ、葡萄牙勢力は此處に崩壞したのである。

第一章　初期に於ける和蘭の南洋經營

第一節　和蘭人の來航

和蘭、東印度遠征の直接原因

十六世紀を通じて、歐洲に於ける東印度貿易の中心地は、云ふ迄もなく葡萄牙のリスボンであつた。葡萄牙は著しく軍國的且つ掠奪的性格を帶びた商業政策の下に、强力な王室獨占を以つて東印度貿易を壟斷して居たのであつた。當時歐洲社會に於いて珍重されて居た香料を主とする熱帶產物は、悉くリスボンの會所に集中されて來たのである。

一方に於いて、當時漸く勃興しつゝあつたネーデルラントの商人達は、リスボンに集中されたかゝる東印度物產を、歐洲各地に中繼して中間利潤を得て居たのである。十七世紀に於いて和蘭の東印度制覇を成就せしめた毛織物工業はこの時未だネーデルラントには發達せず、土地狹隘にして低濕、何等主要產業を有せざるこの地の住民にとつて、リスボン貿易による利潤は、彼等の重要な生活の基礎であつたのである。所が此處に事態は一つの大きな急轉回をするに至つた。

一五六〇年代に火蓋が切られたネーデルラントの西班牙專制權力に對する戰爭は、一五七九年

(1)Utrecht
(2)Haarlem

のユトレヒト(1)同盟即ち北ネーデルラント七州の結束を以つて、和蘭聯邦の本格的な獨立戰爭に發展した。かゝる中に、一五八〇年葡萄牙は西班牙に併合されてフィリップ二世の支配下に置かれる事となつた。この當然の結果として從來リスボンに出入して居た和蘭商人は此處から閉め出されて終つたのである。

和蘭、東印度遠征を企つ

リスボンに於ける東印度貿易の中間利潤を奪はれた和蘭商人は、此處に於いて直接東印度に到達し、利益多きこの貿易に從事せんと志したのであるが、時あだかもよし、一五八八年、英吉利海軍は和蘭海軍の援助の下に西班牙の無敵艦隊を完膚なき迄に撃滅した。無敵艦隊の敗北は西班牙の海上權の決定的崩壞を招くに至つた。和蘭はかゝる歴史的好條件の下に第一回東印度遠征を敢行する事となつたのである。

所が當時、歐洲より東印度に達する航路は、自己の獨占を保護せんが爲に葡萄牙人によつて固く秘密とされて居て他國人には知るよしもなかつた。これが爲に、和蘭人は、一つは地理的知識の缺乏から、一つは葡萄牙船隊を回避せんが爲に北方に東印度航路を求めたのであるが常に失敗に終つたのである。こゝに於いて和蘭商人は、葡萄牙人の往來する航路に依つて東印度に船隊を派遣せんとし、そしてこの航路に關する知識を得んものと努力した。これより先、ハールレム(2)

(1)Jan Hu'ge. van Linschoten
(2)Goa
(3)Cornelis Houtman
(4)Amsterdam

人、ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン(1)は、葡萄牙船隊の一員として、一五八三年四月に、リスボンより印度のゴア(2)に赴いたのである。勿論、彼の歸來に依つて和蘭人は東印度航路に關する知識を大に得る事が出來た事は云ふ迄もないが、和蘭の東印度遠征最初の成功者、東印度貿易最初の開拓者として、彼の地に關する事情を大量的に和蘭にもたらしたものは彼のコルネリス・ハウトマン(3)であつた。ハウトマンは一五九三年頃、葡萄牙に捕虜として滯在して居る間に、其の地の東印度商人や航海者達の話を聞いて大に見聞を廣めたと稱して居たのであつた。アムステルダム(4)の商人達は、その請願に從つて莫大な身代金を拂ひ彼を葡萄牙より取り戻したのである。

且つ一五九五年リンスホーテンの航海記が發表されて、東方航路の狀況が明瞭になつた結果東方遠征の機運が漸く熟し、アムステルダムの著名な九人の商人は相會して、遠征船隊の派遣に關する具體策を考究する事になつた。勿論この計畫については豫想される西班牙、葡萄牙の猛烈な妨害を危懼して相當な反對意見もあり、政府も實行延期を希望したのであるが、リンスホーテンが爪哇島の資源物産の豐富な事實を强調し、爪哇人自身マラッカに赴いて交易を行つて居る爲葡萄牙人の來航は見られず、彼等から妨害を受ける事なく同島に渡航する可能性が存在する旨を述

ハウトマンの遠征

(1)Compagnie van Verre
(2)Mauritius
(3)Hollandia
(4)Duifken
(5)Texel
(6)Canary
(7)Aguada de sam Bras
(8)St. Augustyn

べたので、如上の反對論は消滅したのである。勿論リンスホーテンの記述が當時の爪哇島の事情を正しく傳へて居るとは云ひ難いが、和蘭人が之によつて大いに動かされた事は明であり、その第一回遠征船隊が先づ爪哇島に寄港し、此處に根據を定めた一の重要な動因を爲した事は疑のない所である。

此處に於いてアムステルダムの商人達はフエレ會社[1]を組織して、ハウトマンを隊長として第一回の遠征船隊を東印度に派遣する事となつた。かくしてアムステルダムに於いて、マウリチウス[2]、ホランディア[3]、アムステルダム、ダイフケン[4]の四隻の船が準備され總員二百四十九名大砲六十四門を分載した。當時和蘭人の使用した船舶は西班牙、葡萄牙の船舶(註1)に比し極めて小型で精々二百三十噸前後のものであつたが、行動の迅速性に於ては遙かに後者を凌ぎ、種々の長所を有し索具、備砲、乘組員の素質も又優秀であつた。さて上述の船隊は一五九五年四月二日、テキセル[5]より第一回東印度遠征の壯途に上つたのであるが、十九日にはカナリイ[6]群島を過ぎ、アフリカの西海岸を一路南下して、暑熱と戰ひつゝ喜望峯を、八月二日に望見し、同じく四日、喜望峯を去る四十五哩の地點に在る、葡萄牙名でアゴアダ・デ・サム・ブラス[7]と云ふ灣に投錨した。十一日同地を出帆、九月二日マダガスカル島を望み、セント・アウガスチン[8]灣に達したが、此處でホランディア號の船長ヤン・ダツハヌムス[1]が死したのでピーター・デイルクス・ケイゼル[2]がこれに代つた。其の後この地の土民のため種々の妨害を受けたので、休養する暇もなく十二月十四日此處を出帆し、途中暴風雨の爲に再びセント・マリア[3]岬に引き返し、一五九六年一月二十一日其處からアントンギル[4]灣に向ひ、二十三日同地に到着した。しかしこゝに於いても、土民との間に紛爭を惹起し、二月十二日其處を出帆して、六月五日スマトラ島の南岸南緯五度半のエンガノ[5]島をすぎ、同月十一日、ダンピン[6]より程遠からぬスマトラ島の一地點に到着する事を得たのである。此處に於いて土民と貨物を交換したのであるが、更に彼等の案内によりバンタム[7]に到着したのは同月の二十二日であつた。

(1)Jan D'gnumsz
(2)Pieter Dirksz Keizer
(3)St. Maria
(4)Antongil
(5)Engano
(6)Dampin
(7)Bantam
(8)Carack
(9)Galeon
(10)Scenda
(11)Tji Bantam

〔註1〕 カラック[8]船及びガレオン[9]船と云ひ、十六世紀に於てはその大きさは千六百噸に達するものがあつた。英國に拿捕された葡萄牙のカラック船は長さ百六十五呎、巾は四十七呎あり、三十二門の大砲を搭載し、六百乃至七百人の人員が乘組んで居たといふ。かの有名な西班牙無敵艦隊百三十二隻の中大多數はかゝる千三百噸以上の大船であつたのである。

〔註2〕 François Valentyn; Oud en Nieuw Oost-Indie; Amsterdam, 1724-6. Deel. I, a, p. 172-3.

バンタムは西部ジャヴアのスンダ[10]海峽に臨んだ國であつて、チバンタム[11]河口にある同名の

(1)Padjadjaran　(4)Baroedin　(8)Hasanoe'd-din
(2)Kalajalang　(5)Henrique Leme　(9)Lampong
(3)Djaja-kerta (Djakatra)　(6)Demak　(10)Pangeran Joesoef
(7)Cheribon

町が首府であつた。このバンタム國の起源は可成り古く、土民の記錄によると、パジャジャラン(1)王國の建設者が十二世紀の初葉に弟のカラヤラン(2)にジャヤカルタ(ジャカトラ)(3)の地を、バルーデン(4)にバンタム地方を與へたのが始りであると云ふ。その後このバンタム國は次第に强大となりスマトラ及びボルネオに迄その勢力を擴張したのであつた。白人が始めて訪れたのは一五二二年の事であつて、マラッカから葡萄牙人エンリッケ・レーメ(5)がアルブケルケの命を受けて通商關係の樹立を目的として來たのである。この時王はデマ(6)王及びチエリボン(7)の回教王の壓迫に對抗する爲に彼を歡迎した。葡萄牙人もこの地に城砦を築造せんと志し、一五二七年迄は時々訪れたらしいが、丁度この頃よりバンタム市及び海岸地方一帶が回教王の勢力下に入り、城砦築造の希望も失はれたので空しく去つて行つた。(註3)バンタムは回教徒に征服されたる後暫くデマ國王を藩主と仰いで居たのであるが、一五五二年頃デマ國の衰亡に乘じて獨立しバンタム王國を建設した。(註4)治者の位につき、次いで一五五六年頃デマ國の衰亡に乘じて獨立しバンタム王國を建設した。(註4)彼は四隣を經略してジャカトラのみならずランポン(9)迄も征服したのである。バンタム市が商港として發展して來たのもこの回教王の時からで、それ迄は名もない一寒村に過ぎなかつたのである。(註5)一五七〇年ハサヌッヂン死してバンゲラン・ユスフ(10)が後を繼ぎ王位に昇つた。彼は十

(1)Pasarean　(5)Mankoebemi Djajanagara
(2)Pangeran Mohamed　(6)Njai Emban Rangkeng
(3)Palembang　(7)Sjah Bandar
(4)Pageran Aboelmafashir　(8)Laksamana

年の間位に在つたが、バンタムに水稻耕作法を輸入したり、回教を更に奥地に普及せしめたりして種々の功績を殘した。そして死後バサレアン(1)の稱號を贈られた。一五八〇年彼の子バンゲラン・モハメット(2)が位についた。(註6)ハウトマンの率ゐる第一回和蘭遠征船隊が到着したのは、丁度この事件の直後である。バンゲラン・ムハメットの死後、その子バンゲラン・アブルマファシル(3)が王位についた。バンゲラン・ムハメットの死後、その子バンゲラン・アブルマファシル(3)が王位についたが、彼は生後僅か五ケ月の幼主であつて、マンクブミ・ジャヤナガラ(4)がその後見を委ねられた。しかし、實際には幼主の保姆なるニヤイ・エムバン・ランクン(5)の勢力が壓倒的に强く、彼女が事實上政權を握つて居たと云はれる。(註7)表面上の最高官としてマンクブミ(攝政)の外に、バンタムに於いては當時シャ・バンダル(7)(港務長)とラクサマナ(8)(水師提督)とがあつて政治に當つて居つたのである。(註8)

〔註3〕Encyclopaedie van Nederlandsch Indie. Amsterdam, 1921, Deel, I, p. 165.
〔註4〕Fruin Mees; Geschiedenis van Java. Deel. 2 p. 27.
〔註5〕Encyclopaedie van Ned. I. Deel I, p. 165.
〔註6〕Veth; Java, Geographisch, ethnologisch, historisch. Deel I, p. 165.

〔註7〕 Fruin Mees; Ibid. Deel. 2 p. 49.

〔註8〕 Veth; Ibid. Deel. I, p. 318.

バンタムの繁榮

ハサヌッヂンがバンタム王となつて以來、バンタムは商港として發展して來たのであるが、その後更にユスフ王が文化的、産業的諸政策に力を入れた結果、より一層の拍車をかけられて、十六世紀末和蘭人の渡來當時、その貿易は爪哇全土の首位を占め、四隣の諸地方、諸都市との交通は最も殷賑を極めた。波斯人、土耳古人、亞剌比亞人、支那人等多數の外國商人が寄港し市場に定住して居た。(註9) 葡萄牙人も屢々この港を訪れて、そのうち若干は支那人と共に市外に住んで居た。彼等と支那人は當時何故か市内に定住する事を禁せられて居たやうである。葡萄牙人はバンタムで丁子香、肉豆蔻、蕚澄果、白檀、胡椒等を買つてマラッカに運んで居たのである。(註10) バンタムを通じて、外國商貨は全爪哇島に流れ込んだのであつたが、當時此處に集散された商品について見ると、東部爪哇からは鹽を得、ジャパラ(1)及びジャカトラより砂糖を取り、マカッサル及びスムバワ(2)より米を輸入した。バンタムに於いては米は全所要額の四分の一を產するにすぎず、米の輸入は緊急缺くべからざるものであつた。バンジャルマシン(3)、ジャカトラ、チモール(4)及びバレムバンよりは多量の蜜と蠟が供給され、椰子及び椰子油はバラムバンガン(5)より、

(1)Djapara
(2)Soembawa
(3)Banjermasin
(4)Timor
(5)Balambangan

肉豆蔻、豆蔻花及び丁子香等の香料はモルッケン群島及びバンダ島より輸入された。白檀は小スンダ群島より產出し、象牙はスマトラ島より來た。其の他棉及び被服は主としてバリ及びスムバワより、錫及び鉛はマラッカのペラ(1)、ケダ(2)及びウジョン・セロン(3)(北西岬)より、(4)はカリマタ(4)群島より、樹膠はバンダ及びバンジャルマシンより輸入された。この様にバンタムには東印度群島各地より物產が集注し、その潤澤なる事驚くべき程で、鷄・卵・果實及び魚類等は極めて價低く、外國人すらも、一日二〇仙で贅澤に生活し得たといふ。これに對して、東印度の物產を求めてバンタムに來れる外國人は前述の如く種々あつたが、支那人は精粗陶器・絹反物・緞子・天鵞絨・繻子・絹絲・金絲・黃金布・針・櫛・眼鏡・簪・上靴・紙・扇・金箔・水銀・銅器・日本刀及び藥品等を輸入した。そして胡椒を始めとして藍・白檀木・丁子香・肉豆蔻・龍甲・象牙等を輸出した。葡萄牙人はマラッカより麻布をもち來り、丁子香・肉豆蔻・豆蔻花・白檀木・蕃椒及藥品を輸出した。その他波斯人は寶石及び藥品を、グジャラット人は麻布及び羅望子を、クリン人及びカンベイ人は多數の綿衣及び白衣を輸入し、ベンガル人は主として下等寶石及び小間物を商つて居た。(註11)

(1)Perak
(2)Kedah
(3 Oedjoeng Selong
(4)Karimata

〔註9〕 Fruin Mees: Ibid. Deel 2, p. 39.

〔註10〕 Rouffaer; De eerste schipvaart der Nederlanders naar Oost-indie, Deel 1, p. 126.

〔註11〕 Fmin Mees; Ibid. Deel 2, p. 40-41.

ハウトマン、バンタム人と爭ふ

ハウトマンの船隊が到着した時、バンタムは既にかくの如き繁榮にあつた。バレムバンに對して復讐の念に燃えて居たバンタム人は、自國軍は陸地方面より進擊するから海上よりその都市を砲擊するやうに和蘭人に要請した。しかし和蘭人は渡來の目的が平和的通商にあつて戰爭をなす爲でない旨を說いて、この要請を辭拒したのである。バンタム人もこれを諒とし盛大なる訪問が交換されたる後、條約が締結され和蘭人は貿易を開始し得る事となつた。所が彼等は新收穫の後には價格が下落すべき事を豫期して、故意に胡椒の購入を猶豫した。この事はバンタム人に面白からぬ印象を與へ、和蘭人の東印度遠征を不快視して居た葡萄牙人に、其競爭者(和蘭人)を中傷せしめる好機會を作つて終つたのである。會々バンタムの大傳(gouverneur の譯—松岡氏に據る)が若干の和蘭商品を購ひ、代價を胡椒で支拂ふ約束をした。所が何かの手違ひで支拂ひが滯つたので、和蘭人は不信の念を起して約束不履行の曉には都市を砲擊すると威嚇するに至つた。此處に於いてバンタム人は大に恐れてハウトマン外八名を捕へた。事態は險惡に陷り、和蘭船員は報復手段として泊地に在る數隻の舟を拿捕し、市内に二、三彈放ち翌日も之を反復した。しかし結局、四千五百盾の賠償金を以てハウトマン等は釋放せられ事件は一應の解決を見たのである。所が恰もマラッカより來た葡萄牙人は、バンタムのマンクブミに一萬レアルの金と諸々の珍品を贈呈して、和蘭人の交易禁止と其の船舶の拿捕を要求した。彼はこれを承諾して、バンタム貴族は今後和蘭人との交易を欲せざる旨を布告し、四隻の和蘭船を襲擊せんとする準備を整へた。かゝる形勢を見て、平和的に交易を營む希望絶えたるを以てハウトマンはバンタムを出帆し、爪哇海岸の巡航に出でたのである。(註12)

〔註12〕 Fruin Mees; Ibid. Deel. 2. p. 53-54.

ハウトマンはバンタムより十一月六日ジヤカトラ(1)に向ひ十三日同地に到着した。この地の王と交歡を遂げたる後十七日其處を出發、同日カラワン(2)岬に投錨したのである。そして更にジャヴアの北岸を巡航してジヤパラ(3)を過ぎ、キリマン・ジヤヴア(4)島を望み、十二月二日にはツバン(5)の町を通過しシダヨ(6)に到達した。所が此處に於いても和蘭人は土民との間に紛爭を起したのである。即ち十二月五日、土民軍は大擧して和蘭船隊を襲擊し、兩軍の間に激烈な戰鬪が交へられた。その結果、和蘭側はアムステルダム號の船長ヤン・スヘリンヘル(7)以下十二名、土民軍偲は百五十名の犧牲者を出して結末を告げ、和蘭船隊は其處を去つて、翌六日マヅラ(8)に到着したのである。此處に於いても和蘭人は失策を演じ土民と衝突した。そしてマヅラ王とその部下を殺

(1)Jakatra
(2)Carawang
(3)Japara
(4)Kiriman Java
(5)Toeban
(6)Cidajo
(7)Jan Schellinger
(8)Madoera

ハウトマンの歸航 (1)Luboc (2)Jan Molenaar (3)Balamboeang (4)Bali (5)Padan

し、二十一人の捕虜を得、何等の貿易をも行はず十二月九日其處を出帆してルボック(1)に向つたのである。

ルボックに到着したのは同月の十四日であつたが、其處を出帆後、二十五日には再び同地に引き返さなければならなくなつた。それはその日にマウリシュス號の船長ヤン・モレナール(2)が急死したからである。そしてこの死因に毒殺の疑があつて、嫌疑がハウトマンの上にかけられて彼は部下の爲に鎖で拘繋されて終つた。然し、三十日に至り嫌疑をかけられたまゝ拘禁を解かれた。一五九七年一月一日、ハウトマンは一は破損甚しき事から、一はアムステルダム號をルボックに於いて燒却した。そして十一日其處を拔錨してバランブアン(3)海峽に向ひ、同月二十二日バランブアンの町から西北西に一哩距つた高地の下に投錨したのである。彼等和蘭船隊は二十五日其處を出帆して更に航海を續け、二十七日にはバリ(4)島に到着した。彼等は最初名もない砂濱に到着したのであるが、其處から後にバダン(5)灣に入港したのであつた。この地に於いても和蘭人は土民との間に紛爭を起した。卽ちバランブアン王は一時的ではあつたが若干の和蘭人を抑留した。二月二十日にはマウリシュス號の乘組員二名が上陸したまゝ抑留されて遂に歸船しなかつたのである。二月二十六日、和蘭船隊はこの地を拔錨、爪哇島南岸を巡航して歸航の途に就いたのである。この時總員二四九人中、和蘭人八九人、土人八人、マラバール人(1)二人、マダガスカル人二人、支那人一人、馬來人一人、子供の爪哇人一人にグゼラート人(2)一人、合計一〇五人が生き殘つて居たのであつた。和蘭船隊は一五九七年四月二十四日テラ・デイ・ナタール(3)を過ぎたが、二十六日には僚船ホランデイア號が迷つて本隊から離れて終つた。五月二日喜望峯を過ぎ、同月二十五日セント・ヘレナ(4)島に到着したが、葡萄牙船三隻が停泊して居る爲に投錨する事を得ず、ダイフケン號から僚船マウリシュス號にこの旨を警告して、直にこの島を離れた。そして見失つたホランデイア號を再び發見し、七日には赤道を通過して八月十日ベッテン(5)に到着した。所が此處に於いて暴風雨に會ひ、ダイフケン號とマウリシュス號はテキセルに入港する事を得たが、ホランデイア號はマストを折られ漂流して居る所を助けられて十四日に入港したのである。(註13)

ハウトマン遠征の意義 (1)Malabar (2)Guzerat (3)Terra di Natal (4)St. Helena (5)Petten

〔註13〕 Valentyn; Ibid. Deel. 1. a, p. 174.

このハウトマンの歷史的な最初の東印度遠征は、かくして此處に二年四ケ月と十二日といふ日時を費して終末を告げたのである。ハウトマンはこの遠征中に於いて、商館の設置、土民との協商締結等は勿論の事、たゞ一度の圓滑な貿易すら行はず、單に若干の香料を積載して來た外は、

何等商業上の具體的な收穫をもたらさなかつた。しかもこの香料すら彼の拂つた莫大な犧牲を償ふには足らざるものであつた。故に彼のこの遠征は商業政策上より見た場合には明に失敗であつたと云はなければなるまい。彼の東印度に於ける態度は極端に武力的、掠奪的性格を帶びたものであり、その爲に土民との間に絶えず摩擦を生じ、土民に惡影響を與へた事は否定出來ない事實であつた。

しかし乍ら、かくの如く商業的立場から見れば失敗であつたとしても、彼の遠征のもつ歷史的重要性、彼の功績を我々は見失つてはならない。彼の場合には、商業的工作の遂行、政治的或は軍事的諸政策の確立はその本來の目的ではなかつたのである。これ等の事業は彼以後の諸遠征家によつて行はれるべき性質のものであつて、彼にあつてはかた〳〵第二義的なものでしかあり得なかつたのである。東印度は葡萄牙人によつて一世紀もの長きに亘つて祕密とされ、葡萄牙、西班牙兩國人以外の歐洲人にとつては全くの未知の世界であつた。ハウトマンはかゝる未知の世界への和蘭人として最初の遠征を試みたものであり、東印度航路及び東印度諸島の諸事情を和蘭へ傳へた最初の人であつた。彼の歸來に依つて和蘭は、彼以後の組織的なる東印度政策確立の準備知識を與へられたのである。彼の遠征のもつ歷史的意義はかゝる點に存すると見て差支へなかるべく、その限りに於いてこの遠征は、何等具體的効果を收めざるにも拘らず、成功であると考へられるのである。これ以外の意義をこの遠征に求める必要はなく、又求める事が既に無理であると云はなくてはならない。何故なれば、ハウトマン自身は單なる一個の adventurer に過ぎず、何等政治的な、組織的な能力を有して居なかつたからである。彼の遠征が武力的掠奪的性格を有し、そして絶えず土民と衝突を起したのもこの爲である。この點彼は葡萄牙の初期の東印度遠征家と一脈相通ずるものがある。

ハウトマン船隊の歸還によつて東印度諸島の事情やその航路の狀態が更に明に傳へられ、其處に於ける貿易の有望な事が喧傳されるや、進歩の氣象に富んだ進歩的な和蘭商業資本家の企業精神を刺戟し、東印度貿易船隊の派遣を目的とする會社がアムステルダムに一、ジーランドに二、ロッテルダムに二と續々設立された。之等諸會社は政府から大砲やその他の武器を受けて各々船隊を組織したが、一五九八年中に於て總計二十二隻の船舶が和蘭より東印度に向つた。(註14)この中でアムステルダムに設立されたのは新東印度航海會社(1)であつて、前のフエレ會社を合併し七十六萬八千盾の資本を有し、總員五百六十名八隻の船隊を組織したが、之がヤコプ・フアン・ネック(2)の第一回遠征船隊であつて、彼の他に副提督ウイプランド・フアン・ウアルウエイク(3)やヤコ

(1)Nieuwe Compagnie voor de Vaart op Oost Indie
(2)Jacob van Neck
(3)Wybrand van Warwyk

フアン、ネックの東印度遠征

(1)Jacob van Heemskerk
(2)Overijssel

バンタム人、僧人を走らす

プ・ファン・ヘームスケルク(1)等、初期の和蘭東印度政策の建設者として重要な役割を擔當すべき錚々たる人物が參加して居た。この船隊は一五九八年五月一日テキセルを解纜して南下し、七月二十四日喜望峯に達し、八月八日に其處を出帆、九月十七日にマウリチユス島を望み、其處に手頃の港を發見して八隻の中五隻が休養を取る爲に入港した。しかし殘りのマウリチユス、ホランディア、オフエレイセル(2)の三隻は更にセント・マリア島に到つて五日間碇泊した後其處を出帆して、十一月二十三日バンタムに達する事を得たのである。(註14)

〔註14〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel. 30, p. 143.

〔註15〕 Valentyn; Ibid. Deel. I, a. p. 175.

ファン・ネックが到着した時、バンタムの對蘭感情は前のハウトマンの來航の時とは比較にならぬ程の大變化を示した。ハウトマン來航の時、マラッカの葡萄牙人が一萬レアルの金品をマンクブミに贈つて、蘭人襲撃を乞ふに至つた事は前述したが、マンクブミ・ジャヤナガラは夫れを受納し承諾したのであつたが、和蘭人の出航に依つて遂に約を果す事が出來なかつた。このバンタム人の和蘭人に對する陰謀未遂は葡萄牙人にとりて甚しく不愉快な事であつた。一五九八年の初頭、蘭船拿捕の使命を帶びた葡萄牙の大船隊がゴアよりバンタムに達した所、一名の和蘭人も見な

(1)Van Heemskerk

バンタム人、ネックを歡迎

かつたので、バンタム人が彼等を欺いたのであると爲し、襲撃遂行を條件として與へた一萬レアルの返還を迫つたのである。マンクブミはその金は既に冒險事業に參加せる者に分配した旨を明にして之を拒絶した。そして和蘭人は既に出航したのであるから、葡萄牙人を援助し難いが海上に出て之を捜索し又はその歸來を待つ樣にと告げたのである。此處に於いて葡萄牙人はバンタムに滯留し、或る時は海岸市場を劫掠して逃走せる賣主が遺留した食料品及人員を全て船に運び、或る時は貨物を滿載せる支那ジャンクを拿捕したり、あらゆる惡行を恣にした。バンタム人は之を極度に怒り、窃かに準備を整へて三隻の小葡萄牙船を襲撃し難なく占領した。乘組員の大部分は殺戮され、若干は捕虜となり奴隷に賣られた。殘餘の艦船は逆風の爲救援に赴くを得ず空しくマラッカに逃れ去つたのである。(註16)

〔註16〕 Fruin Mees: Ibid. Deel. 2, p. 54.

故にファン・ネックが到着した時、彼は葡萄牙人に對抗する共同者として、バンタム人より厚き歡迎を受け、何等親交を妨げるものはなかつた。この事は又ファン・ネック及び副提督ファン・ヘームスケルクの愼重なる行動による所大なるものがある。教養ある彼等はマンクブミ及びシヤ・バンダル訪問の際も溫和な態度を持し、ハウトマン一行の敵對行動に依る惡印象を緩和する

必要を認めた。この誠意ある行動は勿論バンタム人を喜ばせた。(註17)斯るファン・ネック等の誠實なる態度と更に又高價な進貢品に依つて、交易は極めて順調に進行し途中で遲れた五隻が到着した時は、既に三隻に積載し得ぬ程の商貨を購入する事が出來た。其處で更にもう一隻にも滿載し、都合四隻は一先づファン・ネックの指揮下に故國に向ひ、十四ヶ月十八日振りで歸還した。その齎した商貨は四隻にて合計、胡椒六〇萬磅、丁子香二五萬磅、肉豆蔻二千磅、肉豆蔻の外皮二萬磅、蕃椒百磅等に上り、香料が斯の如く載來された事は和蘭に未だ嘗つてなく、世人を驚嘆させたのであつた。(註18)

ファン・ウアルウイク東印度に止る

【註17】 Fruin. Mees; Ibid. Deel. 2, p. 55.

【註18】 Veth; Ibid. Deel. 1, p. 330.

ファン・ネックの本隊と別れた他の四隻は、ウエイブラント・ファン・ウアルウエイクが指揮官となり、ヤコブ・ファン・ヘームスケルクが副指揮官となつて東印度に止る事となり、本隊の出發前三日の、一五九九年一月八日にバンタムから モルッケン群島に向つたのである。そして同月十三日にはジヤカトラに、二十一日にはツバンに入港して土王より盛大な歡迎を受けた。ヘームスケルクの船とゼーラント號は一月二十四日に、他の二隻は同じく二十六日に此處を出帆してマヅ

ヘームスケルク各地を巡航

ラに來たのであるが、アムステルダム號とユトレヒト號の乘組員四〇名が(1)アロスバヤに上陸して、二月一日マヅラ人と交戰して居る時暴風雨の爲舟が覆つて二十五名を失つて終つた。そして猶二千リックスダラーを支拂ひ捕虜になつたものを取り戻して十四日に其處を出發、三月三日にアンボイナ灣に到らんとしたが、猛烈なる暴風雨の爲達するを得ず、ヒツ(2)の海岸に投錨する事に決したのである。翌日、ヘームスケルクは部下を伴つて上陸したが、土民は彼等を非常に歡迎して、貨物を置く爲の家屋を提供した。土民は和蘭人に絹織物を求めたが、それはアムステルダムとユトレヒトの二船にしか積んでなかつたので、ヘームスケルクはこの二船のみを殘して、他のゼーラントとヘルデルラントの二船を率ひて三月十一日出帆し、バンダ(3)に向つた。同地に着いたのは同月十五日夕方であつて、土民の歡迎を受けた。ヘームスケルクは更にネイラ(4)に於いても、オランカヤス(5)に於いても、圓滑に貿易を行ふ事を得た。彼は猶、再度これ等の地を廻り澤山の商品を香料品と交換した。所が香料は最初は普通の値段で得る事が出來たが、後次第に昂騰して終ひには積荷全部に價する程にすらなつて終つたのである。ヘームスケルケは充分滿足が行く迄に取引を行ひ得たので、一五九九年七月二日オランカヤスに別れを告げた。この地に彼は二十人の者を殘して通商に從事せしめ、五日故國に向つたのである。そして八月八日にセント・

(1) Arosbaja
(2) Hitoe
(3) Banda
(4) Neira
(5) Orangkajas

ウァルウニイクのモルツケン經營

へレナ島に到着、翌一六〇〇年一月一日迄滯在し、四月十五日英國のドーバーに着き、其處からテキセルに歸着したのである。(註19)

〔註19〕 Valentyn; Ibid. Deel. I, a, p. 176.

一方アンボイナに止つて居たウァルウェイク指揮下のアムステルダム、ユトレヒト號の方はどうであつたらうか。彼等は一五九九年の四月の初めバンダに行つたのであるが、葡萄牙と土民の間に戰爭が起つた爲、香料若干を得た外、何等目覺しい貨物を得る事が出來なかつたので、五月八日テルナテに向ひ同二十二日到着した。テルナテの土民は彼に好意を示したのであるが、土王サヒドは和蘭人に對して疑惑を持ち、ウァルウェイクの求めた物産を携へて船に來ようとせず、和蘭人自身上陸して取引を行はん事を要求した。そこで六月二日、和蘭人は上陸して同十八日には香料を船に積み込んだ。七月九日にはその價格に關して商議が成立し、二十五日は國王も疑惑を解いてアムステルダム號を訪れたのである。そして、彼は和蘭人の歡待に感激し、ウァルウェイクに部下を若干留めん事を請うた。ウァルウェイクは此處に於いて五人の部下と子供一人を殘して取引に從事せしむる事としたのである。かくの如くテルナテに於いて成功を收めて、ウァルウェイクは八月十九日其處を出帆し、九月六日にウピ(一)島を通り、十一月十三日ジャカトラに來着したので

ファン・ネック遠征の意義

ある。そして其處から更にバンタムに到着したのは同月の十九日であつた。此處に於いてもユトレヒト號は更に種々の香料を積み込んだ。この再度の平和的通商を行つてから、一六〇〇年一月二十一日和蘭船隊はバンタムを出帆、一路母國に向ひ、五月十七日にセント・ヘレナ島を通過、更に二、三ケ月後テキセルに歸還したのである。(註20)

〔註20〕 Valentyn; Ibid. Deel. I, a, p. 176.

かくして前後二年餘を費して、ファン・ネックによる和蘭の第二回東印度遠征は終つたのであるが、それはハウトマンの遠征に比して商業的見地からすれば遙かに成功を收めたものであつた。ハウトマンの時は至る所に於いて土民と衝突して通商を營む迄には行かなかつたのであるが、ファン・ネックはバンタムを初めモルッケン群島の各地に於いて平和裡に通商を行つて利益を得、更に、二三の地に商館を設置する事をも成し遂げたのである。和蘭はこの遠征の成果として、東印度に於ける最初の商業的基地を獲得した。ファン・ネックの遠征は最初より商業的目的を以つて爲され、そしてその目的に沿うて成功を收めたのである。その點でハウトマンの遠征とは異る意義をもつものである。

ジーランドに設立された會社はデ・ムーヘロン(一)の一族によつて出資されたフェールスヘ會社

(1)De Veersche compagnie (5)Guyon Lefort
(2)Leeuw
(3)Leeuwin
(4)Sultan Ala-ud-din

(1)であつて、第一回遠征隊のコルネリス・ハウトマン兄弟の指揮の下にレーウ(2)號(四百噸)及びレーウイン(3)號(二百五十噸)の二隻の船を派遣した。この船隊は印度のコチンに到着しそれからスマトラ島に渡つて一五九九年七月アチェに入港した。當時此處には三個の大きな市場があり貿易場として繁榮して居り、和蘭人は支那、アラビヤ、印度各地からの商人が彙集し、更に葡萄牙人すらも混つて交易に從事して居るのを見た。(註1)アチェの國勢は猶盛んでスマトラ沿岸の諸國に統制力を及ぼして居たが、國王スルタン・アラウヂン(4)は前王程の覇氣はなく近隣の諸勢力と親善政策をとり、ジョホールにはアルを割讓し、一五八七年には葡萄牙との間の長年の敵對關係を清算して協定を結んで彼等の通商を許した。更に一五九八年には印度のゴアに使節を馳せて葡萄牙副王とジョホールに對する攻守同盟を結ぶ等、葡萄牙と緊密な關係を保つべく一意努力して來た。ハウトマン船隊の訪れたのはかゝる際であつた。(註2)アチェ王は最初和蘭人に對して非常な好意を示し、通商契約を取り極めたり家屋を提供したので、ハウトマンも又ジョホール征討に援助を約する等平和的態度を以て交易を行つたのであるが、ゴアから歸還せる使節と同行して來た葡萄牙人に煽動されるに及び王の心は一變し、上陸中の和蘭人を襲撃してハウトマン以下九十五人を殺戮或ひは捕虜としたのである。生存者はフォン・レフォルト(5)の指揮の下に一六〇〇年八月印

(1)Jacob Mahu (5)Cordes
(2)Oliver van Noord (6)Ridders
(3 Jacob Mahu
(4)Gueree

度を經由して本國に歸還したのであつた。(註3)

〔註21〕 H. Terpstra ; De Nederlandsche Voorcompagniën, G. v. N. I. Deel. 2. p. 381-385.
〔註22〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 30. p. 152.
〔註23〕 H. Terpstra; Ibid. G. v. N. I. Deel. 2. p. 385-391.

アムステルダムやジーランドの商業資本家による活潑な東印度貿易の經營は、當時新興商業都市として擡頭しつゝあつたロッテルダムをも刺戟し、南ネーデルランド主としてアントワープより移住して來た商人等の主唱の下に東印度遠征計畫が樹てられ、ヤコブ・マフ(1)及びオリフェル・ファン・ノールド(2)の二船隊が派遣された。ヤコブ・マフの船隊は五隻より成り、一五九八年六月十七日にフリー(3)の河口を出帆、マゼラン海峽を經由して東印度に志したのである。そして一五九九年四月六日マゼラン海峽の入口に達し、若干の入江を巡航したのであつたが、寒氣に對する準備不足の爲、トルウ號の船長を始め多數の隊員を失つた。彼等は更にコルデス(5)灣に於いて十哩乃至十一哩も身の丈のある裸の蠻人を見、八月二十三日其處からリッデルス(6)灣に向ひ、同二十八日其處を出帆、更に航海を續け途中若干の小舟に乘つた八十人許りの土人を目撃した。彼等は九月三日にいよ〳〵太平洋に入つたのである。そして同月七、八日迄は全船隊共に揃つて

(1)Oliver van Noord
(2)Val-parayso
(3)Eendragt

居たのであるが、それより暴風雨に遇つて皆離散の止むなきに至つた。トルウ號とヘローフ號はマゼラン海峽に吹き戻され、此處でオリフエル・ファン・ノールト(1)の船隊と出會ひ、ヘローフ號のみは一六〇〇年七月十三日フリーに歸着した。そして一方のトルウ號はモルッケン群島のチドールに達したが、葡萄牙人の爲に船は奪はれ、船長は捕虜としてマラッカに送られたのである。ブレイデ・ブードスハフは智利の太平洋沿岸のヴアルパライソ(2)に到着したがこれも西班牙人の手中に歸して終つた。リーフデ號とホープ號は二隻で一隊をなし日本へ漂着して本國に歸るを得たのである。(註24)

[註24] Valentyn; Ibid. Deel. I, a, p. 176-177.

かくの如くして、和蘭人の、マゼラン海峽を經由して、東印度に志す、最初の世界周航計畫は失敗に歸したが、それはこの直後、オリフエル・ファン・ノールトによつて成し遂げられたのである。

ファン・ノールドの船隊は一五九八年十一月十三日マウリシユス號、エーンドラフト號(3)の二隻を以つてフリーを出帆し、途中ゼーランドの突端に於いて、他のアムステルダムの二船と相合して大西洋を横斷しブラジル海岸に到着した。そして其處に於いて葡萄牙人と小衝突を演じ若干の

(1)Pieter de Lint (5)Capul
(2)Mocha
(3)St. Maria
(4)Ladron

ファン・ノールト東印度に達す

部下を失つた。途中ホープ號は漏水するを以つて燒却し、十四ケ月の航海の後漸くマゼラン海峽に入り、一五九九年十一月二十五日最初の海峽に到着した。其處は幅が七哩、長さ一一〇哩あつた。更にその日の中に第二の海峽を過ぎた。此處で四人の少年と二人の少女を捕へた。これ等は後に和蘭語を習得して彼等の土地を指導する事となつたのである。さてオリフエル・ファン・ノールトは、途中副提督を命令不服從の廉により陸地に追放し、ピーテル・デ・リント(1)を後任に据えて、マゼラン海峽を出て太平洋に入つたのであつた。そしてそれからチリー海岸を航行してモチヤ(2)島に寄港し、土民の歡迎を受けたる後セント・マリア(3)島に達した。此處で西班牙船二隻を鹵獲してラドロン(4)島に向つた。一六〇〇年九月十五日同島に達し、西班牙國旗を揭げて西班牙船隊の風を裝ひ、充分休養を取つてマニラに向つたのであるが、途中カプル(5)島に寄つた所、土人が山に逃れたので部落を燒き拂ひ、支那船とフリゲート船を各一隻捕獲した。そして十一月二十四日マニラに到着し、五日間碇泊して居たがやがてその後十二月十四日に西班牙軍の襲撃を受けた。この戰で西班牙軍の旗艦は沈沒したが和蘭側もエーンドラハト號を失つたのである。この戰鬪の後、ファン・ノールトは殘餘の船を率ひてボルネオのブルネイに向ひ十二月二十六日其の地に到着、土王の盛大な歡迎を受けた。しかし、土王にマウリシユス號を捕獲せんとする陰謀の

ある事を、支那人の警告によつて知つたので、彼はそれを警戒して直に爪哇に赴く事に決し、一六〇一年一月二十八日此處からジョアルタン(1)に至つて投錨したが、其處には何等交換すべき貨物がなかつたので、二月五日更にバランブアン(2)海峡に赴いたのであつた。かくの如くして爪哇島南岸を巡航したる後、ファン・ノールトは喜望峯を廻航して本國に向ひ、五月二十六日セント・ヘレナ島に到着し、三十日同島出帆、六月十六日ヤコブ・ファン・ヘームスケルクの率ゆる六隻の和蘭船に出會つたる後、一六〇一年八月二十六日ロッテルダムに歸着したのである。(註25)

(1)Joartan
(2)Balamboeang

ノールトの遠征の意義

〔註25〕 Valentyn; Ibid. Deel. I, a, p. 177-178.

かくして此處にオリファエル・ファン・ノールトにより和蘭人として最初の世界一週の壯擧は成功を收め、周航々船が和蘭人に明にされたのであつた。この點に於いて彼の遠征は充分その使命を達成したものと云はなければならない。けだし、彼の場合に於いてもハウトマンの時と同じく、新航路の開拓にその本來の使命があつたのであつて、東印度での商業的經營はむしろ第二義的のものであつたらうと云ふ事が、この船隊の東印度に於ける行動から推して考へられるのである。恐らく當時の和蘭商人の胸中には、希望峯廻航の航路より、更に安全にして短距離の東印度航路、葡萄牙や西班牙船隊より迫害を受けざる新航路開拓の計畫が去來して居たに違ひない。ファン・ノールトの遠征は、單なる一個のアドベンチュアーとしてではなく、かゝる計畫遂行の重大な使命を帶びてなされたものであらう。しかし乍ら、かくして開拓された新航路も、喜望峯廻航々路よりも長く、より危險であり、且つ依然として西班牙船隊の制海權圈内にある事が判明した爲、その後餘り用ひられなかつた。これ以後に派遣された和蘭の東印度船隊は概ね喜望峯航路に依り、周航々路は見捨てられた觀があつた。

和蘭の西班牙に對する積極的攻勢開始

一五九八年中に活動した多數の和蘭船隊は、東印度に於て豫想して居た葡萄牙の壓迫に惱まされる事が意外にも少なかつたが、その主要原因の一として英國海軍がリスボンを封鎖し、その結果葡萄牙船舶の印度への出航が不可能な狀態に在つた事が數へられる。されば一五九八年から一五九九年にかけて葡萄牙の印度副王は、和蘭船隊の頻繁な來航を知りつゝも有力な船隊を南洋水域に送つて之に壓迫を加へる餘力を有しなかつたのである。辛うじて一六〇〇年九月にガレオン船二隻とガリー船三隻をモルッケン群島に派遣したが彼等は和蘭人と土着勢力との間に協力關係が成立する事を恐れ、只管その對策と既得權益の防衞に腐心して居たのであつた。かゝる間に和蘭政府は自國船の西班牙、葡萄牙兩國への渡航を禁止するに至つた。一五九八年の末になつてもあらゆる海面に於て西班牙の和蘭船舶に對する掠奪行爲は繼續されて居たが、この結果兩國の通

ファン・デル・ハーヘンの遠征

商關係は完全に斷絶し、一五九九年四月九日を以て和蘭國會は强力な艦隊による西班牙船舶及び商品の拿捕宣言を發した。此處に於て和蘭は西班牙・葡萄牙の海上勢力に對し正式に、全世界の海面に於て全面的抗爭を展開する事となつたのである。

(1)Oude Compagnie
(2)Steven Van der Hagen
(3 Mayo
(4)Prince
(5)Antongil

設立された舊會社(1)により、ステフエン・ファン・デル・ハーヘン(2)の船隊が東印度に派遣されたのである。

ファン・デル・ハーヘンの船隊は一五九九年の四月六日に出發し、途中マヨー(3)島、プリンス(4)島を經由し、喜望峯に到着したのであるが、その後暴風雨の爲、マダガスカル島の名もない港に避難するの止むなきに至り、更に其處からアントンギル(5)港に辿りついたのであつた。此處に於いても彼等は何等の好ましい物産や休養を得る事なく、更に航海を續けて遂に一六〇〇年二月にラムボンに到着、三月十三日にバンタムに達したのではあるが、その結果、有利な取引を行はんとする希望は持ち得なかつた。それは需要の增大に伴うて胡椒の價格が非常に騰貴し、且つ港務長が過重な入港稅を要求したるが爲である。それでファン・デル・ハーヘンはウァルウェイクの書簡による忠告に基きバンタムに於ける通商を斷念して、三月二十八日アンボイナに渡航する方が有利であると考へて出帆し、五月二日その地に到着した。そ

ピーテル・ボートの遠征

(1)Hila
(2)Kaytetto
(3)Kasteel van Verre
(4)Jan Dircksz Sonnebergh

して他の二隻はバンダに赴いた(註25)。ファン・デル・ハーヘンはアンボイナに於ても又積荷を充分に得る見込がつかなかつた。それは前の收穫季の香料はすべて賣却し盡された後であり、新しい收穫季にまでは未だ半年も間があつたからである。其處でヒツ島の土民はこの中間期を有意義ならしめるため、アンボイナより葡萄牙人を驅逐する事を計るのが得策であると進言した。彼はこの言を容れバンダ島に在泊中の僚船を呼び寄せた後、土民軍と協力して葡萄牙城砦の封鎖を行つたが兵力不足のため成功しなかつた。されどこの事件を機としてヒツ島の土民は和蘭人に對する好意を深め、通商契約を締結して貿易上の特權を與へ、ヒラ(1)村近傍のカイテツト(2)丘上に砦を建設する事を許した。ファン・デル・ハーヘンは直ちに工事に着手し、フエレ城(3)と命名しヤン・ディルクス・ソンネベルフ(4)の下に二十七人の兵を駐屯して守らしめたのである。そして彼自身は十月六日にアンボイナを解纜してバンタムに向ひ、十一月十九日同地に到着し他の和蘭船と會合して七隻の船隊を組織し、一六〇一年一月十四日歸國の途に就いたのである。(註26)(註27)

〔註26〕 Valentyn; Ibid. Deel. I, a, p. 178-179.

〔註27〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel. 30, p. 165.

ファン・ネックの第一回遠征船隊が豐富な物産を積載し、驚異的成功を收めて歸還するやそれ

(1)Nieuw Brabant Compagnie
(2)Pieter Both
(3 Hop van Holland
(4)Paulus van Caarden
(5)Priaman
(6)Tiecu
(7)Passaman

はアントワープよりの逃避資本を刺戟し新ブラバント會社[1]の結成を見た。この會社は表面は特に支那貿易を目的として設立されたのであるが、實際には南洋貿易を行ふ意圖であつた事は云ふまでもなく、支那貿易を標榜したのは既成會社の反對を避け、政府の許可を得る事を容易にせんがためであつた。而してその船隊はピーテル・ボート[2]指揮下の四隻の船舶を以て組織されて居た。(註28) この船隊は十二月二十一日、舊ブラバント商會の四隻の船と一隊を爲して出發したのであつたが、舊商會の船隊は直ぐ最初から別れて行つた。そしてその後上揭の四隻は一六〇〇年四月二十六日迄一つに纏つて居たのであるが、それからホプ・ファン・ホラント[3]號とナッサウ號が別れ、他の二隻は八月六日バンタムに到着したのである。此處で取引をすました後ボートはステフェン・ファン・デル・ハーヘンの船隊と共に本國に歸り、バンタムからパウルス・ファン・カールデン[4]が指揮者となつて二隻の船を率ひ、胡椒を求めてプリアマン[5]チコウ、[6]パッサン[7]等の地を巡航して十一月二十一日アチエに入港した。所が此處に於いては、彼等は公正な通商を營む事が出來なかつた。そして、一五九八年、ムウシエロンに派遣されて來て、この地で捕虜になつたレーウ號、レーウィン號の乘組員から、アチエ人が彼等を捕へた事情を知つた。そして、彼等はアチエ王の命令に盲從せしめられ、種々の妨害を蒙つたので、再びバンタムに赴く事に決して、

(1)Delft
(2)Simon Jansz Hoen
(3 Jacob Jacobsz
(4)Annobon
(5)Gouda

ファン・ネックの第二回遠征

一六〇一年三月十九日其處に到着した。幸にもバンタムでは通商が圓滑に運び胡椒を千五百袋手に入れる事が出來た。バンタムに到着してから程なく、三月三十日、ヤコプ・ファン・ネックが三隻の船を率ひて入港して來た。ファン・ネックは此處にデルフト[1]號を、その船長シモン・ヤンス・フーン[2]、書記ヤコブ・ヤコブス[3]と共に殘し、荷役の終へたる後カールデンと共に歸國せしめ、自分は殘餘の船を率ひてモルッケン群島に向つたのであつた。後に殘つたカールデン等一行の船隊は一六〇一年四月十日出帆、十月乃至十一月頃和蘭に歸着したのである。(註29)

〔註28〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 80. p. 167.

〔註29〕 Valentyn; Ibid. Deel. 1, a, p. 179.

ピーテル・ボートの遠征に續いて、整一六〇〇年には ヤコプ・ファン・ネックの第二回遠征が計畫された。この船隊はアムステルダム號以下六隻の船にブラバント商會所有の二隻が隨伴し、合計八隻から編成されて、六月二十八日を以つて出帆したのである。そして十月一日にアンノボン[4]（アフリカ西岸）に到着、其處の葡萄牙人より友誼的待遇を受け、二十日に其處を出發したのであるが、一番速力の早いアムステルダム號、デルフト號、ハウダ[5]號を以てバンタムに向ふ事が得策であるとし、この三隻を率ひて一足先に航海を續けた。一方ブラバント商會の二隻はアチエ

に赴いたのである。かくして水の缺乏と暴風雨に惱みつゝ一六〇一年三月末日にバンタムに到着したのであるが、其處には既にそれより早く新商會の船が來て居た。ファン・ネックはアムステルダム號とハウダ號の二隻を以つて四月二日其處に到着した。テルナテ王は早速、ウァルウェイクの殘して行つた和蘭人四人を伴つてアムステルダム號を訪れ、大に歡迎の意を表したのである。更に七月三日の日曜に再び訪れた彼は、朝の禮拜に於ける乘組員の敬虔な態度に接して、葡萄牙人の中傷により歪められた、彼の和蘭人に對する認識を改めたのであつた。ファン・ネックの一行がテルナテに滯在中、チドールの葡萄牙人が彼等を驅逐せんが爲に四隻の船（中一隻は捕獲されたマフウ船隊の信頼號）を以つて來襲するといふ報道を耳にした。(註30)こゝに於いてファン・ネックはいち早く土王サヒットに、葡萄牙人討伐の許可を求めた。サヒットは周圍の者と熟慮の結果、葡萄牙人の暴狀を訴へて彼に許可を與へたのである。そこで二隻の和蘭船は七月八日出帆し、十一日の朝敵地に到着した。葡萄牙側は陸地の三ヶ所の砲臺と、港口の三隻の船から和蘭船隊に砲撃を加へたのであるが、ファン・ネックはこれにひるまず、劣勢よく勇戰を續け葡萄牙の旗艦に火災を起さしめるに至つた。かくして葡萄牙に打擊を與へたる後、彼はサヒットの勸告に從つて再びテルナテに歸還したのであるが、この戰

ネック、テルナテに向ふ

ネック、葡萄牙船隊と戰ふ

に於いてファン・ネックは腕に負傷し、船長クラース・コルネリス(1)外三名（一說には八、九名）を失つたのである。テルナテ歸還後、ファン・ネックは土王サヒットと種々の交歡を遂げて友好關係を確立し、七月三十一日バタニ(2)に向つたのであるが、(註31)航路を比律賓から支那沿岸にとり、八月二十七日マカオ(3)に到着、十月三日其處を出帆して十一月七日バタニに着いた。同地に於いて彼等は土王の歡迎を受け胡椒を積載する事を得た。其處で此處に若干の部下を止め、一六〇二年八月二十三日彼は本國に向ひ、一六〇三年七月十五日ゼーラントに歸着したのである。(註32)

(1) Claas Cornelisz
(2) Patani
(3) Macao
(4) Dordrecht
(5) Cambodia
(6) Haarlem

ネックの歸着

〔註30〕 Valentyn; Ibid. Deel. 1, p. 210-211.
〔註31〕 Valentyn; Ibid. Deel. 1, p. 212.
〔註32〕 Valentyn; Ibid. Deel. 1, a, p. 179.

ファン・ネックの本隊が、かくの如く東印度から南支那海を巡航して居る間に、一方他のドルトレヒト(3)號、以下三隻の後着船隊は一六〇一年八月九日バンタムに到着、此處に十一日間滯在してから支那へ向けて出帆し、九月十日カンボヂヤ(5)に達した。此處では何等の貿易を行ふ事なく、又一六〇二年一月に乘組員二十三名が土人に捕へられたので、大砲二門をもつて贖ひ戻した。そして若干の小競合の後部落を一つ燒き拂つて十二月二十一日出帆、同月二十八日バタニに

(1)Leyden
(2)Erasmus
(3)Wolfert Harmansz

ヘームスケルクの遠征

到着し、一六〇三年七月十日には此處で更に二隻の和蘭船を得た。九月二十四日、彼等はハールレム(1)號を燒却しレイデン(2)號とドルトレヒト號に胡椒を滿載、同地を出帆し、十一月十五日バンタムに到着した。十二月十七日にはエラスムス(3)號が、捕獲した大形圓形船一隻を伴ひ支那沿岸より入港して來た。こゝに於いてナッサウ號、エラスムス號、星號及びレイデン號の四隻は一六〇四年一月二十七日バンタムを出帆して一路故國に向ひ、八月三十日に歸着したのである。(註33)

〔註33〕 Valentyn; Ibid. Deel. 1, a, p. 180.

かゝる間に和蘭國内では各地に簇生せる東印度貿易會社の對立競爭による弊害を防ぎ、之を强力な一の組織に統合・整理する必要が漸次唱へられて來り、國會もこの問題について眞劍に考慮し檢討し出すようになつたのであるが、かゝる機運の到來を察知したアムステルダムの舊會社と新ブラバンド會社は、一六〇〇年の末合併を行ひこの新なる會社の下に、一六〇一年四月ヤコブ・ファン・ヘームスケルクとウォルフェルト・ハルマンス(3)の二船隊を派遣した。前者は八隻より成りアチェ船隊と呼ばれてスマトラ島貿易を擔當し、後者は專らバンダ島とモルッケン群島を目指したのであつた。この二船隊は共に和蘭を出發したのであるが、途中で分離した。ヘームスケルク船隊はスマトラに直行する豫定であつたが、風順が惡しく一六〇二年二月バンタムに入港するの

(1)Jan Grenier
(2)Pangeran Poeger
(3)Gresik

ヘームスケルクの東部爪哇經營

止むなきに至つた。而して途中で一隻は西班牙船と戰つて沈み一隻は本隊より離れ去つたので、バンタムに着いた時は六隻に減じて居た。バンタムでは香料は豐富に集積されて居たが胡椒の價格は極めて騰貴して居た。其處でヘームスケルクは二隻の船を此處に止め、自身は四隻の船を率ゐて東部爪哇方面に向つたのである。一方本隊を見失つたヤン・フレニエル(1)の船は單獨でアチェに向ひ、一六〇一年十二月同地に到着して胡椒の取引を行つたのであるが、翌年一月町に火災が起り、和蘭人の倉庫も類燒の厄に遭つて四千盾に達する商品を失つた。二月中旬フレニエルはアチェを出帆してチコで胡椒貿易を行つた後四月バンタムに到着、ヘームスケルクの殘留せしめた二隻の船と共に五月本國に向つたのである。(註34) 一方ヘームスケルクの本隊はバンタムよりデマに向つた。デマの土王バンゲラン・プゲル(2)は最初和蘭人を歡待したのであるが、乘組員の上陸する者あるを見るや不意に襲つて捕虜とし所持する荷物を强奪した。同時に船にも襲撃が試みられたがこの方は失敗に終つた。これは彼等が葡萄牙人の利益を認め、和蘭人に對して反感を示するに成功はしたが、殘餘の者全部を救ふ事は出來なかつた。其處で彼はグレシク(3)に赴きその地の回教王に援助と仲介を要請した。恰もこの時バンゲラン・プゲルは弟のマタラム（當時デマ

の宗主國）王と交戰中であつて、和蘭人の捕虜をして都市防禦に援助せしめて居た。デマ軍中には他に火砲操縱の術に練達せる者がなかつたので、彼等は必要缺くべからざる人物であつた。その爲にグレシク王の仲介があつたけれども彼等の釋放には耳も藉さず、漸く戰が終つたのち彼等は船に歸るを得たのである。一方グレシク王の許を得てヘームスケルクはこの後東部爪哇に於ける最初の和蘭商館をジャラタン(1)に設けた。そして多額の資本金を置いて、東貿易風が訪れると共に、爪哇商人がモルッケン群島より船載して來る香料の購入に備へしめたのである。しかし東部爪哇に於ける葡萄牙の影響は未だ根強く、この商館が和蘭にもたらした利益は極めて僅少のものであつたらしい。(註33) 一六〇二年七月ヘームスケルクはジャラタンを出帆し馬來半島に向ひ、パタニに入港しジョホール王と通商協定を締結せんとした。たま〳〵支那貿易に從事して居た葡萄牙船隊と遭遇するや、之を攻撃して多額の鹵獲品を得たが、馬來沿岸土民の目前に於けるこの勝利は彼等に深い感銘を與へ、爾後ジョホールの對蘭態度を一變せしめ馬來政策の遂行に大いなる貢献を爲した。かくして各地に於て多大の貿易上の成果を擧げて、一六〇三年八月ヘームスケルクは東印度を去り、馬來よりバンタムを經て歸國の途についたが、彼が母國に載來した商品は幕澄果、丁子果、肉豆蔻等の香料三萬袋を始めとしその他のものを合して總計三百四十萬盾の巨

(1)Djaratan

額に達したのである。(註34)

〔註34〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 30. p. 195-204.

〔註35〕 Veth; Ibid. Deel. 1. p. 333-334.

〔註36〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel 30. p. 190-192.

ヘルマンスの遠征

ヘームスケルクの船隊と一緒に出帆したウォルフェルト・ヘルマンス(1)麾下の五隻の船隊は四月八日ヘームスケルク船隊と別れ、十二月二十六日スンダ海峽に到着した。此處で三十隻の帆船と八隻のガレオン船より成るドン・アンドレア・フルタドオ・ド・メンドサ(2)指揮下の葡萄牙船隊が、バンタムに碇泊して居る事を知り、バリンバン(3)に至つて船隊會議を召集して對策を協議する事に決した。この時の葡萄牙船隊はその在印度船隊の主力であつた。葡萄牙は和蘭人の來航が頻繁になるや、その印度に於ける全勢力を集結し、メンドサの指揮下に委ね、先づマラバール海賊を討伐したる後、和蘭人を驅逐せんが爲一六〇一年十二月二十四日バンタムに現れたものである。

ヘルマンス葡萄牙船隊を破る

さてヴォルフエルト・ヘルマンスは對策成つたるを以つて、全船隊臨戰體勢を整へ、十二月二十七日拂曉、プロ・ペンサノ(4)の西端に居た葡萄牙のガレオン船二隻を驅逐した。同じく二十九日には哨戒任務にあつた矢張り二隻のガレオン船を鹵獲した。葡萄牙は火船二隻を派遣したが効果がな

(1)Wolfert Hermansz
(2 Don Andrea Furtado de Mendosa
(3)Palimbang
(4)Poelo Pensano

ヘルマンス、テルナテとバンダに向ふ

かつた。三十一日風向を利して、和蘭船隊は葡萄牙船隊の眼を掠め、それに接近して碇泊した。

一六〇二年一月一日和蘭船隊は、葡萄牙船隊の前に姿を現し、彼等を驚愕、戰意を喪失せしめた。かくして同月三日、和蘭船隊は葡萄牙船隊を驅逐して何等の妨害を受くる事なくバンタムに入港する事を得たのである。ヘルマンス一行の船隊はバンタムに暫く滯在し、破損を修理したり休養をとつたりした上、一月十二日ジヤカトラへと向つた。そして夜にその附近の河岸に着き、朝になつてから入港し、土王に進物を呈したのである。彼等は更に十七日にジヤカトラ出帆、二十日にツバンに着いたが、何等取引を行ふ事を得ずして出帆、二月十七日テルナテに投錨した。此處で、米、葡萄酒、油、磁器及び絹織物等を積載して居た葡萄牙船を鹵獲して三月七日に出帆、十四日バンダに行き、物産を積んで六月二十四日其處を離れ、アンボイナ、セレベス沿岸を巡航して、七月六日再びツバンに來たのであつた。八日にはヘームスケルクの指揮する船隊に出會つた。そして此處を十三日に出帆して十八日にジヤカトラに到り、更に八月一日にバンタムに歸還したのである。ヘルマンスは此處に、ユトレヒト號とワハテル(2)號の兩船の歸着する迄乘組員若干を殘し、自身はヘルデルラント(2)號、ゼーラント號の二隻を率ゐて八月二十五日出帆、本國歸還の途に就いたのであつた。(註37)

(1) Wagter
(2) Gelderland

ヘルマンス遠征の意義

〔註37〕 Valentyn; Ibid. Deel. a. 1 p. 181-182.

このヘルマンスの遠征は、バンタムに於ける葡萄牙船隊の制壓といふ、和蘭が東印度にその勢力を確立して行く上に一つの輝しい記念すべき功績をもたらした。當時、東印度に於ける葡萄牙勢力は既に下向狀態に在つたとは云へ、未だ印度と東印度を結ぶマラッカの要衝を抑へて輕視し得ざるものがあり、その船隊は土民等の畏怖の的となつて居たのである。和蘭が東印度にその地位を確立して行く爲には、この古い葡萄牙勢力を打破して行かなければならなかつた。その意味に於いてヘルマンスの遠征は一つの重大な成功を收めたものと云はなければならない。

この時の葡萄牙船隊はその印度に於ける主力であつて、ゴア、セイロン、マラッカ等から集めたガレオン船八隻、樽型船二十隻から成つて居る大船隊であつた。これを和蘭人が僅か四、五隻の劣勢で抑壓して終つたのであるから、東印度に於ける土民の葡萄牙人に對する輕侮の念が增大し、反對に和蘭人の勇敢な行動を賞讃し尊敬する聲の高まつた事は非常なものであつた。當時東印度の土民は葡萄牙勢力を排除して、香料貿易の利を再び自己の手に收めんと切望して居た。しかもこの事は彼等の力のみでは困難な事であつた。彼等に代つて、又は彼等と協力して葡萄牙人を驅逐してくれる者の出現を待望して居たのである。其處へ和蘭人が現れ、劣勢を以つて優勢な葡萄

スピルベルヘンの第一回遠征

(1)Simon Jaspertsz Perduin
(2)Pieter van Hoeke
(3)Joris van Spilbergen
(4)Ram
(5)Lam
(6)Lancaster
(7)Middelton
(8)Schaap

牙船隊を壓したのだから、土民の彼等に對する信頼が高まつたのは當然で、これは又和蘭人にとつて、東印度に自己の勢力を扶植する上に非常に好都合であつた事は云ふ迄もない所である。

ヘームスケルクやヘルマンスの遠征船隊が出發してから程なく、一六〇一年五月五日に和蘭商人シモン・ヤスペルツ・ペルダイン(1)とピーテル・ファン・フウケ(2)は、ヨリス・ファン・スピルベルヘン(3)を指揮者としてラム(4)號、以下三隻の船を東印度に派遣した。

スピルベルヘンは喜望峯を廻り、セイロン島を經て一六〇二年九月十六日スマトラのアチエについた。こゝには僚船ラム(5)號が既に到着して英人ランカスター(6)及びミッデルトン(7)の支配下に碇泊して居た。彼等はアチエ王の歡迎を受けたる後、ラム號を殘し、ラム號とスハープ(8)號を率ひて英國船隊と共に九月二十一日マラッカ海峽に向けて出帆し、葡萄牙船を待伏せた。そして十月十三日貨物を滿載した圓形船一隻を襲つた。八日間かゝつてその荷揚をし、船を葡萄牙人に返して十一月五日再びアチエに戻つて來たのである。一六〇三年一月十七日和蘭船二隻がセイロンから到着した。二月二十一日ラム號の船長が死んだが、この死に關する陰謀に坐して副提督フヨン・レ・フォルトが放逐された。三月八日三隻の和蘭船が又來着した。この後スピルベルヘンは、便宜上ラム號をこの時既に創立されてゐた和蘭東印度會社に賣り、若干の人數を殘してスハープ號と共に四月三日アチエを出帆してバンタムに向つた。そして其處へ二十七日に到着し、東印度會社の新提督ウェイプラント・ファン・ウェルウェイクが九隻の船を率ひて來れるに會した。丁度折よくヘームスケルクが二隻の船と、ジョホール近海で鹵獲したマカオの圓形船等に七百萬盾の黄金を積んで入港し、東印度に於ける和蘭船隊が一堂に會した觀があつた。さてこの後スピルベルヘンの船隊は八月二十八日バンタムを拔錨した。そしてバンタムに於ける關稅を避ける爲に途中で、胡椒五千五百袋、寶石類若干、琥珀、肉桂、絹、磁器、肉豆蔻、印度藍、二百袋の堅果類を積み込み、ラム號、ラム號の外に二隻、合計四隻で九月三十日本國歸航の途に就いたのである。(註35)

〔註38〕 Valentyn, Ibid. Deel. 1. a. p. 183-185.

かくの如く、一五九七年八月コルネリス・ハウトマンの指揮する第一回東印度遠征隊の歸還により、東印度への航路及び東印度の諸事情が明にされるや、和蘭に於ける東印度遠征熱は勃然として怒濤の如き勢を以つて興り來つたのであつた。ユトレヒト、アムステルダム、ライデン、デルフト、ロッテルダム等の和蘭の各地には、東印度貿易を目的とする大小幾多の個人會社が簇生し夫々船隊を組織して、東印度に派遣したのである。(註39) 一五九八年東印度に向つて和蘭諸港を出帆せる船舶は二十二隻を算し、一五九九年、九隻は空前の豐富な東洋貨物を滿載して歸り、國民

和蘭の東印度貿易はバンタムを中心として行はる

は歡呼之を迎へた。一六〇一年には東印度貿易に從事するもの實に十五船隊、總數六十五隻に達したといふ。(註39) そして、これ等多くの遠征船隊は最初爪哇に達するのが普通であつたが、それも初期の中は特定の場所に限られて居た。卽ち爪哇の西部海岸で、彼等は東印度に於ける最初の貿易を、概ね營んだのであつた。かくしてバンタムは和蘭船隊の東印度に於ける根據地となり貨物の集散地として榮えるに至つた。就中、香料は一六〇〇年迄東部爪哇の商業地に於いて取引されて居たのであるが、和蘭人の來航に依り西部に於ける需要が增大するや、次第に東部各地よりバンタムに集中されて來たのである。一六〇二年にはバンタムに、商館、小屋等四個の和蘭の貿易用の建物が存在して居た。バンタムの住民は商品の取引により大なる利益を收めた。そして物産に對する需要の增大は彼等の富を大ならしめたのである。(註41)

〔註39〕 Fruin Mees; Geschiedenis van Java. Deel. 2, p. 60.

〔註40〕 大川周明氏、特許植民會社制度研究、一二三頁—一二四頁

〔註41〕 Fruin Mees; Ibid. Vol. 2, p. 61.

葡萄牙のアンボイナ征討

和蘭が東印度經營を開始しその遠征船隊が相次いで南洋水域に出現するや、葡萄牙は勿論この新興勢力の進出を阻止し自家の既得權益の防衛に焦慮したのであるが、その具體的な現れとして

上述の在印度兵力の全力を以て組織したメンドーサ船隊のバンタム派遣となつたのである。而してこのメンドーサ船隊はハルマンス船隊に驅逐せられた後バンタムを去つてアンボイナに向ひ、同地の親葡土民と協力し和蘭人に對し種々貿易上の便宜を供與し且つその葡萄牙城砦攻撃を煽動したヒツ島の住民を攻めてその大多數を屈服せしめたのであつた。同島の和蘭城砦は既に守兵が撤收された後であつたので葡萄牙軍は難なくこれを占領し、更にセラム島のフワモヘルのテルナテの植民地にも兵を出し、豐富な香料の生産地を確保した。メンドーサがアンボイナ近傍の親蘭土民に加へた迫害は苛酷を極めたものであつたらしく、土民軍の指導者は再三和蘭人に來援を請求したのであるが、この時には彼等を助け葡萄牙人と徹底的な抗爭を行ひ得る程にはまだ和蘭勢力の基礎は成長して居なかつたのである。メンドーサはアンボイナから更にテドール島に向ひ、一六〇三年一月ジュアン・クアレス・ガルリナト(1)の指揮する西班牙軍の援助を受け、テルナテ島の攻略を志してタランガミ(2)港を封鎖した。テルナテ王は爪哇人、ミンダナオ人、和蘭人等の諸外國人と聯合軍を組織して頑强な抵抗を行つた爲葡萄牙の攻撃は容易に進捗しなかつたが、その結果同盟者たるテドール王やアンボイナ土民の向背も頗る怪しくなつて來た上、和蘭船隊がバンダ島に現れ北上しつゝありといふ情報が傳へられたので、遂にメンドーサは攻撃を斷念してアンボ

(1) Juan Xuarez Gallinato
(2) Talangami

イナに歸還したが、彼が去るやチドールはテルナテと和を結び、土着勢力の結束を固めたのである。(註42)

〔註42〕 A. P. Tiele; Ibid. B. t. d. T. L. e. V. Deel. 30, p. 200—202

和蘭、東爪哇經營を斷念す

一六〇二年に和蘭人は東部爪哇に商館の建設を志した事は前に述べたが、當時この地方の住民は未だ葡萄牙人との交易に於いて利益を收めて居た爲、彼等に優先權を與へて和蘭人はその下位に立たなければならなかつたので、何等利益を得る事が出來なかつた。それに當時十七世紀初頭、東部爪哇地方は打ち續く戰亂の爲荒廢して、到底貿易を營むには適しなかつたので、和蘭人は東部爪哇に於ける貿易を斷念し、專ら西部爪哇に根據地を置き、其處からモルッカス群島に往復して居たのである。そして西部爪哇に於いては、上述のバンタムの他にジヤバラがこのモルッケン航路の薪水供給地として利用されて居たのである。(註43)

〔註43〕 Fruin Mees; Ibid. Deel. 2, p. 61.

和蘭根據地の理由

かくの如く、和蘭がその東印度に於ける根據地を西部爪哇に求めた理由については、色々の事が考へられる。

オリフエル・フアン・ノールトに依つて試みられたマゼラン海峽經由の周回航路が、東印度貿易

用のルートとして價値がなく、むしろ危險性の多い事が明になつてから、和蘭人は早くもこの航路を見捨てゝ、專ら喜望峯廻航々路に依つて東印度へ往復したのである。

喜望峯より印度洋を橫斷して東印度に入るには、マラッカ海峽か、スンダ海峽か、バリ海峽(又はロンボック(1)海峽)の何れかを通過しなければならない。然るに、この中のマラッカ海峽は未だ葡萄牙人の手中に確保されて居て、到底和蘭人の通過は許されなかつた。バリ、ロンボック兩海峽に至つては潮流急にして船舶の通過困難なるのみならず、東部爪哇地方は當時、土民と葡萄牙人との經濟的關係緊密にして、和蘭人進出の可能性が稀薄であつた。かゝる事情の下に於いて東印度に達した和蘭人が、その入口をスンダ海峽に求めたのは當然の事であつた。其處は當時葡萄牙人の影響が少く和蘭人にとつて非常に好都合であつたのである。第二回目のフアン・ネックの船隊が先づバンタムに到達して貿易を行つたのもかゝる事情によるものであらう。

かくして一六〇二年、バンタムに商館を設置する事に成功した和蘭人は、同年和蘭東印度會社を設立し、此處を根據地として東印度經營に乘り出す事となつたのである。

第二節　東印度に於ける和蘭の勃興と英、蘭、葡（西）の爭覇

初期の和蘭貿易の缺陷と聯合和蘭東印度會社の設立

第一節に於いて述べた如く、ハウトマンに依つて一度端緒を開かれるや、和蘭の東印度遠征は十六世紀末より十七世紀初頭にかけて、眞に目覺しい勢を以つて爲されたのであつた。而してかゝる幾多の遠征は、悉く東印度貿易即ち香料貿易を目指して和蘭各地に宛も雨後の筍の如く簇生せる、大小樣々の貿易會社の手に依つて行はれたのである。勿論これ等の諸會社は自然發生的のものであり、利潤の追求を目的とせる資本主義的企業精神に基けるものであつて、何等國策的意識を有するものではなかつた。從つてこれ等の諸會社が期せずして競爭狀態に入つた事は寧ろ當然の事と云はなければならない。かうした會社間の競走は、必然的に二つの重大な結果を導き出した。それは東印度に於ける香料價格の騰貴と歐洲市場に於けるその下落といふ事である。最初の內に歸還せるものは、未だ歐洲に於ける香料の需要は大であつた爲、有利な價格を以つて賣りさばき、利潤をあげる事が出來たのであるが、その歸還するものが增加するにつれて、供給と需要の平衡が失はれて價格の下落を來し、遲れて歸還せるものは非常に低廉な價格で賣らなければならず、其處に於いて收支相償はざる狀態に立ち至つたのである。そしてかゝる狀態は東印度の生產地に於ける價格昂騰により一層拍車をかけられたのであつた。かの遠征船隊が行程半にして屢々その中の若干の船を、急遽本國に歸還せしめたのもかゝる事情があつたればこそである。かくして和蘭の東印度貿易はその初期に於いて早くも矛盾を暴露して混亂狀態に陷つて終つたのである。かゝる狀態を放置しておけば由々しき事態に立ち至る事は明かであつた。

而してかゝる內部的矛盾の他に、外部的には西班牙、葡萄牙の舊勢力は未だ印度洋からマラッカ海峽を經て、支那のマカオ及び比律賓群島に至る交通線を支配して隱然たる存在を示し、且つ歐洲より東印度に至る航路に出沒して和蘭船舶の航行に脅威を與へ、且つ英國及び佛蘭西等の新勢力の進出も漸く積極化されんとする形勢にあつた。和蘭の東印度政策の前途に於てはかゝる新舊諸勢力との鬪爭は不可避であり、之に對處するには分散せる個々の力を一のものに纏めて行かなければならず、和蘭の與へられた主觀的條件も客觀的條件も東印度に對する貿易活動の統一と集中を力强く要求して居た。ハルマンスはバンタムよりメンドーサの船隊を驅逐したが猶、彼等がアンボイナからモルッケン群島に赴き、和蘭の同情者たる土民に殘酷な迫害を加へ、和蘭勢力の萠芽を壓殺せんとした事を妨ぎ得なかつた。東印度貿易の完全なる統一を忘却して、東印度諸

島に於ける和蘭勢力の伸長は考へ得られず、かゝる統一に成功してこそ對立者への果敢な挑戰と東印度政策の積極的建設が可能となつて來るのである。しかし、西班牙の專制王權との鬪爭を通して自己を解放し、民族の獨立と自由を確保した和蘭人は國內に於ける商業資本の成長と相俟つて、本質的には自由の思想に生きるものであり、權力による拘束と統制はその最も反撥する所であつた。自由貿易は彼等の傳統的な商業精神であつて、貿易活動の自由は個人の侵すべからざる權利であつた。されば東印度貿易及び航海を一の組織の下に整理し、之を一元的に統制せんとする運動に對しては國內に於て有力な異論が起り、指導的立場に立つ政治家は概ね設置さるべき新會社に廣汎な權限を附與する事を躊躇し、東印度に於ける城砦設置、守備兵の常駐、船舶常備の權利を許す程度に止め、外交權を始め重要な諸權利は議會に掌握せしめる考であつた。然るに客觀的諸條件や葡萄牙の東印度政策が國家の全體的利益と出先官吏や貿易者の個人的利益との矛盾・衝突に惱み、その統一の失敗が或る意味では致命的影響をもたらした教訓は、和蘭人にその主觀的障害を超越して、東印度貿易・航海に關する限り絕對的統制權を新しい組織に附與しなければならぬといふ結論を與へたのである。かくして一六〇二年三月二十日、貿易企業團體としての商事會社的性格と和蘭の東印度植民政策の遂行機關としての國策的機能を兼備せる聯合和蘭東

(1) Vereenigde Nederlandsch Oost-Indisch Compagnië

東印度會社の第一回遠征

印度會社が設立され、和蘭國會より喜望峯以東マゼラン海峽以西への貿易及び航海の獨占、東印度に於ける城砦構築、各種役員・守兵の常駐、和蘭國家の名に於ける外交々涉と條約締結等各般の事項に亘る諸權限が、二十一ケ年の期間を附して與へられた。この結果會社所屬外の一般船舶は東印度に航行する事を禁止され、和蘭に關する限り東印度貿易はこの新會社の完全な獨占的支配の下に入つたのである。

かくして一六〇二年、新に東印度會社を設立しその強力な統制の下に、和蘭は東印度政策の組織的經營に乘り出して來たのである。そしてその第一回遠征船隊はウエイブラント・フワン・ワルウエイク指揮の下に、一六〇二年三月三十一日と六月十七日に夫々二隊に分れて出帆し、セイロン、アチエ、モルツケン、バンタム、支那等各地に派遣されたのである。ワルウエイク自身率ゆる本隊は一六〇三年四月二十九日バンタムに到着し、多量の香料を取引する事に成功した。そして其處に貿易の家屋を構築し、其處を根據としてバタニ及び支那沿岸を航して各地で交易し、多大の效果を收めて一六〇六年六月に本國に歸還した。(註一)

〔註一〕 Valentyn; Ibid. Deel. I. a. p. 191—193.

ワルウエイクの出發した翌一六〇三年十月二十八日、ステフエン・ファン・デル・ハーヘンが第

ステフェン・ファン・デル・ハーヘンの遠征

(1) Gaspar de Mello

二回の遠征船隊として東印度に派遣された。これは總數十三隻にのぼる船隊で、前回ワルウェイクの時が十四隻であつたから、兩者略同規模のものである。ファン・デル・ハーヘンは一六〇四年十二月三十一日バンタムに到着したが、此處では目星しい事もなく翌年早々アンボイナに向つて出帆した。(註2)

〔註2〕 Valentyn., Ibid. Deel. I. a, p. 193—194.

二月二十一日ハーヘン船隊はアンボイナに來着し、ヒツ島の土民に對して待望の援軍が到來せる旨を告げ、葡萄牙城砦の前面に投錨した。この時城内には武器、彈藥は多量に貯藏され、守備兵も充分駐屯して居たにも拘らず、指揮官ガスパル・デ・メルロのには戰意なく、土民と和蘭との協力が成立しその結果城が苦境に陷るのを恐れる餘り、和蘭側の要求を容れて全葡萄牙人の退去の安全保障、城内貯藏香料の半分を和蘭東印度會社に提供するといふ二條件の下に、和蘭側が意外とする程讓歩的な易々たる態度を以て開城したのである。アンボイナの喪失は葡萄牙にとつては非常な打撃であつた。マラッカからモルッケン群島への仲繼地點としてその間を往復する船舶にとつては休養地であり、バンダ島やモルッケン群島への勢力も此處を根據として居り、西方から侵入して來る勢力に對してこれ等の島嶼を防衛するためには全く必要不可缺の戰略的地點で

セバスチアンスのテドール占領

(1) Cornelis Zebastiansz.

あつたのである。アンボイナの確保は和蘭勢力の一歩前進を意味し、その喪失は葡萄牙の後退に他ならぬ。されば此處の經營が和蘭東印度政策の遂行上重要な意味を有する事を、ハーヘンは深く認識し暫時滯留して和蘭勢力の扶植に當る事になつた。當時ヒツ島の住民とアンボイナの住民は互に對立の關係にあり、前者は終始葡萄牙人に對し反抗的態度を以て一貫し和蘭とは盟友關係を保つて居り、後者はカトリック教を入れて葡萄牙支配の有力な支柱を爲して居た。ハーヘンはこれ等の何れに對しても愼重は宥和的方針を以て臨んだため、土民の間に人氣を博し、アンボイナの親葡住民も漸次和蘭側に傾いて來たのである。更に彼はヒツ島の土王と相互援助、香料獨占權等に關する協定を結び友好關係の强化に努めたのであつた。ハーヘンはアンボイナから副指揮官コルネリス・セバスチンスをして五隻の船を率ねてテルナテに向はしめ、自身はバンダに赴き取引を行つた後バンタムを經て本國に向つたのである。(註3)

〔註3〕 A. P. Tiele, Ibid. B. r d. T. I. e. V. Deel. 30, p. 226—229

セバスチアンスはテルナテに到着後チドール征服を志し、一六〇五年五月十四日四隻の船と百五十人の兵を率ひ、テルナテ王サヒットの兵五百人の協力の下にチドールに上陸、葡萄牙人の村落を燒き、要塞を包圍した。葡萄牙人は極力防禦したのであるが遂に敵せず、要塞は陷落して和

蘭人の手に歸し、葡萄牙人は悉く比律賓に追放されたのであつた。セバスチアンスは要塞を占據するや直に破壞し、アドリアン・ハルメンスゾーン(1)をはじめ十三、四人を交易の爲に、チドールに殘して歸航の途についたのである。(註4)

〔註4〕 Valentyn, Ibid. Deel. b, I p. 213—4

西班牙のチドール回復

かくして和蘭はモルツケン群島の要衝、テルナテ、チドールを手中に收めたのであるが、その占領は長く續かず、再び西班牙・葡萄牙軍の占據する所となつた。卽ち西班牙人は和蘭のチドール占領の報知を受けるや直にその地の回復を志し、一六〇六年三月十四日、三十二隻の船と三千の兵員より成る大船隊を組織し、ドン・ペドロ・ダ・クンハ(2)これを指揮してチドールに來攻し、難なくこれを占據、和蘭人四人を捕へた。そして更に四月一日にはテルナテを攻擊した。土民は敵し難きを悟り、悉く山中に逃走して終つたので、西班牙人は難なくガムマ・ラムマ(3)の要塞を占領したのであつた。テルナテ王サヒツトはタコマ(4)に逃れ、更にギロロに走つたが遂に西班牙人に捕へられた。此處に於いて西班牙人は彼を連れて比律賓のマニラに歸還したのである。かくしてモルツケン群島は再び西班牙人の手中に歸した。依つてテルナテ人はカイスチリ・アーリ(5)をバンタムに派遣し、西班牙勢力卽ち葡萄牙船勢力驅逐の爲和蘭人の援助を懇請したのである。(註5)

(1) Adrian Harmenszoon
(2) Don pedro da Cuuha
(3) Gamma Lamma
(4) Tacoma
(5) Kaystjili Aali

〔註5〕 Faria e Sousa; The portuguese Asis, Vol. 3, p. 142—143

和蘭のマラツカ攻撃

和蘭はモルツケン群島に於いてチドールを失つたが、この損失を補ふべく更に大なる征服を志した。それはマラツカ征服である。この目的のために、マラツカ近隣の七人の土王と盟約を結び、百五十隻の軍船と一萬六千の兵を集めて攻擊を開始した。然るにこの時マラツカにはアンドレウ・フルタドオ・デ・メンドーサ(1)の指揮の下に僅か百餘名の葡萄牙人が、要塞を守備して居たに過ぎなかつた。しかし葡萄牙人は勇戰して攻圍軍は數多の犧牲者を出して、葡萄牙の印度總督ド・マルチン・アルフォンゾ・デ・カストロ(2)が十二隻のガレオン船と四隻のガレイ船を率ひて救援に來るといふ報知を受けたので、攻圍を解いた。カストロは途中アチエに寄り和蘭船三隻を鹵獲し、市街を破壞してマラツカに至つた。この時マラツカは再度の攻圍を受けて居た。この時の攻圍軍は、十一隻の大船と七隻の貨物船より成る、コルネリ・スマテリーフ(3)麾下の和蘭船隊と、三百隻の小船と陸兵一萬四千を擁する土民軍との聯合軍であつた。和蘭船隊と葡萄牙船隊は直に戰端を開いたが、性能の劣る葡萄牙船隊は大損害を蒙つた。和蘭側も又三隻の船を失つた。そして八月二十四日に和蘭船隊はマラツカを去つた。(註6)

〔註6〕 Faria e Sousa, Ibid. Vol. 3, p. 143—146

(1) Andrew Furtado de Mendoça
(2) D. Martin Alfonso de Castro
(3) Cornelis Matelief

マテリーフの東印度經營

(1) Queda

マテリーフはマラッカを去つてからジョホール、ケダ等を巡航し、途中葡萄牙船を鹵獲したり、土民と各地で交易を行ひ、或は一部の船をアチエに分遣したる後、一六〇七年一月三十一日バンタムを訪れ、更に二月十一日にはジャカトラに入港した。そして三月二十九日アンボイナに至つたのである。(註7) アンボイナに於いて種々の準備を整えて、五月三日、チドール回復の目的を以つてテルナテに向つた。その船隊は八隻から成り、白人四百八十人、黒人五十人の兵員を擁して居た。彼の計畫はテルナテ人を援助し、チドールに要塞を築く事に在つたのである。かくして五月十四日テルナテに到着し、ギロロに避難中の土民を呼び戻した。そしてチドールの情勢を知り、十六日に其處へ着いた。葡萄牙人は海岸に要塞を築き、背後の山に大砲を据え防禦に努めた。十七日にはテルナテの土民が和蘭の援軍として來着した。しかし形勢は和蘭に利あらず、しかも、今後比律賓より來攻せんとする西班牙船隊に對抗してチドールを維持して行く方策をテルナテ人と協議したが、何等確信のある結論に達し得なかつたので、村落を若干燒き拂つたのみ、何等爲す所なくテルナテに歸還したのであつた。(註8) この後マテリーフは支那沿岸よりジョホールを廻り、バンタムに再び戻り一六〇八年一月二十八日本國へ歸航の途に就いたのである。(註9)

〔註7〕 Valentyn, Ibid. Deel. I. a. p. 194

〔註8〕 Algensola Bartolomé Leonarde., Histoire de la conquête des isles Moluques par les Espagnols, Portuguais et-Hollandois. Amstesdam. 1706. Tom. 3, p. 88—96

〔註9〕 Valentyn., Ibid. Deel. 1. a, p. 194

西班牙の焦慮

かくの如く、和蘭人も、香料貿易の利益を求めて、最初は東印度政策の重點を葡萄牙と同じくモルッケン群島に置いたのである。然るにモルッケン群島に於いては、葡萄牙勢力は衰へたりとは云へ、新に西班牙の救護の下に、未だ侮り難きものがあつた。從つて和蘭が東印度に於いて貿易を行ひ、自己の勢力を伸張して行く爲には、西班牙・葡萄牙勢力と戰はなければならなかつた。和蘭の東印度征略史の最初の幾頁かは、この舊勢力との爭闘に依つて彩られて居るのである。そしてこの新舊兩勢力の爭は、何處の植民地でもそうである様に、土民との結合を背景として行はれて居つたのである。即ち和蘭はテルナテの土民と結合して、次第にモルッケン群島に於ける自己の勢力を確立して行つたのであつた。

かゝる急速な和蘭勢力の擡頭に對して、西班牙政府が焦慮し出したのは當然であつた。一六〇五年たまり兼ねた西班牙王は、和蘭の印度貿易を禁じ、犯す者あらば斷乎たる處置に出すべき旨を宣言した。然しかゝる宣言のみにては到底勢に乘つた和蘭の活動を封ずる事は出來ず、反つて

それに油を注ぐ如き結果を導いて終つた。即ち、この宣言を無視して、和蘭東印度會社は前述のマテリーフ及びバウル・ファン・カールデン等の船隊を矢繼早に派遣した。しかもカールデンには現地に止つて自國の商館を保護すべき命令が下された。かくの如き狀態であつたから、西班牙は和蘭の進出の防ぎ難きを知り、遂に和蘭に於いて、一六〇七年に休戰條約の交涉を開始した。そして、和蘭國會の要求を容れて、(一)休戰條約により、西班牙は印度に於ける和蘭貿易を承認する事、(二)この承認は、若干年間の休戰によつて爲される事。(三)現地に於ける事態は、現在の狀態に止めて置く事、交戰中或ひは經營中のものは開始以前の狀態に置く事等の條件に贊成するの止むなきに至つたのである。そしてこの條約に基き、締結以前より開始されて居た和蘭のマラッカ攻撃は中止されねばならなかつた。しかし一方に於いて、和蘭はモルッケン群島のマキアン(1)島を占領する事が出來たのである。(註10)

休戰條約の締結

(1) Makkian

〔註10〕 Du Bois; Vies des Gouverneurs Hollandois, p. 9.

この條約は明に、和蘭の新興勢力に對して、西班牙、葡萄牙の舊勢力の一歩後退を示すものである。

バンタムの情勢

かく和蘭が東印度各地に於いて興起しつゝある時、その根據地とも云ふべきバンタムではどう

であつたらうか。

前に述べた如く、ウォルフエルト・ヘルマンスの和蘭船隊が、劣勢を以つて葡萄牙の優勢船隊を走らせてから、バンタム土民の和蘭に對する尊敬は日に〳〵高められた。一六〇三年には東印度會社の商館が建てられ、東印度貿易の中心地となつた。そして二人の補助者を有する支配人が置かれ、其處に於ける一切の指揮を掌つて居た。その他、四人の裁判官があつて、バンタム在住の和蘭人の民事並に刑事上の事項を取扱つて居た。當時バンタムには數多の船舶が集り、一六〇五年には百人の和蘭人が貿易に從事して居たものである。猶牧師も一人在つて宗教上の仕事に從事して居た。一六〇四年に時のバンタム政府から、胡椒を外國人に賣る事は支那人により禁止されて居る旨を知らされた。で和蘭人は、この支那人の妨害の爲に直接に住民からより安く胡椒を買ひ入れようと志したのである。(註11)

和蘭のボルネオ經營

(1) Sambas
(2) Santah
(3) Pontianah
(4) Brunè

〔註11〕 Fruin Mees, Ibid. Deel. 2, p. 68.

一六〇八年には和蘭はボルネオの經營に志した。即ちこの年の十月、バンタムの商館に於いて會議が開かれ、海岸に商館を設置する事が決せられた。指揮者が任命されてサンバス(1)、サンタ(2)、ポンチアナ(3)、バンヂアルマシン、ブルネイ(4)等各地の諸王と協定を結ぶ權限を與へられた。スッ

初代和蘭東印度總督ピーテルス・ボード

カダナ(5)(西海岸)は當時一人の女王に治められて居たが、和蘭人は彼女に和蘭のマウリス(6)王からの書簡を提出し、獨占的貿易を目的とする特殊な協定の締結を希望した。最初女王はその地の貿易は萬人に開放されて居る旨を宣言してこれを拒絶したのであつた。しかし、この時彼女は近隣諸國と戰爭中であつたので、遂に和蘭の要求を容れて、その援助を受くる事になつたのである。かくして貿易上の利益を擁護する爲に和蘭商館がこの地に設置された。更に一六〇九年には、獨占貿易の特權を有する商館がサンバスにも設置されたのである。(註12)

〔註12〕 John Horace, Vol. I. P. 246—47.

丁度この頃、ピーテル・フェルフフ(3)の和蘭艦隊が東印度に於いて活躍して居た。この艦隊は一六〇七年十二月二十二日テキセルを出發したものであつて、一六〇八年九月十八日に印度のゴア(4)に達し、十月八日にはカリク(5)に到着した。そしてスマトラ沿岸を經てマラッカに至りその地の攻撃を企てたが、守備の鞏固なるを以つて斷念してジョホールに向つたのである。ジョホールに於いてはフェルフフは葡萄牙人と戰ふ土王に種々の援助を與へたる後、若干の兵力を止めて一六〇九年二月三日此處を出發した。そして同月十五日にバンタムに到着した。所が當時こゝに於ける事態は紛糾して居たので、副指揮官フランソワ・ウイッテルト(7)をテルナテに派遣し、自身は二十三日バ

(1) Succadana
(2) Maurice
(3) Pieter Verhoeff ピーテルス・フェルフフの遠征
(4) Calicut
(5) François Wittert

ンダに向つた。しかし、其處に於いて彼は土民の紛爭を起して殺されて終つたのである。彼の死後その船隊は幾隊かに分れて各地に於いて貿易を營み、夫々收穫をあげて歸還したのであつた。(註13)

〔註13〕 Valentyn, Ibid. Deel. I. a, p. 198.

和蘭東印度總督の設置

一六〇九年十二月二十七日、和蘭議會は、東印度總督を設置して和蘭の東印度に於ける諸權益の管理及貿易の擁護に當らしむるの急務なる事を宣言した。そして初代總督の詮衡は最高會議の手によりなされたが、それ以後の後繼者は東印度會社の承認を經て選ばれる事となつた。當時、國家權力としての和蘭議會の勢力は、極めて消極的のものであつて、東印度會社の積極的活動部面に迄統制を及ぼす如き事はなかつた。かゝる事は、商業資本擡頭期に於ける議會として一般的のものであつた。しかし、一方東印度會社にして見れば、各貿易商人達の個人的な意欲を國家權力により統制して行く事は、その東印度貿易擁護の上から云つて絶對的に望ましい事であつた。こゝに和蘭の東印度貿易に於ける國家權力の進出の餘地があつた譯である。即ち、東印度總督の法令、東印度會社の規則書は悉く、和蘭國會の名を以つて布告されたのである。しかし、又一方に於いて、和蘭政府は東印度總督の任命に對して否認權を有する事により、自己の官吏を代理者として派遣する事となり、その行爲の全責任を受くるに至つたのである。

ピーテル・ボート初代總督に任命せる

かくして、第一回の東印度總督はピーテル・ボートに決定された。彼は、當時、葡萄牙、西班牙の活躍を抑へる爲には最適任者と考へられて居た。彼の受けた命令は、東印度會社の勢力をモルツケン群島に扶植する事、出來得れば其處に於いて貿易の獨占權を獲得する等の事であつた。彼の行ふべきかゝる事業を援助する爲に、數名の補佐役が任命された。そして、一六一〇年一月、七隻の船を率ひてボートはテキセルを出帆したのである。彼が途中暴風雨に苦しみつゝバンタムに達したのは、一六一一年の二月の事であつた。(註14)

〔註14〕 John Horace; Ibid. Vol. I. p. 260-262.

バンタムと和蘭の關係は一六〇八年迄は大體順調であつたが、同年以後に至つて次第に圓滑を缺いて來たのである。

バンタムに內亂起る

一六〇八年十月バンタムに內亂が起つた。マンクブミとバンタム貴族の關係は常に對立抗爭の狀態に在り惡化の一途を辿つて居たのであるが、この年に至つて王の叔父（ユスフ王の子）バンゲラン・ラナマンガラ(1)及びバンゲラン・マンヅラ(2)を中心として反マンクブミ陰謀が組織され。十月の或る日の曉マンクブミは殺された。そして、バンゲラン・ラナマンガラが新にマンクブミに任命されてバンタムの政務にあたる事となつた。(註15)

(1) Pangeran Ranamanggala
(2) Pangeran Mandoera

バンタム人の對外人態度の硬化

(1) Jacques L'Hermite

〔註16〕 Fruin Mees; Ibid. Deel. 2, p. 67

これより先同年二月十五日和蘭提督フェルフが到着し、新條約の締結についてバンタム王及ジャカトラ藩王と交渉を開始しようとしたが、兩者共內亂戰の爲延期を要望したので、彼は商館長ジャック・レルミッテ(1)に適當なる時新に條約を締結する樣に命じて出帆した。(註16)所が新マンクブミが任に就くに至つて形勢は變つた。彼は最早歐人の權益擁護者に非ずして、その態度は强硬なるものがあつた。加之、屢々彼は態度を豹變した。歐人の存在はバンタムにとつて有利であつたから、努めてこれに迎向する樣にはしたけれども、何等かの特權を彼等に與へた場合は、これによつて彼等が過大の勢力を得る事を恐れて、久しからずして撤回せむと企圖したのである。(註17)しかも、彼は特に英人の便を計り和蘭人に對しては極めて不利なる態度を示した。(註18)當時和蘭人はバンタムに於いて英國人に對し極めて壓倒的地位に在つた事を考へれば、彼のかゝる政策も當然の事であらう。一六〇九年レルミッテは新條約を締結してバンタムと西、葡兩國人及びその他の敵に對して攻守同盟を結び、これに對して和蘭人は自由貿易及び自由居住權を得、租稅を免除され、西、葡兩國人及び其他の外國人の都市居住が禁止される事になつたが、マンクブミ・ラナマンガラはこの新條約を履行する意志を有しなかつた。彼に云はせればこれでは餘りに和蘭人の自己保全

和蘭、ジヤカトラと條約を結ぶ

の度が過ぎると云ふのである。事實當時バンタムに於ける和蘭人の行動には目に餘る事があつたのである。この故に彼は突如輸出入稅を引上げ、和蘭商館長は早速抗議したが無効であつた。更に彼は石造家屋が容易に要塞に變更せられるを知り、建築物の大きさについて異議を唱へ、領土内に於けるこれ等の家屋が破壞される事を希望し、和蘭人が買收出來ぬよう支那人の石造家屋を悉く破壞せしめた。(註19)バンタムに於ける事態がかくの如くなつたので、レルミッテは止むなくジヤカトラと協定を結ばんと決心し交渉を開始した。ジヤカトラ藩王も和蘭人を導き入れる事に依つて自國の繁榮を計らんとしてこれを歡迎し、一六一〇年十一月に條約の成立を見たのである。これに依つて和蘭人は自由貿易權と居住の許可を得た。卽ち、彼等は九十四米平方の土地を購入し、二千七百盾を拂つて家屋を建設する許可、彼等の輸入する商貨に對する免稅、糧食品、支那商貨の輸出關稅の免除等の特權を得た。但しその他のジヤカラで購入した商貨の輸出に際しては關稅を拂はなければならなかつた。これに對して和蘭人はジヤカトラが敵襲を受けた際の援助を約し、西葡兩國人の居住禁止等はバンタムに於ける時と同じである。(註20)この樣にして極めて徵々たるジヤカトラの地に、蘭領印度の中心地——後年のバタビヤ市建設の第一步が置かれた譯である。

〔註17〕 Veth., Ibid. Deel. I, p. 337.

(1) Tji Liwoeng

〔註17〕 Fruin Mees., Ibid. Deel. 2, p. 67.
〔註18〕 Veth., Ibid. Deel. I, p. 387.
〔註19〕 Fruin Mees., Ibid. Deel. 2, p. 68.
〔註20〕 Fruin Mees., Ibid. Deel. 2, p. 69.

以上述べたレルミッテの締結したジヤカトラとの新條約は東印度會社の幹部達は何等關知しなかつたようで、初代東印度總督ピーテル・ボートの出發に當つて、ジヤカトラと、より緊密な關係を保ち、これと提携するよう努むるべき訓令を與へて居る。これによると當時會社の指導者の胸中には、ジヤカトラに要塞を築き、船舶の集合所とし、和蘭の東印度經營の築源地たらしめんと云ふ計畫がめぐらされて居たのかも知れない。何れにしてもボートはモルツケン群島に赴いて、其處に於ける事態を收拾する必要に迫られて居たに拘らず、一六一一年一月初旬ジヤカトラに至り要塞構築に關する交涉を行つたが、ジヤカトラ藩王の意向は意外にも强硬で到底承諾の見込がなかつた。其處で彼は前年締結せられた條件のうち若干——食料品輸出關稅の免除等を放棄して、チ・リウンの河口の右岸で海に接する地を得る事が出來た。(註21)それであるから正式に云へば、バタビヤ市の第一步は、この時に置かれたといふ事になるかも知れない。

〔註21〕 Veth., Ibid. Deel. I. p. 338.

かくの如く、和蘭は葡萄牙がマラッカを占領してから丁度百年目の一六一〇年乃至一六一一年に、ジャカトラ植民地の建設の第一歩に着手したのであるが、これよりもその東印度經營は漸次積極性を加へて行つたのである。

一六一二年ピーテルモルツケン群島の形勢

翌一六一二年、ピーテル・ボートはモルツケン群島に赴いた。そして其處に於ける事態が非常な危機に直面して居るのを看取した。卽ち、西班牙の比律賓總督は己が力をたのみ、本國政府より何等の命令を接受して居ないといふ口實の下に、一六〇七年の條約履行を拒絶したのである。この條約は概して西班牙側に於いては守られず、和蘭の一方的誠意に依つてのみ維持されたのであつた。和蘭は絶えず西班牙の欺罔と不信とに惱まされて居たのである。しかし乍ら、この條約が西班牙側に著しく不利なものであり、和蘭側に有利である事を考へれば、かゝる事も無理でないのであるが、しかし理由は何とでもあれ、條約締結に對する自己の責任を放棄せる限り、かゝる西班牙側の態度は不信なりと云はざるを得ないのである。一方に於いて和蘭側は言論を以つて條約の維持を計つたのであるが、他方、西班牙側は現實の行動を以つて之れを否定したのである。かゝる西班牙側の行爲は、東印度を屢々不安な狀態に陷れたのである。そして和蘭側の土民の中で、西班牙側に傾かんとする者が漸く出でんとするに至つたのである。(註23)こゝに於いてピーテル・ボートは書簡をテルナテ王につかはし、和蘭に於ける西班牙人の殘忍な行爲の數々を述べ立てた。かゝる事は、東印度の土民をして舊征服者に對して反感を抱かしめ、以つて自己の勢力を扶植せんと企圖する際、和蘭の用ひた常套的手段であつたのである。(註24)しかしかゝる手段は、和蘭と西班牙との間の敵對關係が和蘭の東印度經營に對してもたらした障害を、除去する事は出來なかつた。テルナテ王はかねて秘かに、白人の跳梁に對して悲憤の情を抱いて居たのであつたが、この西蘭兩國の軋轢を利用して、チドール王と和解し、力を協せて白人の勢力を驅逐してモルツケン群島の自由を恢復せんと計つたのである。しかし、チドール王は未だ西班牙との友好關係を捨て去る事能はず、この提議を容るゝには立ち至らなかつた。(註25)こゝに於いてテルナテ王は不本意乍ら和蘭との關係を維持して行かなければならなかつたのである。

ピーテル・ボート、テルナテ王に西班牙の非を說く

(1) Boeton ボート、モルツケン群島の諸王と條約を締結す

〔註 22〕 Du Bois; Ibid. p. 12.

〔註 23〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 264.

〔註 24〕 Du Bois; Ibid. p. 12.

かくして、一六一三年、ピーテル・ボートはモルツケン群島に於いて三つの條約締結に成功した。一は一月五日附のブートン(1)王とのもの、一は同月十六日にマキアン島の土王との間に、最後の

ものは三月四日、テルナテ王モダファール(1)との間に締結された。

このブートンとの條約は一言にして云へば一種の攻守同盟の如きものであつた。和蘭は外敵の侵入に對してブートンの保護を約し、四門の大砲と若干の和蘭人と船一隻を殘留せしめる事とした、その他、ブートンとマカッサール間の紛爭を仲介する事。ブートンの宗教上、政治上及び行政上の自主權を認め、叛亂者の所罰權は和蘭かブートンが夫々當該の管轄の裁判官に返すべき事、等の條項を和蘭は約したのである。これに對してブートン王は、和蘭及びテルナテの敵と戰ふ事、和蘭の獨占貿易の許可、商品及び必需品の價格規定とそれ等の關稅免除、和蘭人の自領に於ける耕作權及び港灣使用の自由、內部的な又外部的な困難より和蘭人を保護する事、相互の利益の爲ブートンの全人民をして强制的に稻を作らしめる事、和蘭人と土民との結婚の自由、逃亡者を相互に返還し、價格を協定するといふ條件の下に和蘭人の奴隸購買權を認める事、等を和蘭に對して約したのである。そして更にバンダ人に書を送つて、この和蘭との同盟成立を告げて加入する樣に勸告し、同時に、若しバンダにして和蘭を攻擊する事あらば、バンダに於けるブートン人を悉く召還すべき旨を警告したのである。かゝるブートンとの協約、殊に最後のブートンのバンダに對する態度は、和蘭を利する事非常なものであつたが、和蘭も又迅速なそして有效な援

(1) Modafar

助を以つてそれに酬ひたのであつた。(註25)

〔註 25〕 Du Bois; Ibid. p. 18-19

テルナテとの條約は單に、和蘭と土民との間に宗教的紛爭を生せしむる種々なる障碍の除去に關するものに過ぎなかつた。マキアン島との條約は、ブートンの場合と同じく共同の敵に對する相互援助を約し、代償として和蘭は香料貿易の獨占權を獲得し、價格も一擔槪につき八リアル銀貨五十個に一定され、それ以上に上げる事も下げる事も出來ぬよう取り決められたものであつた。(註26)

〔註 26〕 Du Bois; Ibid. p. 18-19.

かくの如く和蘭はモルツケン群島に於いて自己の地位を固めるや、直ちにブートンの援助の下にソロル島とチモール島に於ける葡萄牙植民地を占領したのであつた。モルツケン群島に於ける西班牙、葡萄牙の舊勢力は、日に〳〵落日の運命に陷りつゝあつたのである。思へばハウトマンが初めて爪哇を訪れてから僅か十五年、東印度に於ける和蘭の勢力は最早動かし難い有力なものとなつて終つたのであつた。この時に和蘭は、テルナテ島に三個、モルチ(1)島に一個、マキアン島に三個、バチアン(2)島に一個の要塞を有し、これに對して西班牙葡萄牙兩國は、テルナテに一

(1) Morty.
(2) Batchian

個、チドール島に三個、ギロロ島に若干を有するのみで、和蘭の勢力は正に隆々たるものがあつた。この様な和蘭の進出を無念に思つた西、葡兩國は、一六一三年、一大船隊を組織してモルツケン群島を征服し覇權の再確立を企圖して來攻した。しかし、土民は和蘭の援助の下に果敢な反撃を加へてこれを潰走せしめた。そしてこの聯合軍は勝に乘じて敗敵を追撃して、比律賓沿岸に至り村落市街を荒掠燒却したのである。こゝに西班牙・葡萄牙の企圖は脆くも蘭折して終つたのであつた。(註二)

〔註 27〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 266-7.

和蘭が西班牙、葡萄牙の舊勢力に對して次第に勝利を占めつゝあつた時、彼等の新なる競走者がその前面に、漸次大なる姿を以つて立ち塞つて來たのであつた。それは他ならぬ英國の勢力である。

英國の進出

英國は十六世紀の末、和蘭より稍々先んじて東印度貿易に參加したのであつた。時間的には和蘭より先進者である譯であるが、その東印度貿易に對する熱意、その積極性に於いては問題とならず、十六世紀の初頭には和蘭に追ひ拔かれ遙かに立ち遲れの狀態にあつたものと思はれる。しかし、決して無關心であつた譯ではなく、和蘭の目覺しい活躍は彼等の競走心を刺戟する事大なるものがあり、その結果一五九五年に東洋貿易を目的とする會社の設立をロンドンに見たのである。この會社の資本金は八萬百三十三磅で百株に分けられた。その申込金額は百磅から三百磅迄種々あつた。そして十五人の委員より成る委員會が組織されて一切の事務の處理に當つた。この委員會はエリザベス女王 懇請して特許狀と種々の特權を獲得せんとした。又印度洋に三隻の船を派遣する許可を請うたのである。女王は最初これに同意を與へたのであるが、時あたかも西班牙と條約交涉の最中であつた爲、政府當局者は遠征船隊の出發を延期するよう勸告した。女王自身も喜望峯を經由する航海に何等關心を有して居らず、專ら地中海を經て波斯、亞剌比亞方面に使者を派遣するに止つて終つた。しかし、會社側は再三再四懇請を繰り返したので、政府も折れて遂に印度遠征の許可を與へたのであつた。そして遠征船隊の出發に先き立ち、政府は特許狀を發行して、倫敦の全商業團體を加入合體せしめた東印度貿易を目的とする一大會社を組織した。The Governor and company of Merchants of London trading to the East Indies と云ふ名稱が示す如く、倫敦に於ける全東印度商人の統合團體であつた。この會社は喜望峯及びマゼラン海峽以遠の諸地方に於ける貿易の獨占權、毎年金・銀で三萬磅の輸出の許可、輸出入に於ける關稅免除等の特權を有した。全英人は會社の獨占區域内に於ける貿易は一切禁止された。エリザベス女王は、

英國東印度會社の設立

出資者達に依つて採られた所の、議長一人と委員二十人から組織された委員會の手に會社事務の處理を委ねる方法を承認した。委員は出資者の投票に依つて毎年任命される事になつた。會社が貿易獨占權を有する期間は十五年と定められた。然し乍ら、經驗の結果不便なる事が分つた場合には、政府は、豫め二年前に當事者に通告する條件の下に、それを廢止し得る權利を保留した。しかし、有利なれば更にもう十五年間新に許可する事を約したのである。(註28)

〔註28〕Barchou de Penhoën; Histoire de la conquête et de la fondation de l'empire anglais dans l'Inde. Paris, 1840-41 Tom I, p. 30-31.

ランカスターの東印度遠征

(1) Lancaster

かくしてこの新組織の會社の下に、一六〇一年五月二日ランカスター(1)指揮の英國東印度遠征船隊は壯途に就いたのである。この船隊は、百噸乃至六百噸の五隻の船から組織されて居た。(註29)

ランカスターの船隊は英國を出帆してから、喜望峯を廻りスマトラ島のアチエに到着した。それは一六〇二年六月の事であつた。アチエ王はこの英國船隊の威容を見て大に歡待した。ランカスターはエリザベス女王の親書と數多の進物を呈して、英國とアチエの間に親善關係を確立すべき目的を以つて來航せる旨を述べた。そして貿易上の條約締結に成功し、商館建設の許可を得た。西班牙・葡萄牙はランカスターの行爲を嫉視して監視を續けて居たが、彼は彼等の間隙を買收してその策略の裏をかき、マラッカ海峽に於いて更紗や香料を滿載した九百噸許りの葡萄牙船を鹵獲してアチエに歸還した。そして更に數多の胡椒を積載した後、十一月に出發した。(註30)アチエからランカスターはバンタムに至り、其處で交易を營んだ後本國へ向つたのであるが、歸着したのは出發してから二年後であつた。(註31)

〔註29〕Barchou de Penhoën; Ibid. Tom I, p. 31.

〔註30〕Marsden; History of Sumatra. London. 1811. p. 436.

〔註31〕Barchou de penhoën; Ibid. Tom I, p. 31.

一六〇三—一三年間の英國の活動

ランカスター以後、一六〇三年から一六一三年に亘る十年間に、英國は八回に及び東印度に遠征船隊を派遣したのであつた。その中、たゞ一回のみ暴風雨の襲撃を受けたゞけで、他は概ねランカスターの場合と同じ樣な好條件の下に行はれ、そして順調な結果をもたらしたのである。その純益は百パーセント以下といふ事は嘗つて無く、屢々二百パーセントを越える事すらあつた。(註32)貿易品はスマトラ、爪哇アンボイナの生絲、更紗、藍、香料等であつた。殊にアチエの金、樟腦、バンタムの胡椒、シヤムの金、銀、彩色鹿皮、日本の銀、銅、鐵、ボルネオの金、金剛石、寶石、マカッサールの米、バンダの肉荳蔻、その他の物産であつて、これ等の品物を印度産の織物と交換

して得たのである。(註33)一六〇八年モルッケン群島に於ける英國東印度會社の代理人は、倫敦の委員會へ、東印度諸島の住民が非常に印度大陸產の織物や更紗を要求して居る旨を報告し、出來得る限り迅速に印度のスラト(1)やキャンベイ(2)等と貿易を開き、これ等の商品を獲得すべき事を進言して居るのである。(註34)この報告に接し、英國は直に印度貿易の開始を決意し、葡萄牙人と戰つてスラトに到着し、土民と貿易を開始したのである。この當時の英國の東印度貿易は、一般民衆に生活必需品を供給するといふよりもむしろ、歐洲の上流階級に香料、香水、寶石其の他の贅澤品を供給する事を目的として行はれたものであつた。それであるから、英國は印度の綿織物貿易を貿易上の重要商品といふよりは、むしろ東印度諸島に於いて香料其の他の奢侈品を獲得せんが爲の手段と見做して居たのである。英國はかゝる東印度貿易政策の有利なる事を悟るや、次第にその組織を擴大して行つたのであるが、その必然的な結果として和蘭との衝突が導き出された。この兩者は陰慘な土民間の國內戰爭を通して爭闘を續けたのである。(註35)しかし和蘭は本國の西班牙に對する關係上、徹底的に英國と抗爭を開始し得ざる狀態にあり、英國は又かゝる事情を利し、徐々に自己の勢力を東印度に扶植して行つた。キャンプベル(3)に依れば、一六〇四年にサア・ヘンリー・ミッデルトン(4)の英國船隊がジャカトラを訪れ、一六〇九年にはウイリアム・キ

(1) Surat
(2) Cambay
(3) Campbell
(4) Sir Henry Middelton

(1) William keeling
(2) David Middelton
(3) James de Mendoza Furtado
(4) Fr. de Miranda Enriquez

ーリング(1)が來り、そして一六一〇年には和蘭に先き立つてダビッド・ミッデルトン(2)が英國商館の建設に成功して居るのである。(註36)今や東印度に於ける和蘭人にとつて、英國人こそはその重大な競走者としての地位に昇つて來たのであつた。

〔註 32〕 Barchou Penhoën; Ibid. Ton I, p. 31.
〔註 33〕 John Horace; Ibid. Vol I, p. 264.
〔註 34〕 Barchou penhoën; Ibid. Tom I, p. 34.
〔註 35〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 264.
〔註 36〕 Campbell, Java, past & present. Vol. I, p. 199.

東印度に自己の勢力を伸長するや、和蘭は更にマラッカの獲得はその位置の重要性の故に、最初から和蘭の宿願であつて、一六〇七年にはマテリーフに依つてその攻撃が試みられたが失敗に終つた。そして、一六一五年に再び企てられたのである。

和蘭の攻撃に先き立ち、葡萄牙の宿敵たるアチエ王は五百隻の軍船に六萬の兵を以つて、マラッカ攻撃を行つた。然し乍ら、この大軍は、一六一五年十一月中旬、ジエームス・デ・メンドーサ・フルタドオ(3)とデ・ミランダ・エンリッケス(4)指揮の葡萄牙船隊の反撃を受け、脆くも潰走して終

つた。葡萄牙船隊は直に敗敵を追撃せんとしたのであるが、八隻の和蘭艦隊の來攻するに及び、それを斷念してこれに當る事となつたのである。

戰鬪は三日に亘つて行はれ、葡萄牙側は數隻の船と二百名以上の兵員を失つて、制海權を奪はれて終つたのである。和蘭船隊は更に進んでマラツカの封鎖を企圖したが、彼等も又損害大なるものあるを以つて立ち去るに至り、こゝにマラツカは再び虎口を脱する事を得たのである。(註37)

〔註 37〕 Faria e Sousa; Ibid. Vol. III, p. 213.

ヘラルト・レエインスト、和蘭東印度總督となる

かゝる中に、和蘭の東印度總督は更迭され、一六一三年二月二十日ピーテル・ボートの後任としてヘラルト・レエインスト(1)が任命せられて、翌一六一四年十二月二十日バンタムに到着した。彼は出發に當つて、東印度會社より、特にバンダ島を勢力下に置き、和蘭の東印度貿易の增進を計るよう訓令されたのである。其處で彼は爪哇に着くや直にアンボイナに至り、其處に非合法的に定住し土民と香料の密貿易を營んで居た英國人をすべて驅逐した。そして、それからバンダ島に向ひ、プロ・アイエ(2)島を占領したのであるが、突然土民の襲撃を受けて退却の止むなきに至つた。和蘭のバンダ島征服計畫は此處に一時頓挫の形となつたのである。(註38)

(1) Gerard Reynst
(2) Pulo Aye

〔註 38〕 John Horace; Ibid. Vol. p. 268-9.

一六一五年東印度に於ける列國の勢力

さて、當時に於ける列國の東印度に於ける勢力は如何なる狀態に在つたであらうか。

先づ葡萄牙であるが、葡萄牙はこの時には、東印度全體をその支配下に置いた彼の十六世紀に於ける隆盛の面影は更に無く、辛うじてマラツカを保ちマカオ——ゴアの交通線を維持するに汲々たる有樣で、東印度貿易の中心地たるモルツケン群島に迄自己の勢力を伸長し得る餘力はなかつたのである。

之に反して、同じ舊勢力たる西班牙はいさゝか事情を異にして居た。十六世紀に於いては彼等は葡萄牙の勢力に抑えられて、僅かに比律賓の經營に止つて居たが、同世紀の後半に至り、葡萄牙の勢力が次第に衰へ、更に一五八〇年の西班牙、葡萄牙の兩王國の併合が成立し、東印度に於ける葡萄牙の勢力圈内への進出が可能になるや、モルツケン群島へ俄に活潑に乘り出して來た。

和蘭は既に述べたようにバンタムからジヤカトラに根據地を移して、他の何れの國よりも熱心に且つ組織的に東印度經營に從事して居たのであるが、その重點は未だ香料貿易に置かれて居り、從つて彼等の活躍も專らモルツケン群島を中心として行はれ、アンボイナ、テルナテがその中心地として確保されて居た。この和蘭人に對して比律賓のマニラを根據とする西班牙はチドールに據つて對抗の姿勢をとり、各々土着勢力を背景として相爭つたのである。

この中に在つて英國のみは未だ何處にも確固たる根據地を有せず、各地の土民と徐々に平和な交涉を續けて居た。殊に未だ何處の勢力も及んで居ないセレベス島に注目し、マカッサール王と親善關係を保つて居たのである。

ローレント・リアル和蘭東印度總督となる

(1) Laurent Real
(2) Don Juan de Silva

全く、この當時の東印度は白人の激烈な爭闘の爲に混亂の狀態に陷つて居たのである。

一六二六年和蘭東印度總督は代つて、新にローレント・リアル(1)が第三代總督に任命された。彼はアムステルダムの富商の家に生れ、軍事、政治兩方面にわたり卓拔せる手腕を有し、有數の才幹であつた。

スピールベルフの遠征

ローレント・リアルが任に就いた當時は、東印度の狀勢は比較的平靜を保つて居た。西班牙の比律賓總督、ドン・ジユアン・デ・シルバ(2)は一六一三年の末と一六一四年の始めに、モルッケン群島恢復を企圖したが、種々の事情から何れも失敗に歸して終つた。この平穩な時期を利用して和蘭はその防備を固め、歐洲本國から有力な援軍を得た。ローレント・リアルは要塞を一つ占領し、各地に新しい植民地を建設した。かゝる和蘭の活動を、西班牙は全く無視して居たのである。(註 39)

〔註 39〕 Du Bois; Ibid. p. 28.

この樣な狀勢の中に、一六一六年二月、スピールベルフ(1)の遠征船隊がマゼラン海峽を經て比律賓に達した。丁度ドン・ジユアン・デ・シルバの船隊がマラッカに發向した直後で、その手薄に乘じてマニラを封鎖し、更に比律賓沿岸を荒掠しつゝ、三月二十九日テルナテに入港したのである。一方和蘭船隊を率ひてバンダ島に在つたジャン・デイルクス・ラム(2)は、スピールベルフの來着を待たずして四月十日プロ・アイエの要塞を占領し、土民を屈服せしめた。スピールベルフは七、月十八日テルナテを出帆、途中モルッケン群島の諸地方に寄港しつゝ、九月にジヤカトラに到着したのである。丁度この頃、ドン・ジユアン・デ・シルバの率ゆる西班牙の大船隊は、準備萬端を整へてバンタム及びジヤカトラの和蘭植民地を破壞し、進んでモルッケン群島を占領する目的をもつて、マラッカを出發せんとして居た。しかし、この計畫はデ・シルバの急死に依つて畫餅に歸し、空しくマニラに歸還するの止むなきに至つたのである。(註 40)

(1) Spielberg
(2) Jean Dirksz Lam

〔註 40〕 Du Bois; Ibid. p. 29-30.

翌一六一七年四月に至り、再び西班牙船隊の來攻があり、和蘭はこれを迎へ擊つて激烈な戰鬪が行はれた。兩軍は殆んど互角の兵力を以つて戰つたのであつたが、船舶の構造に於いて和蘭側が優れて居た爲に、結局西班牙の敗退に歸したのである。(註 41)

〔註 41〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 271-2.

ローレント・リアルの功績

かく西班牙の後退に伴つて、和蘭はその勢力を伸長して行つたのであるが、この時に當り、ローレント・リアルの功績を見逃す事は出來ない。何事も三代目が大切であると云はれるが、ジャカトラ占據の直前の一六一六年から十八年にかけて、和蘭勢力が順調な發展振りを見せ、將來の飛躍的な活動の基礎を造り得た事には、ローレント・リアルの軍事的な、政治的な手腕が與つて大なるものがあるのである。彼の在任中、テルナテ及びその同盟諸島に於ける和蘭勢力はより一層鞏固となり、全東印度諸島に於ける和蘭權益は確實に保護された。和蘭東印度會社の勢力は躍進し、嚴重に武裝せる七十隻乃至八十隻の船舶は絕えず赤道直下の海上を遊戈し、爪哇モルツカス群島その他の諸地方には三千人の兵士が數百門の大砲を備へて駐屯して、數多の商品貯藏用の建物を守備して居たのである。(註四七)

[註 42] John Horace; Ibid. Vol. I, p. 272.

土王の陰謀

然し乍ら、何事でも順調に發展して居る時に、將來現れ出づる禍根又は危險の萠芽が育くまれて居るものであるが、この場合も又そうであつた。即ち、東印度の土王達は次第に白人の勢力を自己の領內に導入せんとする政策が、重大な誤謬であつた事を悟り始めたのである。それはあらゆる場合に於いて戰爭の發端であり、そして究極には屈服より外に何物もなかつたからである。

しかし、誤謬は既に犯されて終つた。彼等に殘された事は、救治策を發見し政策に依つて失はれたものを武力に依つて恢復するのみであつた。陰謀はかくして徐々に進められた。そしてその對象として最大の勢力者たる和蘭人が選ばれ、手段として弱敵を以つて强敵を制するの策が採られた。卽ち英國をして和蘭に當らしめ、その結果和蘭を驅逐し更に英國の力をも弱めようといふ、一石二鳥の策を計つたのであつた。バンタム、ジャカトラ、チエリボン(1)の土王がこの陰謀の首謀者となり、スマトラ、セレベス、モルッケン群島等にも波及した。これが一六一七年の情勢であつて、翌一六一八年から一九年にかけて、この土王及び英國對和蘭の對立は爆發點に達し、遂にジャカトラ攻略戰が誘發されるのであるが、この戰鬪に於いて英國は假面を脫し和蘭の重大な敵として、その正面に立ち現はれるに至つたのである。

英、蘭の紛爭

(1) Cheribon

ジャカトラ攻略戰は、和蘭の東印度經略史上一つの重大なエポックを劃する事件であるが、それに入る前に一應それ迄の英・蘭關係及び爪哇島に於ける土民と和蘭との關係に觸れて置く事とする。

一六一七年から一八年にかけて、英國東印度會社は增資を決行し、新に百六十萬磅の資金を得た。この資金は專ら印度航海の費用に充當され、東印度に於ける英國人の活躍を刺戟する事大な

るものがあつた。そして、一六一七年から一八年の間に、ポラロン(1)及びロセンヂエン(2)の二小島を占據した。これ等の島は和蘭植民地の近傍に在るものであるが、未だ和蘭の勢力下ではなかつた。しかし、和蘭はこの二島の所有權を主張して襲撃して來たが、英國人は極力防戰に努めてこれを擊退したのである。和蘭は其處で若干の英國船を拿捕して本國に曳航し、英國がそのモルツケン群島に於ける野心を放棄するに非らざれば驛放せざる旨を宣言した。和蘭の權利を主張せる根據は、和蘭が獨力を以つてモルツケン群島から葡萄牙人を驅逐した事、和蘭は土民と條約を締結し、葡萄牙及びその他の敵から土民を保護する旨約した事、その交換として彼等から貿易獨占權を得た事等であつた。(註42)これに對し英國側から、和蘭のチドール及びアンボイナに於ける不法行爲に對する詰問が提出された。和蘭は更に爪哇島に於ける英國船の不法行爲を列擧して賠償を要求したが拒絶された。最早問題は外交々涉では如何ともし難く、武力に依つて解決されるのみとなつたのである。かくして、バンタムの英國商館は破壞され、英國船隊の爪哇沿岸封鎖が行はれ、英蘭兩國は全く敵對關係に入つた。(註43)これが一六一八年の情勢でこのまゝジヤカトラ攻略戰に迄繼續されて行くのである。

(1) Polaron
(2) Rosengen

〔註 43〕 Barchou Penhoën; Ibid. Tom. I, p. 46-50.

〔註 44〕 John Horace; Ibid. Vol. I, p. 276-277.

次に爪哇に於ける和蘭と土民との關係は如何に展開されて居たであらうか。

和蘭がバンタムを引き揚げてジヤカトラに移つてから、最初の數年間この兩者は相互に對抗關係に在つた。ジヤカトラに於ける和蘭商館の建設に依つて、バンタムは自己の貿易の繁榮に重大な脅威を感ずる樣になつた。一方ジヤカトラは和蘭との交涉を保つ事に依つて、自己の繁榮を導き得る事を知つた。かくの如くして兩者の關係は繰り擴げられたが、一六一三年にバンタム及びジヤカトラの商館長になつたヤン・ピーテルスゾーン・クーン(1)は、出來る限り兩者の對抗意識を刺戟したのである。卽ち、コロマンデル(2)産の織物の如き當時の重要な商品を、クーンはジヤカトラには輸入してもバンタムには輸入しなかつた。それは前者に於いては關稅は上げられてなかつたが、後者では上げられて居つたからである。この結果バンタムへの重要商品の輸入は杜絶して終ひ、それを防いで輸入を維持して行く爲に、バンタムは遂に高率關稅を撤回するの止むなきに至つたのである。この場合ジヤカトラが協力し兩者一致して行へば、關稅吊り上げの計畫は成功し、和蘭は服從せざるを得なかつたのであらうと思はれる。かくしてバンタムとジヤカトラの間に戰端が開かれんとしたが、一六一六年にバンタムの回敎寺院に落雷のあつた事から、今一つ

(1) Jan Pieterszoon Coen.
(2) Cormandel

和蘭、バンタムとジヤカトラを爭はせんとす

はマタラム王國の脅威が西部爪哇に及ばんとして居た事から破局を見るには至らず、兩者は同盟してマタラムに對抗せんとしたのである。(註45)こゝに兩者を爭はしめて漁夫の利をしめんとしたのである。

和蘭の政策は失敗に終つたのである。

〔註 45〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 73.

和蘭、バンタムの親善破る

バンタムは常に和蘭人を市内に留め、而して定期的の生産制限を行つて商品の價格を吊り上げる事と、高率の輸出入關稅に依つて利益を收めんと計つた。之に反してクーンは英國人を始めその他の白人を香料貿易から除外し、彼等の商館を存在せしめざる事、香料の價格を低くし、その輸出關稅及び和蘭商品の輸入關稅の撤廢等を要求し、かゝる條件をバンタムに承認せしめんが爲に、クーンは前述の如くジヤカトラに貿易の中心を移し、出來得る限り兩者の關係を剌戟しようと努めたのである。しかし、かゝるクーンの政策は逆の結果をもたらし、こゝに和蘭とバンタムの傳統的親善關係は破れて、兩者は完全に相敵視する事となつた。一六一八年、クーンが和蘭東印度總督となるや、バンタムは非常な脅威を抱き、彼を暗殺せんと計つたが遂に成功を見なかつたのである。(註46)

〔註 46〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 74.

ジヤカトラの和蘭商館擴大

クーンはバンタムとの關係が到底恢復すべからざる事を見極めるや、ジヤカトラの經營に力を注ぐ樣になつた。かくしてジヤカトラに於ける和蘭商館は次第に基礎を固めて行つた。從來、ジヤカトラの和蘭商館は、一六一三年チリヴン河口に造られたナッサウ(1)商館がそれであつた。一六一六年、この商館の重要性が增大するや、クーンはバンタムより多數の守備兵と物資を送つて守備を强化した。(註47)大體これに伴つて和蘭とバンタムの紛爭も激化して行つた譯である。そしてこの背後には英國が居つて、バンタムの反蘭政策を煽動して居たのである。

〔註 47〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 75.

バンタムに於ける和蘭人の態度

しかし乍ら、一六一八年一月迄は兩者の關係は絕對的に調整不可能といふ程ではなかつた。それといふのは、當時バンタムの反蘭政策は專ら時の政治當事者たる攝政ラナマンガラの意圖に出で、國王及び王族はむしろ親蘭政策を抱懷して居たのである。

さればこそ一六一八年一月、和蘭の佛蘭西船拿捕事件に端を發した和蘭對バンタム・英國の紛爭の結果ラナマンガラが和蘭人を徹底的に驅逐せんと計つた時も、國王はこれに反對し、和蘭に對して引き續き居住するよう一應勸告したのである。所がこの直後支那の貿易船が來着した爲、バンタムに於ける胡椒の價格が俄に騰貴し、和蘭人は到底從來の價格では購入し得ざる狀態に立ち

(1) Nassau.

至つた。こゝに於いてクーンは和蘭人の交易が終了する迄支那人の香料購入を禁止した。この様なクーンの態度は勿論バンタム人の感情を惡化せしめ、兩者は再び敵對關係に入つたのである。(註48)

〔註 48〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 75-76.

かゝる事情からクーンは更にジヤカトラ商館の擴大に志し、新にマウリチウス(1)といふ商館を增築した。病院及び荷揚場がオンルスト(2)島に造られ、嚴重に防備が固められた。加之クーンはオントン・ジヤヴア(3)附近のチ・サダネ(4)河口に城砦を構築する許可をジヤカトラに要求したのであるが、この要求を耳にしたラナマンガラは、和蘭人の行動の恐るべき旨をジヤカトラに忠告した。此處に於いてジヤカトラ藩王ウイヂヤヤ・クラマ(5)は、和蘭人に多くの根據地を提供する事に非常な危惧の念を抱き、この要求を拒絶したのである。(註49)當時、ジヤカトラとバンタムとの間に、和蘭人驅逐を計る何等かの計畫が進められて居たかどうかは、確實に知る事は出來ないが、少くともクーン自身はこのジヤカトラの拒否の背後に在るものに對して、大なる疑惑の念を有して居た事は事實である。そして、既に一六一七年から一八年にかけて、東印度の土王間に反和蘭陰謀の機運が熟しつゝあつた事を考へれば、兩者の反和蘭政策の聯繫は多分の可能性を有して來るの

(1) Mauritius
(2) Onrust
(3) Ontong Java
(4) Tji Sadane
(5) Widjaja Krama

ジヤカトラ和蘭人を警戒す

であつて、問題は果してそれがどの程度の緊密さを以つて行はれて居たか、と云ふ事になるのではあるまいかと思はれる。かゝる土王間の反蘭陰謀は、やがて一六一八年の八月に至つて、その片鱗を表はし始めた。最初彼等土王側の政策が、英・蘭兩國を相闘はしめ、兩者傷ける後に漁夫の利を得んとする事に在つた事は前に述べたが、ジヤカトラの和蘭に對する要塞構築拒否の直後、バンタムは俄に和蘭に好意を、英國には敵意を示し、兩者の關係を刺戟せんと試みたのである が、クーンは早くもかゝる意圖を看破して、その策略に陷る事をしなかつた。マンクブミは自己の計畫が失敗に終つたので、第二段の策としてジヤカトラの和蘭商館破壞を志し、ジヤカトラ王を抱き込み、その便宜に依つてラナマンガラの弟バンゲラン・ガバン(1)は五百の從者を率ひ和蘭商館の動靜を偵察したのであるが、この事は早くもクーンの知る所となり、兵を備へた爲、襲撃を受くるに至らなかつた。此處に於いてジヤカトラ王の再三の釋明にも拘らず、その背後に動いて居るバンタムを始め土王間の陰謀に對するクーンの疑惑は全く動し難いものとなつた。早くも彼は商館にある金品を船に運んで、土民の襲撃に對する準備を開始したのである。(註50)

マンクブミの陰謀

(1) Pangeran Gabang

〔註 49〕 Fruin Mees; Ibid. Deel I, p. 77.

〔註 50〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 77.

反蘭機運爪哇に起る

一方爪哇島の他の部分に於いても反和蘭の機運が漸次表面化して來た。マタラム王を始めチヤリボン其の他の土王は、バンタム、ジヤカトラの英國人を支持せんとする態度を明にして來たのである。そしてジヤバラに在る和蘭商館は襲撃を受けて、二萬リアルに上る商品は掠奪され、館員は悉く殺害されるか又は捕虜となつたのである。(註50)今や、土王間にめぐらされた和蘭人驅逐の陰謀は次第にその相貌を現して來たのであるが、これに對して自己の地位に大いなる不安を抱いた和蘭人は、秘密裡にジヤカトラに在る商館の武裝を急ぎ、十月二十二日の會議で許可を乞ふ事なく、居留地の周圍に堡壘を築く事を決して直に着手した。そして十一月には既に一部の完成を見た。ジヤカトラ王は非常な恐怖を抱き、直に支那人及び爪哇土民の和蘭の城砦構築に佛はれる事を禁じ、市街に防備を施したのである。これと共に英國も防彈壁を構築して守備を固めた。(註51)かくして物々しく緊張した空氣がジヤカトラを支配し出した。丁度この頃、スマトラのジヤンピイとセレベスのマカッサールにある和蘭商館が襲撃されて、ジヤバラのそれと同じ運命に陷つたが、ジヤカトラから派遣された和蘭軍は忽ちの中に復仇を遂げて歸つた。これを見てバンタム及びジヤカトラは頗る意氣喪失したのであつた。たゞ〳〵バンタム在留の英人は、本國より五隻の援軍が派遣されたといふ報道を得た。彼等はこの新手の船隊の優越せる事を高調して、土民の

和蘭防備を急ぐ

「黒獅子號」事件

士氣を鼓吹した。そして更に自己の力量を示さんが爲に、十二月十五日和蘭船「黒獅子」號を拿捕したのである。和蘭は嚴重な抗議を提出してその釋放を要求したが、英國は之に應せず、ます〳〵露骨に敵意を示したので、こゝに兩國人の間に戰端が開かれんとするに至つたのである。一方ジヤカトラ及びバンタムの土王も、和蘭の中立維持の要求にも拘らず英國支持の態度に出でた爲、和蘭も意を決し十二月二十三日の會議に於いて攻撃を行ふ事になり、こゝにジヤカトラ攻略戰の火蓋が切られたのであつた。この戰に依つて、和蘭は爪哇人及び支那人の市街と英國商館を燒き拂つたのである。次いで第二回目の攻撃が行はれたが、英國及びジヤカトラの聯合軍は善く防戰に努めたので、和蘭は何等戰果を得るに至らなかつた。(註52)

ジヤカトラ攻略戰開始さる

[註 51] Du Bois; Ibid. p. 36.

[註 52] Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 78

[註 53] Du Bois; Ibid. p. 36-39.

和蘭のジヤカトラ要塞危機に瀕す

十二月二十九日になるや、和蘭は英國の新鋭艦隊がバンタムに到着せる事を知つた。これは和蘭にとつては非常な脅威であつて、クーンは直ちに迎撃する事に決し、武裝を整へた七隻の船を率ひて出發した。

この爲後には僅か三百五十人(兵器を執り得る者二百五十人)の兵が城砦内に殘留する事となつた。しかし糧食は充分であつたが彈藥は著しく不足を告げた。クーンの率ゆる和蘭船隊は英國船隊と三日間對峙したが、その後英國側には三隻の增援隊を加へたのに對し、和蘭側は一隻を加へたのみで、彈藥も缺乏して居た爲頗る不利な狀態にあつた。此處に於いて彼はアンボイナに走り、同地に散在する船舶を集めて再擧を期さんと決心し、城砦殘留者に對して出來る限り長く支へ、敵の甘言に欺かれぬよう訓令してジャカトラを去つたのである。(註54)

〔註 54〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 78.

(1) Van den Brock

ジャカトラ包圍戰始る

此處に於いてジャカトラの和蘭城砦は海陸より包圍され非常な苦境に陷つたが、和蘭人は屈せず善く防戰に努めたのであつた。この奮戰はジャカトラ王をして和議を求めしむるに至り、一度それは成立したのであるが、英國の策略により和蘭側の使者ファン・デン・ブルックが監禁されたので、再び決裂して終つたのである。(註55)

〔註 55〕 Du Bois; Ibid. p. 42.

この平和交涉の失敗の時から大凡五ケ月の長きに亙り、ジャカトラ要塞の包圍期に入るのであるが、聯合軍が一致して攻擊すれば容易に陷落せしめ得たに拘らず、和蘭がかくも長期間維持し得たと云ふ事は實に奇妙な話で、彼等は全く聯合軍側の不統一に依つて奇蹟的に救はれたものと云はなければならない。英國はこの機會にジャカトラ根據地を奪つて和蘭人を東印度から驅逐し、代つて自分が東印度貿易の支配權を握らうといふ野心を抱いて居た。しかし、ジャカトラ要塞を英國に渡して彼等の根據地とする事は、土王側にとつては宛も前門の虎を追つて後門に狼を迎ふる如きもので、彼等はかゝる英國の計畫に與みしようとしなかつたのは當然の事である。一方土王側に於いてもジャカトラとバンタムの間には利害上の對立があつた。彼等が和蘭人の橫暴な行爲に憎惡の念を有して居たのは事實である。そして又種々の陰謀を企んで居た事も否定出來ない所である。それにも拘らず、彼等は和蘭人との貿易が大なる利益をもたらす事を知つて居た。たゞその利益たるや、商品の價格及び關稅に關する和蘭人の一方的行爲に依つて、著しく減殺されて居た譯である。故にこの機會に和蘭人を屈服せしめ、制御し易い忠實な貿易者となし得れば、進んで自己の港に迎へようといふのが彼等の意圖であつたに違ひない。さればこそ、バンタンの攝政ラナマンガラは、ジャカトラ攻圍戰の開始を聞くや、和蘭人がジャカトラ王の支配下に入る事を恐れて、二千の兵を率ひて馳せつけたのである。(註56)

〔註 56〕 Du Bois; Ibid. p. 42.

攻圍軍の不統一

和蘭の防備策

和蘭人の目的は出來得る限り長く、事情が許せばアンボイナからクーンが援軍を率ひて來る迄要塞を守備し通す事にあつた。そしてそれを戰爭といふよりは寧ろ平和的手段によつて行はんとした。何故ならば、城砦の北側の海面は五隻の英國船隊に依つて封鎖され、西南及び南側はジャカトラ軍に包圍され、更にチリヴン河西方アンケ(1)河畔はバンタム軍の陣地となつて居たから、(註57)この嚴重な包圍軍に對して戰鬪手段に依つて城砦を守備して行くには、餘りにも彈藥も兵力も不足して居たからである。それよりはむしろ、包圍軍側の不統一を利用して平和的手段によつて維持を計つた方がより賢明な策であつたのだ。しかしこれによつても不可能となつた場合には、城砦を離れる時のクーンの指令に從つて、守備兵は英國の手に投ずる事としたのである。(註58)白人である和蘭人が同じ白人である英國人に城を明け渡さうといふ事は、人情の上からは當然の事であらうが、それにしても人種間の偏見といふものを痛感せしめられるものである。

(1) Angke

バンタム、ジャカトラと英國の合作を妨害す

〔註 57〕 Fruin Mees; Ibid. Deel I, p. 80.

〔註 58〕 Du Bois; Ibid. p. 43.

包圍軍側の聯絡が全く統一を缺いて居たのは事實であるが、それでも英國とジャカトラの間には協力が成立しようとした事があつた。一六一九年一月末、英國はジャカトラ王に二千リアルの

金を拂つて協定を結び、和蘭人をジャカトラから驅逐する事、和蘭要塞を占領して分捕品を分配する事を約せしめた。そして更に許可を得て、和蘭人に破壞された英國商館の跡に砲臺を築き、一日に英國に降伏を申し込み城砦明け渡しに應じたのである。和蘭・英國・ジャカトラの三者の間に、和蘭は城砦及び武器を引き渡す事、和蘭人は英國船によりコロマンデル海岸に送られる事、チリヴン河に橋をかけて攻撃の態勢を整へた。こゝに於いて和蘭人は到底敵し難さを悟り、二月ジャカトラ王は和蘭所有の金・商品及びその他の物品を得て捕虜を釋放する事等の條件が決定された。所がこゝに心中面白くないのはバンタムであつた。この協定成立を知るや直にラナマンガラはバンタムの英國商館の破壞を以つて脅迫し、ジャカトラに於ける英國の砲臺建設工事を妨害し、ジャカトラ藩王に對して和蘭捕虜の引渡を求めた。英國船隊は急遽バンタムに急行して商館保護の任に當り、こゝに英國・ジャカトラの合作は破れて和蘭は城砦を全うし得たのである。(註59)

〔註 59〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 81-82.

この妨害に成功を收めたのでラナマンガラは更に二月十五日ジャカトラ藩王をタナラ(1)の山中に驅逐して、王の財產を沒收し領地を併合した。そしてジャカトラが再びバンタムの競爭者になる事がなく、和蘭人に對してもその生殺與奪の權を握り、バンタムに止るか、ジャカトラに居住

するか、マンクブミの自由になるであらうと思つた。こうして次にバンタムは和蘭側にクーンの歸還迄保護するから城砦を明け渡すように申し入れたが、和蘭人は彼等の誠實に信賴をかけず拒絕し、要塞を死守せんと決心したのである。事實バンタムはこの裏面で英國と或る程度の交渉を進めて居たのである。(註60)

〔註 60〕 Fruin Mees; Ibid. Deel I, p. 82.

三月の始めに若干の和蘭船がジヤカトラに來り此處に於ける情勢をクーンに知らせるため直にアンボイナに向つた。(註61)

〔註 61〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 82-83.

和蘭要塞をバタビヤと命名

三月十二日に和蘭人は城砦に、昔ネーデルラントに住つて居たバターフ(1)人にちなんで、バタビヤと命名した。四月に入つても包圍軍は何等の活動を見せず、その故に和蘭人の勇氣はますます〳〵上りチリヴン河對岸の砲臺を占領した。そして遂に五月二十八日クーンが十七隻の大艦隊を率ひてチリヴン河口に來着したのである。(註62)

和蘭の勝利

〔註 62〕 Fruin Mees; Ibid. Deel II, p. 83.

(1) Bataven

クーンはジヤカトラに到着するや、翌二十九日に千餘名の兵を上陸せしめて土民軍を攻撃した。この日から翌三十日にかけて攻撃は熾烈を極め、市街は殆んど灰燼に歸し、一部逃れる事を得た者の外大部分の土民は虐殺された。その數大凡七、八千名と云はれる。たゞ奴隷及び享樂の對象として婦人と子供が殘されたのみであつた。次いでクーンはバンタムに至り、王を脅迫して共處に監禁されて居た和蘭人を釋放せしめたのである。(註63)

〔註 63〕 Du Bois; Ibid. p.61-62.

かくの如くして此處にジヤカトラ攻略戰は和蘭の決定的な勝利を以つて終りを告げたのであつた。そして待望久しき根據地を確保しバンタム市建設の第一歩が、ジヤカトラ廢墟の跡に進められた。この第一歩は又和蘭の東印度支配權確立の第一歩でもあつた譯である。

十七八世紀バタビヤ城の外観